

相對的剩餘價
値の場合には
は、資本のも
とへの労働の
形式上の從屬
の代りに、實
質的な從屬が
現はれる

對的剩餘價值の生産が行はれようといふ場合には、労働日はすでに二つの部分に——必要労働と剩餘労働とに——分割されてゐる。かゝる前提のもとに労働日を延長することなくして剩餘労働時間が延長されるのは、(労働日を延長することによつて剩餘労働時間を延長するのは、依然として絶對的剩餘價值の生産である。)『労働の等價物がより僅かな時間で生産されるやうな方法によつて、必要労働が短縮される』場合に限られる。しかも労働の等價物がより僅かな時間で生産されるやうになるためには、生産方法の上に何等かの變化が起るのでなければならぬ。だから『絶對的剩餘價值の生産は、たゞ労働日の長さのみ問題とするが、相對的剩餘價值の生産は、労働の技術的過程と社會的編制とを徹底的に變革する。』だからまた相對的剩餘價值の生産は、『資本の協力なしに歴史的に傳へられた經營の仕方』をそのまま維持しては行はれない。それは『資本の下への労働の形式的從屬の基礎の上で始めて自然發生的に成立し且つ發達せしめられるところの獨特な方法や手段や條件やを具へた・特殊な資本家的な生産の仕方を前提する。』従つて相對的剩餘價值の生産の場合には、『資本の下への労働の形式上の從屬の代りに、實質的な從屬が現はれる。』(カウツキー版、四四九頁。)

高利貸および
商人による剩
餘價值の搾取

【註】 奴隸制等々における如く剩餘労働が直接の強制によつて労働者から搾取されるのではなく、それかと云つて労働者が形式上資本のもとに從屬してゐるのではないと云ふやうな、間の子の形態がある。それは資本家的生産の成立以前における高利貸および商人による剩餘價值の搾取である。『この場合には資本はまだ直接に労働過程を征服してゐない。古くから傳へられた因襲的な經營の仕方ですら工業なり農業なりに従事してゐる獨立の生産者と並んで、寄生的に彼等の血を吸ふところの高利貸または商人・高利貸資本または商業資本が現はれる。かゝる搾取形態が或る社會において優勢であれば、そこでは資本家的な生産の仕方は排除されてゐるが、他方においてそれは、中世の後期における如く、資本家的な生産の仕方への推移を形成しうる。』これらの高利貸資本および商人資本については、吾々は後の第三卷において詳しくこれを觀察するであらうが、要するにこれらの資本は、未だ直接に生産過程を支配するに至

らざりし・従つて社會的に未だ支配的の勢力を有するに至らざりし・資本である。例へば當時の商人資本はまだ労働力を商品として買入れることができず、(商人資本はあらゆる商品を買ひえたけれども、労働力といふ商品のみは之を買ひえなかつたのである、(従つて自から商品を生産することが出来なかつた。小規模の獨立生産者たる手工業者や農民は、これらの資本により彼等の労働力そのものを買取られてゐたのではない。たゞその生産物を價值以下に踏み倒されることにより、その剰餘労働を吸ひ取られてゐるに止まる。資本家的生産が行はれるやうになると、すなはち資本が直接に生産過程を征服し資本自身が労働力を買取つて自分の手で剰餘労働を絞り取るやうになると、商人資本や高利貸資本は派生的な第二次的な資本形態に屬することになる。だからこれらのものが『或る社會において優勢であれば、そこでは資本家的な生産の仕方は排除されてゐる。』が、しかし他方においては、吾々が後に第七篇において見るやうに、これらの商人資本や高利貸資本は、ある場合には資本家的生産にとつて本源的蓄積の役割を果してゐたもので、その意味においてそれは『資本家的な生産の仕方への推移』を形成したのである。『最後に、近代的家庭労働の例が示すやうに、一定の間の子の形態は、全く變化された外觀をもつてではあるが、大工業の背後において所々に再生産される。』

相對的剰餘價
値の生産のた
めの方法は、
同時にまた絶
對的剰餘價値
の生産のため
の方法となる

以上述べたるが如く、絶對的剰餘價値の生産は相對的剰餘價値の生産にとつてその出發點となるものであるが、しかし他方において、相對的剰餘價値の生産のための方法は、同時にまた絶對的剰餘價値の生産のための方法となる。(カウツキー版、四四九頁參照。) 吾々はすでに第十三章の第三において『機械經營が労働者に及ぼせる直接の諸結果』を述べし際、その二において、『労働時間の延長』と題する一項目を設け、機械經營に基づく大工業が如何に労働日の延長に對して飽くことなき渴望を有するかを述べた。機械は相對的剰餘價値の生産のための有力な手段となつたものだが、しかしそれは同時に、労働日の延長を可能ならしめるための諸條件を創り出し、『自然に適つたあらゆる制限以上に労働日を延

長するための最も有力な手段（カウツキ一版、三四七頁）となつたのである。これによつても明かなやうに、資本家的な特殊の生産的技術——生産過程が資本の支配の下に屬することにより蒙るところの技術的變革——は、相對的剩餘價值の生産のためのみの手段となるのではなく、それは更にまた絶對的剩餘價值を生産するための手段にも利用されるのである。

『總じて特殊の資本家的な生産の仕方は、それが一生産部門の全體を征服するや否や、殊にそれが總ての決定的な生産諸部門を征服するや否や、單に相對的剩餘價值の生産のための手段たることをやめる。今やそれは生産過程の一般的な・社會的に支配的な・形態となる。』そしてそれは同時に、相對的剩餘價值の生産のための・並びに絶對的剩餘價值の生産のための・手段となる。資本家的な生産の仕方が相對的剩餘價值の生産のための特別な方法としてのみ作用するのは、『第一には、資本家的な生産の仕方がこれまでとはたゞ形式上でのみ資本に從屬してゐた産業を把握する限りにおいて、すなはち資本家的な生産の仕方が次第に擴大される方面において』であり、『第二には、すでに資本家的な生産の仕方に歸屬してゐる産業が生産方法の變化によつて引續き變革されてゐる限りにおいて』である。

絶對的剩餘價值と相對的剩餘價值との區別は或る見地のもとでは明瞭でない

資本家的な生産の仕方が相對的剩餘價值の生産のための方法として作用する場合

以上見來つたやうに、絶對的剩餘價值の生産と相對的剩餘價值の生産とをその相互の關聯において統一的に把握するといふ見地に立つと、多くの場合そこには、はつきりした區別がないやうになる。すなはち『ある見地からすれば、絶對的剩餘價值と相對的剩餘價值との區別は總じて虚偽であるやうに見える。』何故といふに、絶對的剩餘價值は、労働者自身の生存に必要な労働時間以上に労働日が延長されると云ふことによつて成り立つのだが、しかも相對的剩餘價值は、労働日の絶對的の長さが以上の點を超えて延長されてゐると云ふことを條件とするのであり、また相對的剩餘價值は、主として労働の生産力の増進によつて生じるのだが、しかも絶對的剩餘價值はまた、『必要労働時間を労働日の一部に局限すること
を可能ならしめるやうな、労働の生産力の或る發展を條件とする』のであるから。『だが吾々がもし剩餘價值の變動を眼中に置くならば、かゝる同様の假象は消滅する。資本家的な生産の仕方が一たび確立されて、それが一般的な生産の仕

剩餘價值の増加が問題となる場合に、絶

對的剩餘價值
と相對的剩餘
價值との差異
は明白になる

方になつてしまつたならば、〔資本家な生産の仕方は相對的剩餘價值の生産の手段となると同時に、絕對的剩餘價值の生産の手段となるのであるが、しかし〕總じて剩餘價值率を高めるといふことが問題とされるかぎり、絕對的剩餘價值と相對的剩餘價值との差は感知しえられる。』すなはち以前からの假定に基づき労働力はいつでもその價值通りに支拂はれてゐるものとするなら、剩餘價值率を高めるためには、(一)もし労働の生産力と強度とが一定してゐるなら、労働時間の絕對的延長によるの外はなく、(二)また労働時間が一定してゐるなら、労働の生産力または強度を高める外に道はないのである。そして前の場合には絕對的剩餘價值の生産が行はれ、後の場合には相對的剩餘價值の生産が行はれるのであ

る。

第十五章 勞働力の價格と剩餘價值との大きさの變動

本章の問題

本章は剩餘價值率の變動に關する概括的説明を與へることを目的とする。尤も剩餘價值率については、吾々はすでに第七章でこれを研究してゐる。しかしここでは、絕對的剩餘價值の生産の見地からのみ、これを觀察したに止まる。従つてここでは、吾々は勞働日の絕對的の長さのみを可變的なものとなし、勞働の生産力も、(従つて勞働力の價值も、)勞働の強度も、すべて不變的であると假定した。しかし吾々はその後の段階において、相對的剩餘價值の生産を觀察するにあたり、勞働の生産力および強度の増進について詳細なる研究をなした。だから吾々は改めて、剩餘價值率を左右する條件として、勞働日の大きさの變動の外に、勞働の生産力の増進および勞働の強度化をも加へ、これらの諸條件を相互の關聯において統一的に概括することが必要である。本章はその目的のために置かれたものである。だから内容は、(一)勞働の生産力のみが變化する場合、(二)勞働の強度のみが變化する場合、(三)勞働日の長さのみが變化する場合、(四)最後に以上の三者が同時に變化する場合の考察から成り立つてゐる。

問題の意義

なほここに問題とするところは、勞働力の價格〔すなはち勞賃〕と剩餘價值〔すなはち資本家の所得となるもの〕との相對的な大きさの變動についてであるが、この問題は、後にも説明する如く、社會の總生産物に對する資本家階級の分け前と勞働者階級の分け前との割合を決定するものとして、極めて重要な意義を有する。

【註】 この章の冒頭には、第一版では(第二版以後に削除された)次の章句が置かれてゐた。

『吾々は第三章第三節(今日の版本の第三篇『絕對的剩餘價值の生産』の第七章『剩餘價值率』に相當する)において剩餘價值率を分析したが、しかしそれは絕對的剩餘價值の生産の見地からのみであつた。第四章(今日の版本の第

四篇『相對的剩餘價値の生産』に相當する』において吾々は補足的な諸規定を見出した。こゝには後々の使用のためにそれらの要點を簡單に概括しておく。』

研究に入るに先だち、吾々は若干の假定を確立しておく。

假定の一、労働力の價値は生活資料の價値の變動によつてのみ變動する

第一は、労働力の價値であるが、それは生活資料の價値によつてのみ變動し、従つてその變動は労働の生産力の變動にのみ依存するものと假定する。『すでに吾々の見たる如く、労働力の價値は平均労働者にとつて普通に必要となつてゐる生活資料の價値によつて規定されてゐる。かゝる生活資料の分量は、その形態は變動するにしても、一定の社會の一定の時代に與へられてをり、従つて不變の大きさとして取扱ふことができ。變動するのは斯かる一定分量の生活資料の價値である。なほ労働力の價値決定には、二つの他の要素が入り込む。その一は労働力にとつての教育のための費用であつて、これは生産の仕方の變化につれて變化する、他は労働力の自然的差異であつて、すなはちその労働力が男性のであるか女性のであるか、成年のであるか未成年のであるかの差異である。かゝる種々なる労働力の使用は、更に生産の仕方によつて制約されるが、それは労働者の家族の再生産の費用に、また成年男工の價値に、大なる差異を生ぜしめる。だがこれら二つの要素は、以下の研究では除外しておく。』(カウツキー版、四五六―四五七頁。)

假定の二、労働力の價値はその價値以下には下がらない

労働力の價値は以上の如き原因からのみ變動するものと假定する上に、なほ労働力の價格は決してその價値以下に押し下げられることなきものと假定する。もちろん實際においては、資本家は絶えず勞賃(労働力の價格)を労働力の價値以下に引下げようとする。なぜといふに、必要労働時間が一定してゐるかぎり、剩餘價値の生産は労働日の延長によつて増加されるの外ないが、しかし『労働者が彼れの労働力の價値に對する等價物を生産する』ために必要な時間としての『必要労働時間』は、資本家の立場からすれば、彼れが労働者に支拂ふ勞賃を労働力の價値以下のものたらしめることによつて、彼れが労働者に對して支拂つた價値に對する等價物を生産するために必要な時間を短縮することができ、従つて剩餘

勞働時間を延長しうるからである。それゆゑに、勞働時間をめぐつての鬭争と共に、勞賃（の引上げ又は引下げ）を中心とする鬭争は、資本と勞働との間における日常の鬭争の最も主要なる題目となるのである。だがこゝでは、『吾々は、（一）諸商品は、その價值通りに販賣されるといふこと、（二）勞働力の價格は時折その價值以上に上ぼることはあつても、決して價值以下には下落しないといふこと、を假定する。』

吾々の研究對象となる四つの場合

『さて一たび以上の如く假定するならば、勞働力の價格（すなはち勞賃）と剩餘價值との相對的の大きさは、次の三つの事情によつて制約されるのであつた。（一）勞働日の長さ、すなはち勞働の外延的の大きさ。「勞働日が長ければ長いほど、剩餘價值の分量は大きくなる。」（二）勞働の標準的な強度、すなはちその内包的の大きさ、これが一定してゐれば一定の時間内に一定の勞働量が支出される。「勞働の強度が高ければ高いほど、剩餘價值の分量は大きくなる。」（三）最後に勞働の生産力、これによつて同一量の勞働が生産諸條件の發展程度に應じて同一の時間内に供給するところの生産物の分量の大小が定まる。「勞働の生産力が高まれば高まるほど、剩餘價值の分量は大きくなる。」以上の三つの要素の一つが不變であつて二つが變化するか、あるひは二つが不變であつて一つが變化するか、あるひは最後に三つのものが同時にすべて變化するかによつて、極めて異なつた結合が明かに可能である。更にかゝる結合は、種々なる要素が同時に變化し、しかもその變化の大きさと方向とが種々でありうると云ふことのために、更に複雑にされる。次にはたゞ主要の結合を示すに止める。』

一 勞働日の長さも勞働の強度も不變であつて、勞働の生産力が變化する場合

勞働の生産力
増加が剩餘

機械の發明以來今日に至るまで、勞働の生産力は絶えず急速なる進歩をなしつつある。しかるにそのことは、こゝに説

明する如く、社會の總生産物に對する勞働者階級の分け前の絶間なき相對的減少を招く原因であるから、（そしてこのとは更に消費力の不足に伴ふ資本家的生産の行詰りの原因となるものであるから）特に吾々の注意を要する。さて吾々の前提せるが如き場合には、勞働力の價値と剩餘價値とは、次の三つの法則によつて規定される。

一、勞働の生産力が變化すれば、それによつて一定分量の勞働によつて生産される生産物の分量に増減を生じ、従つてまた商品一單位の價値は變動するが、しかし一勞働日の生産物の總價値は（勞働時間も勞働の強度も不變なのだから）不變である

二、勞働力の價値と剩餘價値とは互に反對の方向へ動く。勞働の生産力が増加すれば、それに比例して勞働力の價値は下落し、剩餘價値は増加する、また逆の場合は各々逆である。

三、剩餘價値の増加または減少は、それに適應する・勞働力の價値増加または減少の結果であるに止まり、決してこれが原因とはならない。假に勞働の生産力が増加した場合について、この第三の法則を考へて見よう。勞働の生産が増加するならば、すでに第四篇第十章で見たやうに、勞働力の價値が下落する。そこでもし勞働力の價格〔勞賃〕がその價値の下落に正比例して下落するならば、剩餘價値もまたそれに正比例して増加するわけであるが、しかしたとひ勞働力の價格がその價値の下落ほどに下落しなくとも、剩餘價値の分量は増加する。例へば、假に一日十二時間分の勞働が、八時間分の必要勞働と四時間分の剩餘勞働とに分割されてゐるとする。そしてその一日十二時間分の生産物の價値を三圓とするならば、勞働力の價値は二圓に相當するのであり、それを差引いた残りの一圓が剩餘價値である。しかるに今、勞働の生産力が高まつた結果、必要勞働時間が八時間から六時間に減少し、勞働力の價値は二圓から一圓五十錢に減少したとする。かゝる場合に、もし勞働力の價格が直ちにその價値の下落に正比例して下落するならば、以前二圓であつた勞賃は一圓五十錢に下落するはずだが、しかしそれほごまで下落しないで、例へば一圓八十錢、一圓七十錢、一圓六十錢、等に止まる場合がありうる。しかしそれでも剩餘價値は、以前の一圓から一圓二十錢、一圓三十錢、一圓四十錢、等々に

労働者と資本家との間における生活状態の懸隔は益々甚しくなる

増加するのである。かゝる場合に勞賃の下落が如何なる程度まで一圓五十錢に近づくかは、『一方の側では資本の壓力が・他方の側では労働者の反抗が・天秤皿に投げ入れる相對的な重量に依存する。』そして勞賃の落ち着く點が一圓五十錢よりも高ければ高いほど、それに應じて労働者の入手しうる生活資料の分量は以前よりも増加し、労働者の生活程度の上が行はれる。(そしてその向上した生活程度が習慣的のものとなれば、それが労働力の價值を規定する規準となる。)之を要するに『労働の生産力が高まるにつれて、労働力の價格は引續き下落しながら、しかもそれと同時に労働者の生活資料は引續き増加する、といふことがありうる。だが相對的には、すなはち剰餘価値の大きさ』と比較すれば、労働力の價值の大きさは絶えず下落し、従つて労働者と資本家との間における生活状態の懸隔は益々甚しくなる。(カウツキー版、四六〇頁。)

【註】以上の考察は、労働の生産力の發展が、必然的に如何なる影響を、相對的剰餘価値の生産の上に・従つてまた資本家階級と労働者階級との間における生活状態の懸隔の上に・及ぼすかを、明かにしたものである。今このことが階級闘争の上に如何なる關係をもつかについては、私はかつて『階級闘争の必然性とその必然的轉化』と題する小篇において、これを論述した。それは今では、私の著作『マルクス主義經濟學』(『改造文庫』)の附録に收めてある。以下本註の終りに至るまでの諸章句は、右舊著からの引用である。

相對的剰餘価値の生産増加は、労働者の提供する總労働のうち資本家に搾取される部分が次第により多くの部分を占めるに至ることを意味する。このことは、資本家階級と労働者階級との間における貧富の懸隔が年一年甚しくなるといふ現象の上に、それ自らを表示する。だから労働者階級の生活が次第にみじめになるのは、彼等の労働の生産力(彼等の労働が有用物を造り出す力)が低減したためではない。むしろ逆に、彼等の労働の生産力が高まり、従つて彼等が一定分量の労働をもつて益々多量の生産物を生産するに至りつゝ、あるがゆゑに、そのために、またそれに比例

労働の生産力が高まるために労働者の生

活状態は相對的に下落する

して、社會の總生産物に對する彼等の分前は益々減少し、彼等の社會的地位は相對的に益々みじめとなるのである。一言にして覆へば、資本家階級と労働者階級とに對する社會總生産物の分配は、労働の生産力の發展程度に適應して規定されて行くのであり、このことが絶えず労働者階級の社會的存在を憐むべきものに轉化してゆくのである。

貧富の懸隔が甚しくなるさいふことは、必ずしも労働者の生活が絕對的にみじめになるといふ意味ではない。たゞ資本家との比較において相對的にみじめになるのである。假りに資本家階級を天となし、労働者階級を地となせば、天も地も共に高まる。しかし労働者階級の生活を表示せる地は、極めて徐々に高まるに反し、資本家階級の富を表示せる天は、飛躍しつゝ登る。天と地とは年一年その懸隔を甚しくする。

『無産者政治必携』(昭和二年刊行)によると、一日に千圓以上の所得を有する金持は、京濱地方だけで三十名ある。そのうち岩崎久彌氏の所得は一ケ年四百三十萬圓であるから、一日につき一萬圓以上であり、三井一門(三井八郎右衛門、源右衛門、等々)の所得は一ケ年合計約千二百萬圓であるから、一日につき三萬四千八百圓である。これを一日一圓の所得しかないものに比較すれば三萬倍であり、一日三圓の所得を有するものに比較しても一萬倍以上である。日本においても事態はすでにかゝる程度にまで進展してゐるのである。

今吾々にとつては、同一の社會内における斯かる懸隔が問題なのである。『家は大きくとも小さくとも之を圍繞する他の家々が一樣に小さければ、それは住居としての總ての社會的要求を充たす。けれども小さな家の側に一個の宮殿が建てられ、その小さな家が小屋の様になつたとする。そうになると、その小さな家は、これに住居してゐるものが、何等の權利をも主張し得ないものか、または極めて僅かな權利しか主張しえないものだといふことを證明するわけだ。そして文明の進歩に伴ひ、その家はなほ如何に高くなるとも、もしこれに隣する宮殿が、同じ程度または遙かにそれ以上の程度をもつて高くなるならば、比較的比較的に小さな家の住人は、常にその四壁のうちで益々不快に、益々不満

相對的勞賃の
低落の社會的
意義

に、益々不景氣に感ずるであらう。』(『賃労働と資本』、河上譯本、昭和二年刊、五七頁。)かくて不平不満は次第に社會の下層に集積されてゆく。

何人の意思にも基づかざる必然的結果

労働の生産力の發展に伴へる相對的剰餘價值の遞次的増大、従つてまた相對的勞賃——『資本家の利得すなはち利潤に對する勞賃の關係、關係的の・相對的の・勞賃』(前掲書、六一頁)——の遞次的減少、かゝる結果が労働者の意圖に基づかざるは勿論のこと、それは資本家の意圖に基づくのでもない。すでに述べたやうに、個々の資本家はたゞ競争場裡において勝を制せんがためにのみ労働の生産力の増加に努力するのである。そしてこれら個々の資本家思ひ思ひの活動の總體の結果が、資本家階級のために相對的剰餘價值の増大となつて現はれるといふことは、彼等の意圖および意識から全く獨立してゐるところの事實の必然なる連鎖に基づく。資本家的な生産の仕方を前提とするかぎり生産力の發展が此の如き結果をもたらすといふことは、『鐵の如き必然性をもつて作用し自己を貫徹する』ところの『資本家的生産の自然法則』である。それゆゑにそれは、資本家的生産そのものを止揚するにあらざれば、止揚することゝをえない。商品生産の法則に立脚する——従つて商品世界の法則から見て合法的な——改良主義的諸運動の限界はかくして生じる。労働力をその價值通りに賣らんための努力は労働力の價值そのものの遞次的減少といふ事實の前に無力となる。甲は乙を西に引張らうとして、乙は甲を東に引張らうとして、相互に闘争してゐる場合に、甲も乙も共に同じ汽車に乗つてをり、そしてその汽車自體は甲および乙の意圖からは獨立に、それ自身が急速度をもつて東に走りつゝあるならば、共同の地盤そのものを問題とせざるかぎり、甲の敗北は明白である。それゆゑに階級闘争は第一期の限界を突破することにより、質的變化を閱みせざるをえない。商品法則の基礎の上における闘争は、商品法則そのものについての闘争——非××的なる、××的なる闘争——に轉化する。

労働組合の機能

『労働組合は、資本の蠶食に對する抗争の中心としては、立派な働きをする。もちろん彼等は彼等の力の無分別な

る使用のため、部分的に失敗することはある。「だが」もし彼等にして、現存制度の結果に對するゲリラ戦にのみ自らを局限し、「現存の制度なる資本主義制はそのまゝにしてにおいて、たゞこの制度から必然的に生ずべき結果に對してのみ、小ぜり合ひの戦をなすことに、その運動を局限し、」それと同時に現存の制度を變革せんと試みることなく、彼等の組織された力をば、労働者階級の最後の解放・すなはち勞賃制度（労働力が商品として買買される制度、——資本主義制そのもの）の窮極の廢止・に向つての一槓杆として使用することなくば、彼等は全般的に失敗する。』（『勞賃・價格・および利潤』、前掲の河上譯本、大正十四年刊、七八頁。）無産階級の利益を圖るといふ看板のもとに、運動を改良主義の埒内に閉ぢ込めんとするものは、それゆゑに、運動の『全般的失敗』を計畫しつゝあるものであり、『労働者階級の最後の解放』を永久に阻止せんとするものであり、労働者階級の最悪の敵である。

資本家的な生産諸關係の埒内において發展したる生産諸力は、それを孕める母胎と兩立しえなくなる。『これらの諸關係は、生産諸力の發展諸形態からその桎梏に轉化する。こゝにおいてか社會革命の時代が到來する。』（『政治經濟學批判』河上・宮川共譯本、七二頁。）

二 労働日の長さも労働の生産力も不變であつて、労働の強度が變化する場合

この場合は、大體において、資本家的合理化により労働の強度が急速に高められつゝある現段階の事情に當てはまるがゆゑに、特に注意を要する。

すでに述べたやうに、労働の強度が高まるとは、同一の時間内により多くの分量の労働が支出されるに至ることである。だから労働日の長さも不變であり、労働の生産力も不變であつても、労働の強度が高まれば、一日のうち以前よりもよ

り多くの分量の生産物が生産される。その點では、労働の生産力が増加した場合と同じである。だが、労働の生産力が増加した場合、同じ分量の労働でより多くの分量の生産物が生産されるのだから、生産物の一單位の價值は減少するけれども、労働の強度が高められたに止まる場合は、生産物の一單位の價值は不變である。だからこの場合には、生産物の分量が増加するにつれて、その價值總額が、従つてまたその價格總額が増加する。(この場合商品は價值通りの價格をもつものと假定されてゐるのだから、價值總額が増加するなら、それと同時に價格總額も増加する。)例へば、以前一日十二時間分の價值生産物が三圓であつたとすれば、労働の強度が高まるにつれて、それは三圓半、四圓、等々に増加する。だからこの場合には、價值生産物の二つの部分たる労働力の價格と剰餘價值とが、同じ程度をもつて又は同じからざる程度をもつて、同時に増加しうるのである。(フォード自動車會社の場合を見よ、剰餘價值は恐ろしく増大したが、しかしそれと同時に賃銀も何程か増加したのである。)かゝる場合における労働力の價格(勞賃)騰貴は、その價格がその價值以上に高まるといふことを必然的に含んでゐるのではない。『労働力の價格騰貴は逆にその價值の或る下落を伴ひうる。労働力の價格騰貴が労働力の急速なる消耗とを相殺しない場合には、そのことが常に起る。』(過度なる労働の強度化のため、例へば二十歳から六十歳まで滿四十年労働しうるものが、僅に四十歳で倒れることになれば、労働力は一日のうちその二日かが消耗される。だから一日の労働額は二割や三割増加したとて、それは遙に労働力の價值以下のものとなるのである。)資本家的合理化の強制されつゝある今日では、このことが到るところ例外なしに起りつゝある。

すでに述べたやうに、労働の生産力の増進は、(それが一生産部門の全體に行き渡らず、單にその部門内に於ける若干の資本家のみが同業者に卒先してこれを實現した場合は、當該資本家のために剰餘價值を増加する作用をなすけれども、さういふ例外的な一時的な場合を除外するならば)それが實現された生産部門の生産物が労働者の普通の消費圏内に屬するものである場合に限つて、労働力の價值を減少せしめ、従つて剰餘價值を増加せしめるのであるが、労働の強度の増進

一定程度の労働の強度化がすべての生産諸部門に行き渡つた場合には、それが労働の普通の強度になる

が剰餘價値の増大に及ぼす影響には、かゝる制限はない。それは生産される品物の性質とは無關係である。生産物は資本家階級のみが消費する奢侈品であつても、労働の強度が高まれば、それに應じて一日の生産物の總價値は増加する。

だが、『労働の強度がすべての産業諸部門において、同時に且つ同じ程度に高まつたならば、』しかる限りにおいて、『新たに高められた程度の強度が普通の社會的な標準程度となり、従つてそれはより大なる分量のものとして計算されることをやめる。』（カウツキー版、四六二頁。）商品の價値を規定するところの・その商品に含まれた労働の分量なるものは、社會的平均程度の強度をもつた労働をもつて計算の規準とするといふことは、吾々がすでに第一章の第一において述べたところである。だから新たに高められた労働の強度が普通の平均程度のものとなれば、一時間分の労働は一時間分の労働として計上されるだけのものになる。尤も労働の強度の平均程度そのものは、種々なる國民の間において依然として一定の相違をもちうるのであり、そして然るかぎりにおいては、『強度の高い方の國民の一労働日は、比較的強度の低い他の國民のそれに比し、より高き貨幣表現で自らを表示する』ことになるのである。

三 労働の生産力も強度も不變であつて、労働日の長さが變化する場合

【註】 エンゲルス版とカウツキー版とでは、この部分の叙述が異なつてゐる。（英譯本は英譯本でまた相違してゐる。）カウツキー版は、マルクスが校閲した舊フランス譯に據つたものの如くである。こゝではカウツキー版に従ひ且つなるべく本文を引用するやうにして置く。

『労働日は二つの方向に變化しうる。それは短縮されもするし延長されもする。新たなる諸條件のもとでは、〔すなはち労働の生産力も強度も不變であるといふ條件のもとでは、〕吾々は次の諸法則を得る。

『一、労働日（一日の労働）が體化する價値の大きさは、労働日と同じやうに變化し、労働日の延長または短縮につれて

労働日の延長または短縮が剰餘價値の相對的な大きさに及ぼす影響

増加しまたは減少し、従つて可變的であつて、不變的ではない。

『二、剰餘價值と労働力の價值との間における大きさの割合における一切の變動は、剰餘労働の・従つてまた剰餘價值の・絶對的な大きさににおける變動に起因する。』

『三、労働力の絶對的價值（剰餘價值の大きさに對する割合から見た相對的價值でなく、その價值の絶對的な大きさ）は、剰餘労働の延長が労働力の消耗に及ぼす反作用によつてのみ變動する。（労働日が或る限度を超えて延長されるなら、一日のうちに例へば一日と五分の一の労働力が消費されるやうになり、それにつれて勞賃は高まらねばならぬ。）』だから、労働力の絶對的價值のあらゆる變動は、剰餘價值の大きさにおける或る變動の作用であつて、決してその原因ではない。（カウツキー版、四六二—四六三頁。）』

『吾々は本章において、後々も同様であるが、労働日は最初十二時間で、必要労働の六時間と剰餘労働の六時間とから成つてをり、また生産物は六シリングになり、そのうちの半分は労働者に歸し、他の半分は資本家に歸するといふことを、いつも前提としておく。』

そこで先づ労働日の短縮について觀察しよう。假にそれが十二時間から十時間に短縮されたとする。さうすると生産される生産物の價值は五シリングになる。剰餘労働は六時間から四時間に短縮され、剰餘價值は三シリングから二シリングに落ちる。そのために剰餘價值と労働力の價值との割分に變動が起る。その比は以前は三對三であつたが、今では二對三となる。だから労働力の價值は、絶對的には以前と同じだが、その相對的の大きさは増加する。それは三對三から三對二になる。

『與へられた諸條件のもとにおける・すなはち労働の生産力と強度とが不變な場合の・労働日の短縮は、かくて労働力の價值を・従つてまた必要労働時間を・變化せしめない。それは剰餘労働を短縮し、剰餘價值を減少する。剰餘價值の絶對』

労働日が短縮
される場合

労働日が延長
される場合

的、な、大、き、さ、が、減、少、す、る、と、共、に、その、相、對、的、な、大、き、さ、す、な、は、ち、勞、働、力、の、價、値、の、不、變、の、大、き、さ、に、對、す、る、割、合、か、ら、見、て、の、その、大、き、さ、が、減、少、す、る。資、本、家、は、勞、働、力、の、價、格、を、その、價、値、以、下、に、引、下、げ、る、こ、と、に、よ、つ、て、の、み、損、害、を、免、れ、う、る、で、あ、ら、う。『勞、働、時、間、の、短、縮、に、反、對、す、る、も、の、は、す、べ、て、之、を、も、つ、て、理、由、と、す、る、の、だ、が、し、か、し、か、る、結、果、が、生、じ、る、の、は、勞、働、時、間、の、短、縮、に、も、拘、ら、ず、勞、働、の、生、産、力、も、強、度、も、全、く、不、變、で、あ、る、と、假、定、さ、れ、て、あ、る、か、ら、で、あ、り、』し、か、も、實、際、に、お、い、て、は、勞、働、の、生、産、力、お、よ、び、強、度、の、上、に、逆、の、變、化、が、〔勞、働、時、間、の、短、縮、と、は、反、對、に、その、増、加、が、〕勞、働、日、の、短、縮、に、先、だ、つ、て、起、る、か、ま、た、は、直、接、そ、れ、に、伴、ふ、か、で、あ、る。』(カ、ウ、ツ、キ、ー、版、四、六、三、頁。)

次、に、勞、働、日、の、延、長、に、つ、い、て、觀、察、し、よ、う。假、に、そ、れ、が、十、二、時、間、か、ら、十、四、時、間、に、延、長、さ、れ、た、と、す、る。さ、す、れ、ば、〔剩、餘、價、値、は、絶、對、的、に、も、相、對、的、に、も、増、大、す、る。他、方、に、お、い、て、勞、働、力、の、價、値、の、大、き、さ、は、絶、對、的、に、は、不、變、の、ま、ま、だ、が、相、對、的、に、は、三、對、三、か、ら、三、對、四、に、下、落、す、る。第、一、に、掲、げ、た、諸、條、件、の、も、と、で、は、〔勞、働、日、の、長、さ、も、勞、働、の、強、度、も、不、變、で、あ、つ、て、勞、働、の、生、産、力、が、變、化、す、る、場、合、に、は、〕勞、働、力、の、價、値、の、相、對、的、な、大、き、さ、は、その、絶、對、的、な、大、き、さ、の、變、化、が、な、け、れ、ば、變、化、し、な、か、つ、た。し、か、る、に、今、の、場、合、は、逆、に、勞、働、力、の、價、値、の、大、き、さ、に、お、け、る、相、對、的、變、化、は、剩、餘、價、値、の、大、き、さ、の、絶、對、的、變、化、の、結、果、で、あ、る。』

『勞、働、日、の、延、長、と、共、に、勞、働、力、の、價、格、は、た、と、ひ、名、目、上、で、は、〔一、日、い、く、ら、と、い、ふ、點、か、ら、見、れ、ば、〕不、變、の、ま、ま、で、あ、り、た、と、ひ、騰、貴、さ、へ、し、た、と、し、て、も、その、價、値、以、下、に、下、落、し、う、る。』す、で、に、前、に、述、べ、た、や、う、に、勞、働、力、の、日、價、値、す、な、は、ち、一、日、分、の、勞、働、力、の、價、値、は、〔勞、働、力、の、標、準、的、な、平、均、持、續、期、間、す、な、は、ち、勞、働、者、の、標、準、的、な、生、存、期、間、と、適、應、的、な、標、準、的、な、人、體、に、適、合、し、た、・生、命、物、質、の、運、動、へ、の、轉、化、と、を、基、礎、と、し、て、見、積、ら、れ、る。一、定、の、點、ま、で、は、勞、働、日、の、延、長、と、不、可、分、的、な、勞、働、力、の、よ、り、大、な、る、消、耗、は、よ、り、大、な、る、補、償、に、よ、つ、て、相、殺、さ、れ、う、る。』詳、し、く、い、へ、ば、勞、働、力、の、消、耗、の、程、度、が、甚、し、く、な、る、に、つ、れ、て、榮、養、等、々、を、増、加、し、て、ゆ、け、ば、あ、る、一、定、の、程、度、ま、で、は、その、消、耗、を、償、う、て、ゆ、く、こ、と、が、出、來、る。だ、が、〔か、る、點、を、超、過、す、る、と、消、耗、は、幾、何、級、數、的、な、進、み、方、で、増、大、し、同、時、に、勞、働、力、の、一、切、の、標、準、的、な、再、生、産、と、活、動、能、力、と、の、諸、條、件、が、破、壞、さ、れ、る。勞、

働、力、の、價、格、と、勞、働、力、の、搾、取、さ、れ、る、程、度、と、は、互、に、釣、合、つ、た、大、き、さ、で、は、な、く、な、る。』(カウツキー版、四六四頁。) 言ふまでもなく此のことは、前に問題とした労働の強度の増進にもそのまま、妥當する。

四 労働日の長さ、労働の生産力と、その強度とが、

同時に變化する場合

労働日の長さ
と労働の生産
力とその強度
とが同時に變
化する場合

この場合には色々な變化の結び付きが可能である。三つの要素のうち何れか二つが變化して他が不變の場合もあれば、三つが同時に變化する場合もあり、また後の場合においても、その變化の方向や程度がまち／＼であつて、中には互に相殺し合ふものも起りうる。だが、それらの各場合は、以上述べた三つの主なる場合から適當に類推しえられるから、ここではただ二つの主な場合につき、簡単な注意を加へるに止めておく。

一、労働の生産力が低減し同時に労働日が延長される場合。

労働の生産力
が低減して勞
働時間が延長
される場合

こゝに吾々が問題とするところの労働の生産力の低減なるものは、労働者階級の生活資料を生産する部門におけるそれを指すので、例へば地力枯渴の結果、農業部門における労働の生産力が減退し、それにつれて農産物の價格が騰貴するが如き場合を指す。かゝる場合に勞賃が騰貴すると同時に労働時間が延長されたとするならば、その結果はこれらの二つの要素の變化の程度によつて異なる。前に假定したやうに、労働日はもと十二時間で、その生産物は六シリングで、そのうち半分は労働力の價值を補償し、他の半分は剰餘價值を形成してゐたものとする。かゝる前提のもとに、いま労働力の價值が三シリングから四シリングに騰貴し、従つて必要労働時間が六時間から八時間に増加したとする。かゝる場合に、労働日が二時間だけ(すなはち必要労働時間が増加しただけ)延長されるに止まつてゐたなら、剰餘労働は以前のまゝであり、従つて剰餘價值の絶對的な大きさも不變であるが、しかし労働力の價值に對する割合からいへば相對的に減少する。

だが、もし、労働日が四時間だけ延長されたなら、剰餘價値の絶對的な大きさは増加し、その相對的な大きさは不變である。もし労働日の延長がそれ以上になれば、剰餘價値は絶對的にも相對的にも増加する。「かゝる結果は、労働日の長さと共にその強度が同時に増大されたなら、一層速に實現される。」（カウツキー版、四六五頁。）一七九九年から一八一五年に至る間、イギリスで農産物の價格が騰貴した際には、（序ながら言つておくが、かゝる事情に刺戟されて、當時ウエスト、マルサス、リカアドウ、等々の學者が、收穫遞減の法則なるものを唱へ出したのである。）労働者の賃銀が（生活資料の騰貴と同じ比例においては）騰貴した。しかしそれと同時に、労働日は延長され、労働の強度も高められたために、當時剰餘價値は絶對的にも相對的にも増加し、かくて『急速なる資本の増大と労働者の窮乏化とが手を携へて進んだ。』

二、労働の強度と生産力とが増加し、同時に労働日が短縮される場合。

現在のソヴェート聯邦では、正にかくの如き變化の組合せが起りつゝある。

労働の強度と生産力とが増加するなら、労働者がその生活資料の生産のために必要とする労働時間は益々短縮される。

『總じて労働日の絶對的な最低限界は、労働日の斯かる必要な・しかし短縮しえられる・構成部分によつて形成される。もし全労働日がこの點まで收縮されたなら、剰餘労働は消滅するが、さういふことは資本の支配下では不可能である。たゞ資本家的な生産形態の排除が、労働日を必要労働の範圍に局限することを可能ならしめるのである。』ソヴェート聯邦では今や急速に資本家的な生産形態の排除が行はれつゝある。それゆゑにここでは労働時間の急速なる短縮が年々實現されつゝある。『尤も必要労働は、他の諸事情にして變化なければ、その範圍を擴大するであらう。何故なれば、一方では、労働者の生活諸條件が益々豊富になり、その生活諸要求が益々増大するであらうし、他方では、現在の剰餘労働の一部分は必要労働に・すなはち社會的な豫備および蓄積の元本を作るために必要とされるであらうとこの労働に・算入される

労働の強度と
生産力とが増
加すると同時
に労働時間が
短縮される場
合

てあらうから。』（カウツキー版、四六六頁。）

【註】 剰餘労働の問題については、『第二貧乏物語』の附録の第一となした『共産主義社會への展望（労働者の立場から見たソヴェート聯邦の發展）』の最初の部分にやゝ委しく述べておいた。（前掲書、昭和五年刊、三二三頁以下。）
ここでは簡単に次のことだけを附記しておく。

マルクスは『ドイツ労働黨の綱領への評註』（一八七五年）の中で、共産主義社會における社會の總生産物が如何に處理されるかを述べてゐるが、それによると、總生産物が社會成員の個人的消費の用に委ねられる前に、先づそれから次の三項目に屬するものが引き去らるべきである。

一、消耗されたる生産手段の回復のための填補。
二、生産擴張のために要する（生産手段の）添加分。

三、災害・天變地異・等々による攪亂に對する豫備または保險の元本。

『資本論』のこの個所にある言葉に當てはめれば、右のうち第二のものが『社會的な蓄積の元本』に相當し、第三のものが『社會的な豫備の元本』に相當するのである。

なほ『資本論』の第三卷の終り（エンゲルス版、第二分冊、三五四頁）には、次の如き言葉が用ひてある。

『興へられたる諸欲望の規準以上に出づる労働としての剰餘労働一般は、常に存在せねばならぬ。たゞ資本家的制度のもとでは、奴隸制等々のもとにおけると同じやうに、それが一の敵對的な形態を採つてをり、且つそれには社會の一部分のものの純粹な無爲が伴つてゐる、といふだけのことである。一定量の剰餘労働は、偶然に對する保險のため、また欲望の増進ならびに人口の増加に應じて必然的に行はれねばならぬところの・再生産過程の累進的擴張——それは資本家的立場からは資本蓄積と稱されるものだ——のために、ぜひ必要とされる、云々。』

この場合には、剩餘労働といふ言葉が『與へられた諸欲望の規準以上に出づる労働』といふ意味に用ひられてゐるから、それは如何なる社會においても『常に存在せねばならぬ』ものとなつてゐるのである。『資本論』のこの個所では、『偶然に對する保險』ならびに『再生産過程の累進的擴張』の元本を作るための労働は、剩餘労働としてでなく、必要労働として計上されてゐる。

『労働の生産力が増大すればするほど、労働日は益々短縮されうるし、労働日が短縮されればされるほど、労働の強度は益々増大しうる。』共産主義社會においては、強度の高い・しかし極めて短い時間の・労働が、必要労働とされるであらう。逆に資本主義社會の末期においては、現に吾々の見る如く、労働の生産力と強度との著しき増進にも拘らず、労働時間はたゞに短縮されざるのみか、却て延長されてゐる場合が少くない。

労働の節約および經濟的利用に基づく労働の生産力の増加

なほ『社會的に觀察すれば、労働の生産力はまた労働のエコノミー〔節約および經濟的利用〕によつても増加する。』それには、たゞに生産手段の經濟的利用のみでなく、すべての無用な労働の廢止が含まれる。(一定の時間内における或る個人の労働力の不生産的な消費が排除されるなら、その人の労働の生産力または強度が増加され、従つて當該個人の生産する生産物の分量の増加を齎らすのであるが、これを社會的に觀察すれば、生産手段や労働力が無用なことに使用され消費されるのを廢止すると、社會全體の労働の生産力が増加することになるのである。)『資本家的な生産の仕方は、銘々の個別的事業内でこそエコノミーを勵行してゐるが、同時にその無政府的な競争の體系は、社會的な生産手段および労働力の極めて法外な浪費を惹き起し、更に今でこそ缺くべからざるものであつても・それ自體としては贅物たる・數多くの諸機能を作り出してゐる。』資本家的生産形態の排除は、はじめて計畫的經濟の實現を可能ならしめ、無政府的秩序より生ずる浪費を省き、一の階級が他の階級を搾取するがためにのみ必要とされてゐる諸機能をすべて無用に歸せしめ、その點だけからしても、著しく労働の生産力を増進するであらう。

無政府的な競争に基づく浪費

【註】無政府的な競争の體系が必然的に生むところの各種生産部門の間における・ならびに生産と消費との間における・不均衡は、吾々が第二卷の題目とするところであるが、これらの不均衡は、資本主義社會では、たゞ恐慌によつて強力的に整理せられるの外はない。現に吾々はいま未曾有の世界恐慌に面してゐるのであり、そのために工場閉鎖、操業短縮、大衆的な失業、等々が世界到るところの資本主義國において行はれてゐるのであるが、かくの如きが茲にいふところの『社會的な生産手段および労働力の極めて法外な浪費』なるものの一例である。なほ資本主義はその最後の段階たる帝國主義の時代になると必然的に世界的規模における戦争を生むものであるが、かゝる戦争が如何に恐るべき程度において生産手段および労働力を破壊するものであるかは、吾々がすでに第一次の世界戦争において経験したところであり、今後といへども、資本主義が××されるに至らざるがぎり、吾々の繰り返し經驗するところとなるであらう。

他方において、ソヴェート聯邦では、いま五年計畫なるものが着々實行されつゝあるが、『この五年計畫の實現は、社會主義なるものが、現在のやうな創始期または過渡期においてすら、しかも文化の後れた農業國においてすら、高度の發達を遂げた資本主義國の提供する如何なるものよりも遙に優れた生産的可能性を含んでゐると云ふことを、争ふの餘地なく證明するであらう。プロレタリアの××の下では、すべての經濟的發達が、労働者の生活程度の向上と不可分的に連結されてゐるに反し、現在の資本主義のもとでは、すべての經濟的發達は、それが社會民主主義の大臣連の翼の下で行はれるにしても、労働者の搾取を増加することによつて齎らされるの外ないと云ふこと、このことを五年計畫の實現は證明するであらう。』(ウイノフ『五年計畫とインターナショナル・プロレタリアートの××的階級闘争』)

第十五章の最後は、廣く知られてゐる次の章句をもつて結ばれてゐる。

革命

勞働が社會の成員のすべてによつて分擔される將來の展望

「勞働の強度と生産力とが與へられてゐるとすれば、勞働能力を具へてゐる社會の成員の總ての者の間に、勞働がより均等に分配されればされるほど、かくて社會の或る層の者が人間の生活に缺くべからざる勞働を自分の肩から外つし、これを他の層の者に轉嫁しうるものが、より僅少になればなるほど、社會的勞働日〔社會的に費される一日の總勞働時間〕のうち物質的生産のため必要とされる部分〔必要勞働時間〕は益々少くなり、従つて各個人の自由なる・精神のおよび社會的の・活動のために獲得される部分の時間は益々多くなる。〔従つて勞働日は益々短縮される。〕だからこの方面からいへば、勞働日の短縮にとつての絶對的限界は、勞働の一般化の程度である。だが資本家的社會においては、大衆の生存時間のすべてを勞働時間に轉化することによつて、ある階級のための自由な時間が作り出されてゐる。』(カツツキ―版、四六七頁。)

私は序に第三卷の終りにある次の章句を茲に引用しておかう。

「與へられたる諸欲望の規準以上に出づる勞働としての剩餘勞働一般は、常に存在せねばならぬ。……いま資本は、生産諸力の發展や、社會的諸關係の發展や、より高級な社會形態の新形成に要する諸要素の創造やに關し、奴隸制、農奴制、等々の如き從來の諸形態のもとにおけるよりも、より有利な仕方により有利な條件のもとで、かゝる剩餘勞働を強制するものだといふことが、その文明的な方面の一つなのである。かくして資本は、一方において、強制といふことも・また社會の一部分のものが他の部分のものを犠牲として社會的發展を(その物質的利益のみならず知識的利益を含めて)獨占するといふことも・共になくなるやうな、一つ一つの段階を招き寄せせるものであり、他方においては、以上述べたるが如き意味の剩餘勞働を物質的勞働一般のために充當される時間のより大なる短縮と調和せしめるが如き・物質的手段と萌芽とを、より高級な社會形態の成立を可能ならしめる諸關係のために、造り出すものである。何故といふに、勞働の生産力の發展如何に應じて、全體の勞働時間は少くても剩餘勞働は大でありうるし、また全體の勞働時間は多くても剩餘勞働は相

新たなる社會の成立のため
の物質的諸條
件の準備

自由の王國お
よび必然の領
域

對的に小でありうるのだから。例へば、必要勞働時間が三時間であり、剩餘勞働時間が三時間であるとすれば、全體の勞働時間は六時間で、剩餘勞働の率は一〇〇パーセントである。もしまた必要勞働は九時間で、剩餘勞働は三時間であるとすれば、全體の勞働時間は十二時間で、剩餘勞働の率は僅に三三パーセント三分の一だといふが如くである。しかしまた、一定の時間内に、従つて一定の剩餘勞働時間内に、それだけの使用價值が作り出されるかは、勞働の生産力如何に懸つてゐるわけだ。だから、現實における社會の富と、その再生産過程の絶えざる擴大の可能性とは、剩餘勞働時間の長さに依存すると云ふよりも、むしろ勞働の生産力如何に、従つてまたその勞働の行はれる生産諸條件の豊富さの程度如何に、依存するのである。自由の王國は、必要および外的目的性によつて規定されてゐる勞働〔前に引用した章句の中にある言葉をもつて言ひ換へれば、物質的生產のために必要とされる勞働〕が廢止されるところで、事實上はじめて始まる。それは、事物の性質上、本來の物質的生產の領域のあなたに横たはる。……物質的生產の領域における自由は、社會化された人類すなはち協同せる生産者たちが、自然と彼等との物質交換において、一、の、盲、目、的、な、力、に、よ、り、支、配、さ、れ、る、こ、と、の、代、り、に、こ、れ、を、合、理、的、に、統、制、し、彼、等、の、共、同、管、理、の、も、と、に、齎、ら、し、そ、れ、を、ば、最、小、の、勞、費、を、も、つ、て、し、か、も、彼、等、の、人、間、的、性、質、に、最、も、ふ、さ、は、し、く、最、も、適、當、な、諸、條、件、の、も、と、で、成、就、し、う、る、こ、と、の、う、ち、に、の、み、存、在、し、う、る。しかしそれが依然として必然の領域たることに變りはない。この必然の領域のあなたに、自、己、目、的、と、し、て、値、す、る、人、間、的、な、力、の、發、展、眞、の、自、由、の、王、國、は、始、ま、る。

〔先きに引用した章句の中の言葉を用ひれば、「各個人の自由なる・精神のおよび社會的の・活動のために獲得される部分の時間」が、すなはち此の「眞の自由の王國」に屬するのである。〕だがそれは、その土臺としての必然の領域の上のみ開花しうる。』（エンゲルス版、第二分冊。三五四—三五五頁。）

第十六章 剰餘價值率に對する種々の方式

この極めて短い章は、正統學派の人々が剰餘價值率について有してゐた諸方式の誤謬を指摘し、正しき諸方式を要約するために設けられてゐる。

すでに前の章で述べたやうに、剰餘價值率は次の如き諸々の方式で表現することができらる。

I

$$\frac{\text{剰餘價值}}{\text{可變資本}} \left(\frac{m}{v} \right) = \frac{\text{剰餘價值}}{\text{勞働力の價值}} = \frac{\text{剰餘勞働}}{\text{必要勞働}}$$

ところが正統經濟學派の人々（アダム・スミス、リカードウ、等々）は、これを次のやうな諸方式にしてゐる。

II

$$\frac{\text{剰餘勞働}}{\text{勞働日}} = \frac{\text{剰餘價值}}{\text{生産物の價值}} = \frac{\text{剰餘生産物}}{\text{總生産物}}$$

尤もブルジョア經濟學では剰餘勞働の概念がはつきりしてゐないのだから、吾々は最初の式を括弧の中へ入れておく。

「このことはマルクスの校閲した舊フランス譯で行はれたことで、そこに以上のことが註記されてゐる。カウツキー版はそれに従つたもの」なほこゝに「いふまでもなく勞働時間のうちで新たに生産された價值のみを指すので、消耗された生産手段に含まれてゐた舊價值の再現にすぎざる部分は、全部除外されてゐるのである。」

この第二類の諸方式は、現實における勞働の搾取程度または剰餘價值に虚偽の表現を與へる。例へば勞働日を十二時間とし、その他すべての諸條件を前章で假定した通りだとするならば、現實における勞働の搾取程度は、

$$\frac{6 \text{ 時間の剰餘勞働}}{6 \text{ 時間の必要勞働}} = \frac{3 \text{ 志の剰餘價值}}{3 \text{ 志の可變資本}} = 100 \text{ パーセント}$$

であるが、もし第二類に従ふならば、

$$\frac{6 \text{ 時間の剩餘労働}}{12 \text{ 時間の労働日}} = \frac{3 \text{ 志の剩餘價值}}{6 \text{ 志の價值生産物}} = 50 \text{ パーセント}$$

となる。この後者は、實際においては、價值生産物が労働者と資本家との間に分割される比を示す。すなはちこゝに掲げた例について云へば、總生産物を労働者と資本家とが半分づゝ分けて取るといふことになる。だからもし之をもつて資本の搾取程度の直接の表現であるとするならば、剩餘労働または剩餘價值は決して一〇〇パーセント以上に上りうるものではないと云ふ虚偽の法則が成立つやうになる。何故といふに、労働日の全體が残らず剩餘労働になつて、必要労働はそこに少しも含まれてゐないと云ふやうなことは、如何なる場合にも在りえないことであるから。だが剩餘價值率または現實における労働の搾取程度は、遙に一〇〇パーセント以上に達しうる。「例へばエル・ド・ラヴェルニュ氏の評價を採るなら、イギリスの農業労働者は生産物またはその價值の僅かに四分の一を受け、これに反し資本家（借地農業經營者）は、後でその獲物を資本家と地主等々の間に如何様に分配するにしろ、その四分の三を得てゐる。これによると、イギリスの農村労働者の剩餘労働はその必要労働に對し三對一の比になつてをり、搾取の割合は三〇〇パーセントとなつてゐるのである。」（カウツキー版、四六九頁。）

なほ第二類の方式に従へば、生産物を資本家と労働者との間に分配するといふ形になるから、「資本關係の特殊な性質」（すなはち可變資本と生ける労働力とが交換されて、剩餘生産物については労働者は少しもその分前に與かるのではないと云ふこと）が表面から消え去り、『その代りに一つの共同關係の虚偽の外觀が現はれ、かゝる共同關係によつて労働者と資本家とは生産物をその種々なる構成要素に従つて分配するやうに見えて來る。』かくして資本家的生産に特有な對立的形態は無視され、資本家社會は自由人の共同社會に塗り變へられるのである。

最後に、第三の方式は次の如くである。

剰餘價值

＝ 剰餘労働

＝ 不拂の労働

労働力の價值

＝ 必要労働

＝ 支拂はれた労働

不拂の労働

＝ 支拂はれた労働

なる方式は、資本家の支拂

剰餘價值

これについては、この第五篇に入つてから、すでに屢々言及した。このうちふものは労働の代價であつて労働力の代價ではないかの如き誤解を誘致し易いが、しかしそれは労働力の価値なる方式を解り易く書き變へたものにすぎない。資本家は労働力の価値を支拂つて、その代りに生きた労働力それ自身を自由に利用する権利を得る。既に述べたやうに、労働力の發揮は一定の時間にわたる労働となつて現はれるが、その労働時間のうち一部分は労働力の価値に相當する等價物を生産する時間であつて、資本家はこれにより彼れの支拂つた労働力の代價を取戻す。労働時間のうち残りの部分は、資本家にこり何等の代價を必要とせざる部分であつて、その時間内に支出される労働は、すべて無料で資本家の手に歸する。その意味で剰餘労働は不拂の労働と稱されるのである。

『だから資本なるものは、たゞにアダム・スミスが云つたやうに労働に對する支配に止まるものではない。それは、本質的には、不拂の労働に對する支配である。すべて剰餘價值なるものは、後に至つて利潤・利子・地代・等々の如何なる特別の姿に結晶しようとも、その本質からいへば不拂労働時間の體化したものである。資本の自己増殖の祕密は、一定分量の不拂の他人の労働に對する資本の自由處分に歸着する。』(カウツキー版、四七〇頁。)

第六篇 勞 賃

第十七章 勞働力の價值乃至價格の勞賃への轉形

本章における
研究對象

以上吾々は節を重ねて『資本家の所得に期する剩餘價值について觀察したが、いま本篇において吾々の觀察せんとするところは、勞働者の所得たる勞賃についてである。尤も本書の序説の二三『政治經濟學批判における資本論の地位』で述べておいたやうに、マルクスの經濟學體系は、(一)資本、(二)土地所有、(三)賃勞働、(四)國家、(五)國際商業、(六)世界市場の六大部門から成り、そして『資本論』はその第一に位する資本を取扱つたものであり、賃勞働はこれに對立して第三の部門を形成する筈になつてゐるのだから、吾々はこゝで賃勞働および勞賃そのものについて立入つた觀察をなすべきではなく、たゞ剩餘價值との關聯においてこれを問題とするにすぎない。すなはち本章は以上の諸章における剩餘價值に關する觀察を補足する意味において茲に置かれてゐるのである。

さて吾々は前後を通じて諸商品はその價值通りに賣買されると假定してゐる。だから商品としての勞働力もまたその價值通りに賣買され、従つて勞働力の價格(勞賃)はいつもその價值を正確に表現してゐるものと假定してゐる。だが實際においては、(勞働力の價值そのものが種々の事情により減少せしめられることは之を問題外に置くも)勞賃は屢々勞働力の價值以下に押し下げられる。そしてそのことは、吾々がすでに以前の諸章で時折觸れておいたやうに、相對的剩餘價值の増大を齎らすものである。

剩餘價值を生産するための方法は、吾々がこれまで見た範圍では、勞働日の延長か、さもなければ勞働の生産力または強

勞賃の大小は
資本家と勞働
者との間にお
ける日常闘争
の主要題目で
ある

度の増進であつた。勞働の生産力の増進は、それが勞働者の生活必需品を生産する部門において行はれるかぎり、勞働力の價值を減少し、従つて必要勞働時間を短縮するがゆゑに、全體の勞働時間は以前のまゝであつても剩餘勞働時間を増加する。また勞働の強度の増進は、一定の時間内に支出される勞働の分量を増加することにより、必要勞働に相當するだけの分量の勞働を、以前よりも短き時間内に支出することを可能ならしめ、かくして全勞働日のうち必要勞働時間に相當する部分を短縮し、剩餘勞働時間に相當する部分を増大する。ところが、勞働の生産力は不變であり、従つて勞働力の價值そのものは不變であるとしても、更にまた勞働の強度も同じやうに不變であり、従つて一定の時間内に壓縮されうる勞働の分量は不變であるとしても、資本家は勞働者に支拂ふ勞賃を勞働力の價值以下に押し下げることにより、以上の二つの場合と同じやうに、剩餘價值の生産を増加しうるのである。だからこそ、前にも既に一言したやうに、資本家は絶えず勞賃を勞働力の價值以下に引き下げんと努力してゐるのであり、従つて勞賃の問題は、常に勞働者と資本家との間における日常闘争の主要題目となつてゐるのである。今吾々が本篇において觀察せんとするところは、かゝる意義を有する勞賃についてである。

『ブルジョア社會の表面では、勞働者の受取る勞賃は、勞働の價格・すなはち一定分量の勞働に對して支拂はれる一定分量の貨幣・として現はれる。』例へば、勞働者が一日十時間の勞働に従事して一圓の報酬を得てゐれば、その一圓が十時間分の勞働の價格であるといふ現象形態が生じる。そこで價格をもつてゐるものは何でも價值をもつてゐる筈だこ云ふ風に考へると、勞働もまた價值をもつてゐると云ふことになる。アダム・スミス、リカードウ、等々の正統學派の人々はみなさう考へたので、彼等は需要供給の如何によつて絶えず變動する「勞働の市場價格」の外に、それらの市場價格が結局において落ち付くべき「勞働の正常價格（または自然價格）」について云々したのである。

だが、正確にいふと、勞働の價值といふことは、元來意味を成さぬのである。

勞働の價值といふことは正確には意味をなさぬ

もし勞働が一の商品であり、商品として一定の價值をもつと云ふのなら、如何にしてその勞働の價值は規定されるか？
すでに第一篇第一章で見たやうに、ある商品の價值とは商品の生産のために支出された社會的勞働であり、従つてその商品の價值の大きさはそれに含まれた勞働の分量によつて規定される。しからば、例へば十二時間の勞働の價值は如何にして規定されるか？ これに答へて、十二時間の一勞働日のうちに含まれてゐる十二時間の勞働時間によつてと云つたのは、全く意味をなさない。

なほ勞働そのものが商品であるなら、それは商品として市場で販賣されるために、いつもその販賣に先だつて存在してゐねばならぬ。だが商品として販賣されるのは勞働力であり、その勞働力を買い取つた購買者が之を使用する場合に、勞働力は始めて勞働を發揮するに至るのである。生産手段の所有から離れた勞働者は、自ら獨立してその勞働を體化し、これに對象的形態を賦與して、それを商品として賣ることができぬ。『もし勞働者が勞働といふものに、一の獨立した存在を賦與することが出来るなら、彼れは商品を賣ることにして勞働を賣りはしないであらう。』

『商品市場で貨幣所有者に直接に對立するものは、實は勞働でなくて勞働者である。そしてその勞働者が販賣するのは、
〔彼れの勞働ではなくて、〕彼れの勞働力である。彼れの勞働が開始されるや否や、その勞働は彼れに屬することをやめるのであり、従つてそれは最早や彼れによつて販賣されることは出来ぬ。勞働は價值の實體でありその内在的尺度であるが、しかし勞働そのものは何等の價值を有たぬ。』

『勞働の價值といふ表現の中では、たゞに價值概念が全然消えてしまつてゐるばかりでなく、それは反對のものに顛倒されてゐる。』そこでは、全く價值のないものが、價值を有つものの如く表現されてゐる、『それは土地の價值なごといふのと同じやうに、一の空想的表現である。かゝる空想的な諸表現は、しかし生産諸關係そのものから起る。』例へば、土地そのものは自然の賜物であり、人間の勞働によつて生産されたものでないから、それは價值を有しないのであるが、しか

勞働の價值といふ空想的な表現は生産關係そのものから起る

勞働者が賣るのは勞働でなくて勞働力である

し資本主義社會においては、土地所有者は地代の形態で剩餘價値の分け前に與かることが出来るから、その地代が一定の利子歩合で還元されることによつて、地價（土地の賣買價格）なるものが成立し、そしてかゝる價格形態（現象形態）が土地もまた價値を有するものであるかの如き謬想を生ぜしめる。それは、資本主義社會における生産諸關係（剩餘價値の一部分を地代に轉形せしめ、更にその地代を資本化することにより地價を成立せしめる、等々の諸關係）が呈するところの現象形態に適應して生じた一の（誤まれる）概念である。だから『それらは、〔前に述べたる如き空想的な諸表現は、〕本質的な諸關係の現象諸形態に對する諸範疇である』といふのである。（註）『事物は現象において屢々自らを顛倒して表示するといふことは、政治經濟學以外では、すべての科學において相當に知られてゐることである。』（カウツキ―版、四七三頁。）

【註】『……これら生産諸關係の總體は、その社會の經濟的構造を、すなはち法制上および政治上の上層建築がその上に生ゐ立ち・一定の社會的意識諸形態がそれに適應するところの・現實の土臺を、形成する。』（『政治經濟學批判』序言、吾々の譯本、七二頁。）

『……この種の諸形態はブルジョア經濟學の諸範疇を形成する。それは、この歴史的に規定された社會的な生産の仕方——商品生産——の生産諸關係に對する、社會的に妥當な・從つて客觀的な・思惟諸形態である。』（『資本論』、第一卷、吾々の譯本、一五一頁。）ここに『社會的に妥當な・從つて客觀的な・思惟諸形態』といふのは、間もなく吾吾が出逢ふであらうところの *gang und gäbe Denkformen*（一般的に行はれてゐる思惟諸形態）といふのと、同じことを意味するものであらう。

吾々は次に、勞働力の價値または價格は、勞賃としてのその轉形された形態では、どんな風のものとして現れるかを、吟

味しよう。

労働力の價値
または價格が
労働そのもの
の價値または
價格に轉形す
ることによつ
て生じる幻想

労働力の價値または價格は、例へば一日いくらといふやうに、労働者の一定の生存期間を基準として計算される。それがその現象形態である。いま假りに一日の労働時間は十時間であり、労働力の一日分の價値は一圓であり、そしてその一圓といふ價値は五時間分の労働に相當するとする。この場合には、この一圓なるものが彼れの労働力の價値なのであるが、しかし彼れの労働力そのものは一日十時間に亘つて機能する。そこで労働力の一日分の價値が一日分の労働の價値とされてしまふならば、十時間分の労働は一圓の價値をもつと云ふやうに表現される。

もちろん斯かる表現の仕方は誤まつてゐるのだから、それに從へば、労働の價値はいつでもその價值生産物より小さいといふやうな變な結果が生れることになる。先きの例によれば、労働者は一日十時間の労働に従事するのだから、その價值生産物は一日二圓である。そこで、二圓の價値を作り出す労働が一圓の價値を有つといふやうな變なことになるのである。

勞賃の形態で
は總ての労働
が支拂はれた
労働として現
象する

そののみではない、かゝる表現に從ふと、労働日のうち支拂はれた部分の五時間分の労働を表示してゐる一圓の價値なるものが、五時間分の不拂の労働をも含めた十時間分全體の價値または價格として現はれてくる。『だから勞賃の形態は、労働日が必要労働と剩餘労働とに・支拂はれた労働と不拂の労働とに・分割されてゐると云ふことの一切の痕跡を消してしまふ。すべての労働が支拂はれた労働として現象する。〔農奴制度のもとにおける〕賦役労働にあつては、農奴が彼自身のために營む労働と土地の領主のためにする彼れの強制労働とが、場所的にも時間的にも、手で掴みうる如く感覺的に區別されてゐる。奴隷労働にあつては、奴隷が彼れ自身の生活資料の價値を補償するに止まる部分の労働時間は、實際には自分自身のために労働してゐるのだけけれども、それすらが彼れの主人のための労働として現はれる。すべての彼れの労働は不拂労働として現象するのである。賃労働にあつては逆に、剩餘労働または不拂の労働すらが支拂はれたものとし

それは眞實の
關係を覆ひ隠
す

て現象する。前の場合には所有關係が奴隸の自分自身のためにする労働を隠蔽し、後の場合には貨幣關係が賃労働者の他人のためにする労働を隠蔽するのである。』(カツツキ一版、四七五—四七六頁。)

『吾々はこれによつて、労働力の價值および價格が賃賃の形態に・すなはち労働そのものの價值および價格に・轉形することの決定的意義を理解すべきである。眞實の關係を見えないやうにして、正にその反對を示すところの、かゝる現象形態の上にこそ、労働者ならびに資本家たちの一切の權利諸觀念が・資本家的生産の仕方的一切の神祕化が・資本家的生産の仕方のもとにおける自由に關する一切の幻想が・俗流經濟學の一切の辯護論的饒舌が・立脚してゐるのである。』(カツツキ一版、四七六頁。)

『賃賃の祕密を發見するために世界史は多くの時間を要したのだが、これに反しかゝる現象形態の必然性を・存在理由を・理解するくらゐ容易なことはない。』吾々は更にそれを述べよう。

【註】吾々は本書の序説において、次の如く述べておいた。理解の便宜のため茲にそれを再録しておかう。『むかしコペルニクスは、大地が世界の不動の中心にあらざること説いて、常識に一大打撃を與へると同時に、何故に大地は不動に見ゆるかをも説明したのであるが、マルクスが經濟學の領域において成し遂げたところも、また正に此の如きものであつた。吾々は「資本論」の隨所において、かくの如きコペルニクスの轉回を見出すのである。：：普通に誰でもが、太陽は東の空から出て西の空に没するものと考へてゐる。たゞ眼で見たまゝでは、實際さう考へるのが自然である。それが常識と云ふものである。ところでこの常識が、そのまゝ眞實であるのなら、別にそれに對して科學的研究を加へる必要はない。たゞ往々にして兩者が直接に一致してゐないがゆゑに、そこに科學の必要が起る。そこで例へば、吾々の眼には、地球が動くのではなく太陽が動くのであるかの如く見えてゐる(それが現象形態である)けれども、しかし本當のところは、それと全く逆で、太陽が動くのではなく地球が動くのである(それが事物の

本質である」といふことを、説明することが必要となるばかりでなく、それと同時に、なぜ斯様に本當のことが吾々の眼には顛倒して反映されてゐるかといふこと（現象形態と本質との辯證法的統一）をも、明かにしなければならなくなるのであり、そして斯かる任務をもつたものが即ち科學なのである。』

『俗流經濟學』とは、表面的な現象形態に囚はれて、かゝる現象の基礎に横たはつてゐる事物の本質を看取しえざる經濟學のことである。その内容は單なる現象形態の叙述または斯かる現象形態から生まれた顛倒せる諸觀念についての饒舌から成る。それは勿論科學の名に値せざるものだが、現象を正確に記述せるかぎりにおいては、かゝるものとしてそれは一定の價值をもつ。

労働力の價格
が労働の價格
といふ現象形
態を取るに至
る理由

何故吾々がこゝに問題とするが如き現象形態が生じるか？ この場合、資本家は一定分量の貨幣を労働者に支拂ふ約束をなすと同時に、労働者は資本家のために一定の時間の労働に従事する約束をなすのであり、その關係は、恰も米の購買者が一定分量の貨幣を米の所有者に支拂ひ、これに對してその販賣者は彼の所有する米の一定分量を提供するといふのと、全く同じ趣である。労働者が資本家に賣るのは労働でなくて労働力であるといふやうなことは、契約の介在により真相と異なつた假面を被せられるため、外觀の上には少しも現はれない。加ふるに、一般の商品にあつては、その交換價值と使用價值とを同一の單位で秤量することは出来ないのが普通であつて、例へば一定量の米の價值はこれを一定量の労働で表示することが出来るが、その使用價值の方はその大きさを同じやうに労働で表現するといふ譯に行かない。さういふのが普通であるから、労働力の場合に特有な現象、すなはちその使用價值そのものがやはり労働から成り立つてゐるといふことは、これを把握することが困難である。更にまた、労働者は一定分量の労働を全部提供し終へた後に、（すなはち必要労働と剩餘労働とを果した後に）それに對して一定分量の貨幣を受取るのだから、その労働の一部分だけが労働力の價值に相當してゐると云ふやうなことは、外觀の上には痕跡すらも残つてゐない。また實際において労働者が資本家に提供するも

のは、労働力としての労働力ではなく、労働力の機能としての一定の有用的労働、例へば裁縫労働、紡績労働等々であるが、これらの労働が一方から見ると価値を形成する要素となつてゐると云ふやうな・労働力といふ商品にのみ特有な・性質は、もちろん普通の意識の範囲外に横たはつてゐる。そこへ持つて来て、「労働の實際の變動は、支拂はれるのは労働力の価値ではなく、労働力の機能の・労働そのものの・価値であると云ふことを示すやうに見える諸現象を呈する。」これらの現象はこれを二つに區別することができる。一は、労働日の長さが變化するにつれて労働が變化することである。二は、同一の機能を營んでゐる異なる労働者の労働に個別的差異が存するといふことである。「ここにかく、現象となつて現はれるところの本質的な關係・すなはち労働力の価値および價格・と區別しての「労働の価値および價格」または「労働」といふ現象形態については、すべての現象諸形態およびその隠蔽されたる背景について言ひえられることが妥當する。前者は一般に行はれる普通の思惟諸形態として直接的にひとりてに再生産されるが、後者は科學によつて始めて發見さるべきものである。正統派經濟學はほん眞實の事態にぶつかつてゐたが、しかしこれを意識的に定式化するに至らなかつた。彼等にしてそのブルジョア的外皮のうちに立て籠つてゐるかぎり、彼等はこれをなしえないのである。」（カウツキー版、四七八頁。）

【註】『經濟學はブルジョア的であるかぎり、すなはち資本制的秩序を歴史的に過ぎゆく發展段階としてでなく・逆にこれを社會的生産の絶對的な終局的な姿として・理解してゐるかぎり、』それは或る限度内においてのみ『科學として止まりうるにすぎない。』それゆゑブルジョア經濟學の獨創的な經濟的發達は、リカードウをもつて終りを告げた。『たゞその批判に到つては然らず。かゝる批判は、それが苟くも一の階級を代表してゐるかぎり、それはたゞ資本家的な生産の仕方の轉覆と階級の終局的廢止とをその歴史的使命とする階級——プロレタリアート——をのみ代表しうる。』（第二版への跋文、吾々の譯本、一七頁、二二頁參照。）商品としての労働力といふ概念は、かくてマルクス

により始めて確立されたところのものである。

マルクスが一八四九年に書いた『賃労働と資本』のうちには、労働力の価値といふ概念がまだ確立されてゐなかつた。だから彼は、そこで、次のやうに書いてゐる。

「人が労働者に、君の労働はどれだけか？ と尋ねたならば、ある者は「俺は俺のブルジョアから一日一フランを得てゐる」と答へ、他の者は「俺は二フランを得てゐる」などと答へるだらう。彼等は、彼等の負擔してゐる仕事の異なるに従つて、一定の仕事の完了に對し、例へば一ヤアトの麻布を織ること、または一ポテン分の活字を植ゑることとに對し、彼等各自の資本家から受領するそれだけの金額を擧げるだらう。その言ひ表しの異なるに拘らず、ともかく労働といふものは、一定の労働時間に向つて、または一定の労働給付に向つて、資本家の支拂ふ金額だといふ一點においては、彼等のすべて一致するところである。すなはちブルジョアは貨幣をもつて彼等労働力の労働を買ひ、また彼等は貨幣に對してその労働を資本家に賣つてゐる。」

後年エンゲルスは、後に發展したマルクスの考に基づき、以上の句を承けて、その所へ直ぐ次の如き章句を附け加へた。

「と云ふやうに見える。しかしこれは全く錯覺だ。實際彼等が貨幣に對して資本家に賣つてゐるのは、彼等の労働力だ。この労働力をば、資本家は一日分、一週間分、一月分といふやうに買ふのだ。そして彼がそれを買つた後は、労働者をして約束の時間内労働せしめることによつて、彼れはその労働力を消費するのである。」

一八六五年の『賃労働・価格・および利潤』では、すでに次の如くなつてゐる。

「……吾々はこれから吾々の注意を、労働の価値といふ特殊の価値に向けなければならぬ。そしてこゝでもまた、私は一見パラドックスに似たことを言つて、諸君を驚かさなければならぬ。諸君のすべては、諸君が日々賣るところ

一八六五年の
マルクスの著
作

マルクスの初期の作物にはまだ労働力なる概念が確立されてゐなかつた

のものは諸君の労働だといふこと、従つて労働は一の價格を有すといふこと、また一商品の價格といふものはそのもの、この價值の貨幣的表現なのだから、必ず労働の價值といふやうなものがなければならぬと云ふことを、信じられるであらう。けれども、その言葉の普通の意味においては、労働の價值といふやうなものは全く存在しない。すでに述べたやうに、一の商品に結晶された必要労働の高がそのものの價值を構成するのだが、今かういふ價值の概念を適用して、例へば十時間の労働日の價值をどうして決めうるか？ その一日のうちにどれだけの分量の労働が含まれてゐるか？ それは十時間の労働だ。〔しかし〕十時間の労働日の價值が、十時間分の労働に・またはそのうちに含まれてゐる労働の分量に・等しいと云ふのは、同義反覆の且つまた無意味の言ひ表はしである。もちろん一たび吾々が「労働の價值」といふ表現の眞實なる・しかし隠れたる・意味を見出すならば、吾々が價值〔概念〕のかくの如き不合理な且つ外見上不可能な適用を説明しうることは、恰も一たび天體の眞實の運動を確めると、吾々がこれら天體の外觀的な運動を説明しうるに至ると、同じであらう。労働者が賣るところのものは、直接には彼れの労働ではなくて、彼れの労働力なのだ、一時彼ればその労働力の處分を資本家に委ねるのだ。云々』

第十八章 時間拂ひの勞賃

『勞賃はまたそれ自身が極めて多様な諸形態を採る』が、『しかし總てこれらの諸形態を記述することは、勞賃に關する特殊の研究に屬し、従つて本書の範圍外である。こゝでは簡單に、二つの支配的な形態を展開するに止めておく。』

【註】 勞賃に關する研究は資本に關する研究より別の部門をなすといふことは、第十七章の冒頭で注意しておいた。

時間拂ひの勞賃

『勞働力の販賣は、すでに述べた如く、いつも一定の期間に對して行はれる。だから、勞働力の一日分の價值や一週間分の價值等々が直接に自らを表示するところの、その轉化された形態は、「時間拂ひの勞賃」の形態である。』（カウツキ―版、四七八頁。） 例へば一日いくら、一週いくらと云ふが如くである。

以下吾々は先づこの時間拂ひの勞賃について觀察しようとするのであるが、しかし吾々はすでに第十五章において『勞働力の價值と剩餘價值の大きさの變動』につき諸々の法則を説明したのであり、それらは簡單な形態變化によつて勞賃の法則に轉化することが出来るから、それらのことは再びこゝに繰り返さない。吾々はたゞ時間拂ひの勞賃に特有な若干の點を指摘するに止めておく。

一日分の勞賃
と一時間あた
りの勞働の價
格との區別

『勞働者が彼れの一日分の勞働、一週間分の勞働、等々に對して受取る貨幣額は、彼れの名目上の勞賃の總額を形成する。だが勞働日の長さ如何によつて、すなはち勞働者が日々供給する勞働の分量如何によつて、同一の一日分の勞賃、一週間分の勞賃、等々が、甚だ異なる勞働の價格を・すなはち同一分量の勞働に對する甚だ異なる貨幣額を・表示する。だから吾々は、時間勞賃について更に、勞賃の（一日分の勞賃、一週間分の勞賃、等々の）總額と勞働の價格とを區別せねばならぬ。』（日本では、一日いくらで勞賃の計算をする日給制と、一時間いくらで計算する時間給制とが並び行は

れてゐる。

【註】 この場合吾々は、貨幣の價值・從つて諸商品の價格・を常に不變なものと假定しておく。もしこの貨幣の價值が變動するなら、例へばそれが下落するなら、それにつれて諸商品の價格は高まるのであるから、労働者は以前と同じ金額の勞賃を得てゐても、これをもつて購買しうる生活資料の分量は減少することになる。言ひ換へれば、その名目上の勞賃は不變であつても、その實質上の勞賃は減少するのである。だがこゝでは總て斯かる變動を捨象し、名目上の勞賃と實質上の勞賃とは常にその變化を一にするものと假定しておく。

しからば労働の價格すなはち一定分量の労働の貨幣價值は如何にして見出されるか？ それは労働力の一日分の價格（労働者が一日のうちに受取る勞賃の總額）の平均を、一日の平均労働時間で割つたものである。例へば一日に平均十時間働いて一圓取つてゐるなら、一労働時間の價格は $\frac{100}{10}$ 圓である。そしてかくして發見された一労働時間の價格は、労働の價格に對する基本單位として役立つのである。

労働の價格の變動が一日分の勞賃額に及ぼす影響

そこで次の如き種々の場合が生じる。(一) 労働の價格は引續き下落しても、一日分の勞賃、一週間分の勞賃、等々は不變でありうる。例へば一日十時間の労働で、一日分の勞賃が一圓三十錢であるなら、一労働時間の價格は十三錢であるが、一日分の勞賃は變化せずとも、もし労働時間が一日十三時間に延長されるなら、一労働時間の價格は十錢に下落する。(二) 逆に労働の價格は不變であり或ひは下落するに拘はらず、一日分の勞賃または一週間分の勞賃は増加するとふことがありうる。かゝる現象は、労働時間の延長の場合に起る。しかし同様の結果は、労働の強度の増進によつても起る。すなはち労働時間は不變であつても、労働の強度が増加されたために、以前に比べて一定の労働時間内により多くの労働が詰め込められることになり、その結果一日分の勞賃が増加したといふ場合にも、もしその勞賃の増加が労働の強度の増進に比例しないならば、同一分量の労働の價格は以前よりも下落するのである。更に同様の結果は、労働者の家族

(妻または子供)が、新たに勞働に従事するに至つたため、一家族の勞賃總額が何程か増加するといふ場合にも、生じうるであらう。『要するに、名目上における一日分の勞賃または一週間分の勞賃の削減とは無關係に、勞働の價格を引下げ、るための、種々な方法があるのである。』(カウツキー版、四八〇頁。)

時間給制においては、支拂はれた勞働と不拂の勞働との一切の關聯がなくなる

さて一時間分の勞働の價格が以上の如くにして決定され、しかも資本家は勞働者に向つて、まる一日分(またはまる一週回分)の勞賃を支拂ふ義務はなく、彼れは彼れの好きなだけの時間に互つて勞働者を使ひ、それに相當する時間勞賃だけ支拂へばよい、と云ふことであつたならば、(すなはち時間給制を採用する場合には)彼れが勞働者を使用する時間は、最初一時間分の勞働の價格を評價するために基礎となつた時間數以下に下ることが起りうる。例へば一日の勞働時間を十時間とし、一日分の勞働力の價值を一圓五十錢とするならば、一時間分の勞働の價格は十五錢になるが、今さういふ條件のもとで、資本家が勞働者を五時間しか使はず、従つて一日に七十五錢しか支拂はないと云ふやうな場合がそれであるが、かゝる場合には、勞働者はその生活に必要な日々の生活資料の半分しか得ることが出来ない、しかも資本家はそれだけの範圍で一定の剩餘勞働を搾り取るのであるから、つまり『資本家は勞働者に對し彼れ自身の維持に必要な勞働時間を知許することなしに、その勞働者から一定分量の剩餘勞働を搾り出すことができるのである。』(カウツキー版、四八一頁。)かくて勞働力の價值または價格が勞働の價值または價格に轉形され、更にそれが時間拂ひの勞賃に轉形されてくると、必要勞働と剩餘勞働との・支拂はれた勞働と不拂の勞働との・一切の關聯がなくなつてしまふ。前に吾々の見た如く、元來必要勞働と剩餘勞働との區別は、例へば、一日十時間の勞働のうち、五時間分は勞働者自身の生活維持のために必要な勞働時間・詳しく云へば彼れの生活維持に要する生活資料の價值に相當するだけの價值を生産するに必要な勞働時間・であり、残りの五時間分がそれ以上の剩餘である、と云ふことのために生じる區別であるが、今や一日の勞働時間が五時間に

短縮され、しかも（剩餘價值率は依然一〇〇パーセントであるとするならば）その五時間のうち二時間半は無償の労働に属するといふ事情のもとにあつては、残りの二時間半が必要労働であると云ふ意義は全く失はれてしまふ。何故なれば、その二時間半の労働によつては、労働者自身の生活資料の價值に相當する價值は生産されえないのであり、また労働者は、彼れが勞賃として得た貨幣だけをもつては、その必要とする生活資料の全部を購買することが出来ないのであるから。

【註】 解雇による労働者数の減少の代りに、労働時間を短縮しそれと同時に勞賃を引下げるといふことは、現在の恐慌期において廣く行はれてゐるところであるが、それらは以上述べた場合に屬する。

一日分の勞賃額は増加しても、労働の價格はノルマルな水準以下に下る場合がある

前の場合とは逆に、労働時間が普通の長さよりも延長され、それにつれて一日分の勞賃または一週間分の勞賃が増加する場合でも、労働の價格が名目上一定してゐるか、または僅かばかり増加されるに止まる場合には、労働の價格は實質的にはそのノルマルな（正常的な）水準以下に下落しうる。

一日分の労働力の價值

一時間分の労働の價格は、すでに述べたやうに、 $\frac{1}{100}$ の労働時間によつて決定されるのだが、この式では、その分母が大きくなればなるに従つて、その分子はより急速に大きくならねばならぬ。何故といふに、『労働力の消耗は、従つてまた「一日分の」労働力の價值は、その機能の繼續時間と共に、しかもその機能の繼續時間の増加よりもより急速な割合で、増加するのである』から。（カウツキー版、四八一—四八二頁。）ところで労働日が法律によつて制限されてゐない場合には、自然發生的に例へば一日十時間を標準的な労働時間（英語で normal working day, the day's work, the regular hours of work と呼ばれてゐるもの）となす習慣が生じ、それ以上は謂はゆる「残業」なる名目のもとに、一時間分の労働の價格が何程か（往々にして極く僅か）割増されるのであるが、その割増は労働力の消耗に比例せざることゝ常とするがゑに、名目上では價格が増加されても、實質的にはいつもその價格がノルマルな（正常的な）標準以下に下落す

るのである。しかも斯かる場合には、謂はゆる標準的な労働時間（例へば一日十時間）に對する勞賃が極めて低く（労働力の價值以下に）評價され、それだけの勞賃では、労働者は到底生活して行けぬやうになつてゐるだけに、労働者は自分から進んでなるべく多くの残業を引受けねばならぬやうにされてゐる。かくて『労働價格が低いといふことは、この場合、労働時間の延長に對する拍車たる作用をなす。』（カウツキー版、四八三頁。）

【註】工場法が制定されてからでも、労働時間の制限が甚しく寛大である場合には、標準労働日は法律上の最高限度以下に限定され、事業の繁閑に應じて、『残業』をやつたり、やめたりすることが行はれうる。

第十九章 出來高拂ひの勞賃

出來高拂ひの勞賃

『時間拂ひの勞賃が勞働力の價值または價格の轉化された形態であるのと同じやうに、出來高拂ひの勞賃は時間拂ひの勞賃の轉化された形態に外ならぬものである。(カウツキー版、四八六頁。)

いま通常の勞働日は十時間であつて、そのうち五時間は支拂はれる部分、残りの五時間は不拂の部分だとする。また平均程度の熟練と強度をもつて勞働する一人の勞働者は一定の品物を一日に十個生産することができ、且つその場合の價值生産物(生産物の總價值から消耗された生産手段の價值を控除したもの)は三圓であり、(その半分は必要勞働の所産であるから、勞働力の價值は一圓五十錢)従つて一勞働時間當り(それはこの場合同時に生産物の一單位當りになる)三十錢だとする。以上の如き場合に、資本家が勞働者を雇入れるに當つて、一時間當り十五錢づゝの勞賃を支拂ふなら、勞賃は時間拂ひの形態を採るが、もし生産物一個當り十五錢づゝの勞賃を支拂ふことにするなら、それは出來高拂ひの形態を採るのであつて、請負勞賃といふのはそれである。

だから出來高拂ひの勞賃の形態が不合理なことは、時間拂ひの勞賃の形態がさうであるのと少しも變りはない。例へば一單位の生産物は、その生産のために消費された生産手段の價值を控除すると、一勞働時間の生産物として三十錢の價值をもつてゐるのに、勞働者はそれだけのものを作つて十五錢の勞賃しか得ないのである。それが時間拂ひの勞賃と異なるところは、『時間拂ひの勞賃にあつては、勞働はその直接の繼續時間によつて測定されるが、出來高拂ひの勞賃にあつては、一定の繼續時間に互つた勞働が凝結するところの生産物量によつて測定される』といふだけである。

出來高拂ひの勞賃は時間拂ひの勞賃の轉形したものに外ならぬのであり、その本質に於ては双方とも全く變りないとい

時間拂ひの勞賃が更に轉形して出來高拂ひの勞賃になる

ふことは、同一の生産部門に於てこれら二様の勞賃形態が並び行はれてゐるといふこと、また出來高拂ひの勞賃の形態よりも時間拂ひの勞賃の形態の方が資本家にとつて有利になれば、資本家はいつでも一方の形態から他方の形態へ移るといふこと、等を見れば明かである。それは成るべく多く且つ巧に勞働を絞り取らうとする資本家の一つの工夫である。

以下出來高拂ひの勞賃の特徴的な性質を少し立ち入つて述べておかう。

資本家にとつて出來高拂ひの勞賃が有利である諸々の理由

勞働の品質と強度との確保

出來高拂ひの勞賃の場合は、出來高だけの勞賃を完全に支拂つて貰はふと思へば、その生産物が平均的な質をもつてゐなければならぬので、『勞働の品質は、この場合、製作物そのものによつて管理される。この方面からすれば、出來高拂ひの勞賃は勞賃の差引きおよび資本家的なごまかしの最も豊富な源泉となる。』製作物に何等かの瑕があると、それを口實にしていくらでも勞賃を削減する。従つて事實においては、資本家は約束した勞賃を一度でも支拂はずに濟むやうになる。それはまた、資本家に向つて、『勞働の強度に對し極めてはつきりした尺度』を提供する。平均的な強度をもつて一定の時間内に生産される生産物の分量は、經驗上確立されうるから、それを標準にして生産物一單位につき勞賃いくらく云ふことに決定しておけば、資本家は常に平均強度の勞働を得ることを保證されてゐるわけになる。

なほ勞働者は、一定の時間内により多くの生産物をより善く生産すればするほど、より多くの勞賃を得ることになつてゐるのだから、『この場合、勞働の品質と強度とは勞賃の形態そのものによつて管理され、それは勞働の監督の大部分を不用に歸せしめる。』かくてそれは近代の家内工業の・ならびに等級的に編制された搾取および抑壓の制度の・基礎となるのである。かゝる制度には二個の基本形態がある。第一の形態は英語で sweating system (スウェーティング・システム) スウエチングは發汗さすといふ意味、勞働者の長時間にわたる酷使の形容したものと稱されてゐるもので、資本家と勞働者との間に『下請人』(subletting of labour) なる寄生者が介在し、そのものが勞働者の受くべき出來高拂ひの賃銀

下請人の制度

の上前をはねるのである。我國の土木労働者は一般にかゝる制度のもとに置かれてゐる。手工業的な仕事に關しては、それは謂はゆる家内工業の形態をとる。細民地區の婦人少年などが自分の家庭内で内職としてやつてゐる場合には、その賃銀は極度に低くなつてゐる。我國の輸出品中重きをなしてゐる雜貨類は、かゝる極度の搾取によつて海外市場を維持してゐるのである。指物業、仕立業、製靴業、等々におけるが如く、労働者が自分の家庭でなしに、下請業者の職場で労働する場合でも、労働者は低き賃のもとに朝から晩まで長時間の酷役に服してゐる。第二の形態は、『資本家が主たる労働者——マヌファクトールにあつては一つの組の組長、鑛山にあつては石炭等々の採掘工、工場にあつては固有の意味の機械工——と一個當りいくらくといふ契約を結び、その價格に基づいて、主たる労働者自身がその計算で補助労働者の雇入および支拂を請負ふといふ方法である。資本による労働者の搾取は、この場合、労働者による労働者の搾取を媒介として實現される。』(カウツキー版、四八九頁。)

労働の平均強度を高めること

出來高拂ひの賃にあつては、一日のうちにより多くの生産物を作るほど労働者の収入は多くなるのだから、『その労働力を出來うるだけ強度に緊張せしめるといふことは、自然労働者の個人的利益であるが、そのことは、資本家をして労働強度の標準程度を高めることを容易ならしめる。』我も我もと互に競争して労働の強度を高めてゆく結果は、自然に強度の平均水準を高め、賃は更にその高められた強度を規準にして定められるやうになる。『だからそれは、個人の賃を平均水準以上に高めると同時に、賃の平均水準そのものを引き下げる傾向をもつ。』(カウツキー版、四九〇頁。)

労働時間の延長

なほ『労働日を延長することも、やはり労働者の個人的利益になる、何故といふに、それによつて一日中における出來高が増加し、従つて』彼れの一日分または一週間分の賃が高まるのであるから。』(カウツキー版、一八九頁。)
『以上の叙述からして、出來高拂ひ賃は資本家的な生産の仕方に最も適應した賃の形態だといふことが分かる。』(同上、四九一頁。)

それは資本にとつて最も有利な勞賃形態であるがゆゑに、労働者にとつてはまた最も不利な形態である。

第二十章 勞賃の國民的差異

この章は、第一版ではもちろん獨立の章となつてをらず、（それは第五章第四節の續きになつてをり、特別の標題を附けられてはゐなかつた）第二版で獨立の章とされてからでも、それは僅かのパラグラフから成る極めて短い章となつてゐた。（今日の版本について云へば、第二パラグラフ以下九つのパラグラフは、エンゲルス版において始めて追加されたものである。）

この章では、その標題の示す通り、勞賃の國民的差異が問題とされる。

勞賃の大小は
搾取程度の大
小を示すもの
ではない

第一には、外見上勞賃が他國よりも高くなつてゐる場合でも、勞働者はより大なる程度において搾取されてゐると云ふやうに、この場合にも現象形態と本質との不一致が存在しうる。

吾々は先きに第十五章『勞働力の價格と剩餘價值との大きさの變動』において、『勞働力の絶對的な價值の大きさ又は相對的な（すなはち剩餘價值と比較された）價值の大きさにおける變動を惹起せしめるところの、多様な組み合わせを研究した。』そこでは第一に、勞働日の長さも勞働の強度も不變であつて、たゞ勞働の生産力のみが變化する場合を觀察し、第二には、勞働日の長さも勞働の生産力も不變であつて、勞働の強度のみが變化する場合を觀察し、第三には、勞働の生産力も強度も不變であつて、勞働日の長さのみが變化する場合を觀察した。そして、例へば、勞働の生産力の増加につれて、勞働者の入手する生活資料は引續き増加する場合でも、相對的には、（すなはち剩餘價值の大きさにおける變化と比較すれば）勞働力の價值の大きさは絶えず下落することがありうる、と云ふことや、あるひはまた、勞働の強度が増加する場合には、勞働力の價格は騰貴しても、勞働力の價值は却つて下落することがありうる、と云ふこと、等々の場合を指

摘したのであつた。それらの詳しいことは勿論こゝに繰り返す必要はないが、たゞこゝに新たに注意すべきことは、この第十五章において『勞賃の運動の内部における組み合わせの變動となつて現はれたところのものは、異なる國々においては國民的諸勞賃の上に同時的に存在する差異として現はれうる』と云ふことである。(カウツキー版、四九四頁。) そこで、例へば甲國の勞賃は外形上では乙國の勞賃より高くとも、もし甲國における勞働の生産力または強度が乙國におけるよりも大であれば、甲國の資本家の方が割合に大なる剩餘價值を獲得してをり、従つて勞働の搾取程度は乙國におけるよりも甲國における方が却つて大である、と云ふことが存在しうるのである。

價值法則の修正
資本家的生産の發達してゐる國の名目勞賃

價值法則はその國際的適用にあつて、一定の修正を受ける。商品の價值は如何にして決定されるか？ それは當該商品の生産のため社會的に必要とされる勞働の平均量によつて定まる。かういふのが、吾々が第一章において見たところの、商品の價值決定の法則である。ところが世界市場においては、『個々の國々が全體の本質的部分として對立してゐる。』従つて問題を個々の國々の内部に限定すれば、商品の價值は必ずしも當該商品を生産するため必要とされる當該國における勞働の平均量によつて決定されることにならない。

先づこれを勞働の強度について云へば、『各國には勞働の強度について一定の中位的な標準がある。もし或る商品の生産の際に使用される勞働の強度がこの中位の強度よりも小であれば、その勞働は社會的に必要な時間よりも多くの時間を費し、従つて正常的な品質の勞働としては計算されない。たゞ國民的平均よりも高い強度のものが、所與の國において、勞働時間の單なる繼續による價值の測定に影響するのみである。ところが、個々の國々が全體の本質的部分として對立してゐるところの世界市場にあつては、これと異なる。勞働の中位的な強度は國を異にするにつれて異なり、或る國では大であり或る國では小である。だからこれらの國民的平均強度は一個の階段を形成してゐるのであるが、その全體につ

いての尺度單位となるものは普遍的労働の平均單位である。だから強度のより大なる國民的労働は、強度のより小なる國民的労働に較べて、同一の時間内により多くの價值（それはより多くの貨幣で表現される）を生産するのである。』

『價值法則はその國際的適用にあつて、更にまた次の事情によつて修正される、すなはち世界市場においては、生産力のより大なる國民がその商品の販賣價格をその價值まで引き下げること、競争によつて強制されないかぎり、生産力のより大なる國民的労働はやはり強度のより大なるものとして計算されるのである。』

ところで、『或る國において資本家的生産が發展してあればあるほど、それと同じ程度においてその國の國民的労働の平均的な強度および生産力は國際的水準より高い。だから、種々なる國々において同一の労働時間内に生産されるところの同一種類の商品の分量は互に相違してをり、それらは等しからざる國際的價值をもち、その價值は相異なる價格で、すなはちその國際的價值の如何に従ひ相異なる貨幣額で表現されるのである。』（カウツキー版、四九五頁。）

簡單にいへば、『強度の大なる・あるひは生産力の高き・國民的労働日は、一般に世界市場においては、強度の小なる・あるひは生産力の低き・國民的労働日よりもより大なる貨幣表現で表示される。』（第一版および第二版に用ひられてゐた言葉。）前者と後者ととの労働時間は同一であつても、その貨幣表現にはかくの如き差異を生じる。だからまた、労働日が必要労働時間と剩餘労働時間とに分割されてゐる割合（すなはち搾取程度）は同一であるとしても、名目上の労働日には差異を生じるのである。

『なほ労働日に妥當することは、その可除部分の各々にも妥當する。それゆゑ相對的労働賃は、——すなはち労働者の生産する剩餘價值と・あるひは彼れの價值生産物全體と・あるひはまた生活資料の價格と・比較した労働賃は、——一國における方が他國におけるより低くても、労働の絶對的價格は高くありうるのである。』（第一版および第二版で用ひられてゐた言葉。）

第七篇 資本の蓄積過程

本篇の大観

第一卷『資本の生産過程』の最後に横たはれる。この第七篇『資本の蓄積過程』は、以上の諸篇において観察された資本の生産過程を、その『繰り返しまたは連続』において観察することにより、更に幾多の秘密を曝露することを目的とする。今その曝露されたる秘密の主なるものを列挙するならば、第一は、資本家が労働者に支拂ふ労賃の實體である。労賃は、一見するときには、資本家が労働者を使役するために前拂する価値の如く見えるが、實は労働者自身が生産した社會的生産物の一部分に外ならざるものである。すなはち労働者は彼れ自らの労働により、彼れを資本の支配の下に繋ぐところの可變資本（資本家から労賃として支拂はれるもの）をば、絶えず再生産しつゝあるのである。第二に、たゞに可變資本のみならず、資本總體が、實は剩餘價值（すなはち労働者から搾取した不拂労働）の蓄積に外ならざるものである。第三に、一旦資本家的生産が自立するならば、労働者自身が絶えず資本家を資本家として、従つてまた彼等自身をば絶えず賃労働者として、再生産するやうになる。經濟法則それ自身の働きによつて、資本關係は繼續的に維持される。（以上第二十一章の題目。）第四、單なる再生産が行はれる場合においても、一定の年數の後には、資本價值は剩餘價值の轉形したものであるが、殊に擴大されたる再生産の場合には、剩餘價值の資本化による資本蓄積の進行に伴ひ、元の資本は全體に對する比例からいへば殆んどゼロに近きものとなるから、この場合には一見明白に、資本そのものが剩餘價值から生まれることになる。譬へば、最初無代で取られた一羽の鳥が、いくつかの卵を産むことによつて數羽の鳥となり、更にそれが數十羽、數百羽、遂には數萬羽、數十萬羽の鳥となるが如くである。かくて資本家の掌裡に存する一切の富の大部分は、結局、何等の等價をも提供せずして領有された價值から成ることになる。すなはち外見上は等價と等價との交換であ

る労働力の賣買が、その反對物たる、等價なしに領有される價值の蓄積に轉化するのである。第五、かくて資本家の驕奢は益々増長するに拘らず、その資本もまた益々増大するゆゑんが、理解される。(以上二十二章の題目。) 第六、資本蓄積の増進に伴うて、労働者人口の一部は、次第に相對的なる過剰人口を形成することとなり、謂はゆる産業豫備軍の發生増大を見るに至る。これは労働の生産力が増進するからである。すなはち労働者は、彼等の労働の生産力が増進するがゆゑに、益々失業することとなるのである。資本家的な生産の仕方のもとでは、労働者が有効に働けば働くほど益々自身の困窮を齎らすべき必然の運命にあるといふことが、茲に至つて愈々明白となる。(以上第二十三章の題目。) 以上は、資本の生産過程をばその連續において觀察することにより、新たに曝露された秘密の主なるものである。ところで、吾々が一旦資本の生産過程をばその連續において觀察するならば、そもく最初の資本は如何にして起り來つたかといふ疑問が、必然に生じる。それは畢竟、資本家的生産は如何にして、單なる經濟法則の作用により、自己を再生産しうる程度にまで自立しうるに至つたか、といふ疑問に等しい。第二十四章「謂はゆる本源的蓄積」は、この疑問に答へつゝ、新社會誕生の秘密——強力 (Gewalt) といへる助産婦の働き——を曝露して、まさに来らんとする新社會と呼應するの概を示す。以上、原文の字句ことごとく生動、大川の浪をあげ滔々として流れて海に入るが如く、論の觸れるところ一切の秘密の曝露されることは、たとへば朝暎一たび東に出てて魑魅魍魎ちみもうりよう隠れるに所なきが如くである。これを此の篇の大觀となす。

本篇の假定

吾々は次に、本篇における假定を明かにせねばならぬ。

「ある貨幣額の生産手段および労働力への轉形は、その價值量が資本として機能するために通過するところの、第一の運動である。それは市場において、流通の領域内で行はれる。

『生産手段が商品に——その価値はこれが構成成分の価値を超過し、従つて最初に出資された資本の価値に剰餘価値を加へただけの価値を含める商品に——轉形されるや否や、運動の第二段階たる生産過程は終結する。』

『しかる後これらの商品は、再び流通の領域内に投げ込まねばならぬ。それらの商品は販賣せられて、その価値を貨幣で實現し、この貨幣はまた新たに資本に轉形され、且つこれだけのことが絶えず新たに繰り返へされねばならぬ。常に同一の・それからそれへと引續く・かゝる諸段階を通過する循環は、資本の流通を形成する。』

この流通過程に關する立ち入つた研究は、第二卷において取扱はれるのである。ところで今、本篇における吾々の問題は、資本の生産過程を繰り返し行はれるものとして、觀察するのであるから、たとへその生産過程は生産界の内部に局限されるものとはいへ、一つの生産過程から次の生産過程への間には、さうしても流通過程が介在せねばならぬことになる。吾々は、以下本篇において、資本はこの流通過程をば、たゞノルマルに通過するものとのみ假定するのである。『再生産の・すなはち生産の不斷の進行の・現實の諸條件は、一部分は始めて流通のうちに現はれ、一部分は流通過程の研究の後に始めて取扱はれ得るのである。』（カウツキー版、五〇〇頁。）」

『なほそれのみではない。剰餘価値を生産するところの・すなはち労働者から直接に不拂労働を汲み取つて之を商品に固着せしめるところの・資本家は、なるほごこの剰餘価値の最初の領有者たるには相違ないが、決してその最後の所有者ではない。彼れはそれに續いて、社會的生産の全體の上に他の諸機能を果しつゝ、ある資本家たちと共に、また地主等々と共に、その剰餘価値を分けねばならぬ。だから剰餘価値は種々なる諸部分に分裂する。その斷片は種々なる範疇の人々に歸し、利潤・利子・商業利潤・地代・等の如き、相互に獨立せる種々の形態を有つことになる。剰餘価値の轉形せるこれらの諸形態は、第三卷に至り始めて取扱はれうる。』

『だから吾々は、一方において、商品を生産する資本家はその商品を價值通りに販賣するものと假定する。』すなはち流

通の方面においては、たゞ等價物と等價物との交換から成る單なる商品流通が行はれるに止まると假定するのである。『他方において吾々は、資本家的生産者をば剩餘價值全部の所有者として・あるひはまた、彼れと共に獲物を分け取る總ての人々の代表者として・看做しておく。』すなはち生産された剩餘價值は、一文も缺けるところなく、その全部がこれを生産した資本家の手に歸するものと假定するのである。けだし、これと反對の假定は、本質的の結論に變化を生ずることなくして、徒に問題を複雑にし曖昧にするに過ぎぬからである。『かくて吾々は先づ蓄積をば捨象的に、すなはち直接の生産過程の單なる要素として「通過點として」觀察する』のである。

【註】 生産過程および流通過程を含める資本の總過程から——それが即ち資本の生産過程であり蓄積過程である——吾々は先づ流通過程を捨象する。かく捨象された生産過程が『直接の生産過程』であり、その直接の生産過程の通過點としてのみ觀察されるものが本篇における資本の蓄積過程である。

これを要するに、吾々は本篇において、『蓄積過程の簡單な基本形態』を曖昧ならしめるところの、剩餘價值の分裂および流通の媒介的運動をば、しばらく捨象することにより、『蓄積過程の機構の内的作用を隱蔽する總ての現象』を取り除き、その『純粹な分析』を試みんとするものである。

『叙述の進行は、後に至り、それ自身の辯證法によつて、そのより具體的な諸形態に導く。』（資本論の初版にありし文句にて後の版に削られしもの。）

第二十一章 簡單なる再生産

本章に於ける
研究對象

後に述べるやうに、資本家的生産は擴大された再生産を原則とする。單なる再生産はその擴大された再生産の一契機をなすにすぎないが、簡單なものから複雑なものへと、こゝでは先づ再生産がその最も簡單な姿において觀察されるのである。

なほ資本家的再生産の特殊性を知るためには、吾々は先づあらゆる社會諸形態に共通する再生産一般を觀察せねばならぬ。本章における叙述は、先づその點から始まる。

あらゆる社會
諸形態に共通
する再生産一
般

そもく『社會は消費することを已めえないと同様に、生産することをも已めえない。』だから、『生産過程の社會的形態は如何やうであらうとも、』——それが資本家的な形態を探ると他の形態を探るとに拘らず、——『それは連續的であればならぬ、すなはち週期的に絶えず新たに同じ諸段階を通過しなければならぬ。』だからまた、『あらゆる社會的生産過程は、これをその不斷の連絡とその更新の常住の流れとにおいて觀察するならば、みな同時に再生産の過程である。』今吾々は、資本家的な社會的生産過程をば、再生産の過程として、連續的な運動の姿において、——しかしその運動の通過すべき諸段階のうち、流過程に屬する部分はノルマルに進行するものとのみ假定し、従つて吾々の全注意をその生産過程に集中しつゝ、——これを觀察せんとするのである。

生産の結果は
再生産の前提

すでに前の篇で述べたやうに、總じて生産が行はれるためには、その人的要素としての勞働力と、その物的要素としての生産手段が必要とされる。そして、勞働力は必ず勞働者の生存を前提とするのであるから、勞働力が必要とされるといふことは、すなはち勞働者用の消費資料が必要とされるといふことに等しい。しかるに如何なる社會形態の下において

生産手段は生
産過程から出
てまた生産過
程へはいる

も、『生産の條件は同時に再生産の條件である。』だから再生産が圓滑に行はれてゆくためには、生産そのものの結果として、再生産の前提として必要とされるところの生産手段と消費資料とが産出されてゐなければならぬ。(すなはち結果が前提として必要とされる。)

そこで第一に、生産手段について考へて見るに、『如何なる社會も、その生産物の一部分をば、生産手段に・すなはち新たな生産の要素に・戻してゆかなければ、引續き生産することは出来ぬ。他の諸事情にして變化なきかぎり、一の社會は、例へば一年間に消費した生産手段すなはち労働手段や原料や助成材料やを、同じ種類の新たな複製物——それは年々の生産物總額から切り離され、改めて生産過程に合體されるもの——の同じ分量によつて補填してゆかなければ、その富を同一の規模において再生産し又は維持してゆくことが出来ぬ。だから年々の生産物の一定分量は、生産に屬する。それは最初から生産的消費を目指してゐるので、その大部分は、おのづから個人的消費を排除するが如き自然的形態において存在する。』

【註一】 マルクスは『生産的消費』のことを、個人的消費に對して、しばしば『社會的消費』と名づけてゐる。生産が個人的孤立的に行はれるならば、生産的消費はこれを社會的消費と言ひ換へるわけに行かぬけれども、吾々が社會的生産について觀察するかぎり、生産的消費はいつでも社會的消費であり、固有の消費はこれに對して個人的消費である。

【註二】 多くの生産手段は、最初から個人的消費に供しうべからざる自然的形態を具へてゐる。例へば紡績機械は、食ふことも着ることもできぬものである。しかしすべての生産手段が個人的消費を拒絶するやうな物理的性質を具へてゐるとは限らない。例へば穀物は食用(すなはち個人的消費)に供されると同時に、種子用(すなはち原料としての生産手段)に供せられ、石炭は暖房用(すなはち個人的消費)に供されると同時に、燃料用(すなはち助成材料と

しての生産手段)に供されるが如くである。(『剩餘價值に關する諸學說』、第二卷、ドイツ本、二頁および二五一頁参照。)

【註三】 アダム・スミスの『諸國民の富』の卷頭にある『各國民の年々の労働は、それが年々消費するところの、一切の生活上の必需品および便宜品をば本源的に供給する元本である』といふ有名な一句の中には、各國民が年々生産的に消費する生産手段が、全く問題外に置かれてある。

以上述べたやうに、年々の社會的生産物のうち或る部分のものは、すでに生産的に消費された前期の生産手段の複製物として、重ねて次期の生産のために消費さるべく、生産過程から出てくると同時に、やがて再び生産過程に引き戻される。それは、社會的生産の形態が奴隸制たると、封建制たると、資本家制たると、はたまた共產制たるとを問はず、すべて同じでなければならぬ。尤も一定の生産過程から出てきた生産物が、生産手段として再び同一の生産過程に這入るわけではない。例へば紡績なる生産過程の生産物は絲であつて、それは機械はたきりなる他の生産過程のためにこそ生産手段となりうるけれども、紡績そのものゝためには生産手段となりえない。そして資本家的生産の仕方の下にあつては、一の生産部門において生産された生産物が他の生産部門における生産手段となるがためには、それらの生産物は資本家同志の間において賣買されなければならぬのであるが、それらの事項は資本の流通過程に屬する問題であり、従つてそれは、すでに一言したやうに、吾々の研究の後の段階に屬する。こゝでは『社會的の擴がりにおいて』全生産物を觀察し、そのうちの或る部分が生産手段として再び生産過程に入り込むものなることを記憶しておけば足るのである。

さて全生産物の中から生産手段たるものを控除するならば、残るところのものは消費資料であるが、これらの消費資料が、労働者ならびに非労働者によつて、——すなはち奴隸制の下においては奴隸ならびに奴隸の主人によつて、封建制の下においては農奴および領主によつて、資本家制の下においては賃労働者および資本家によつて、——消費されるといふ

労働者および
非労働者によ
つて消費さる
べき消費資料

ことも、社會組織の如何によつて變りはない。非労働者の範疇のうちには、如何なる社會組織の下にあつても、種々なる分子が含まれてゐる。それは資本主義の社會においても同じことであつて、例へば資本家地主を始めとし、官吏、僧侶、被救恤民、等々、何れもみな非労働者の範疇に屬しつゝあるのであるが、たゞ吾々の研究のこの段階においては、資本主義社會の純粹な生産過程を對象とするのであるから、社會は資本家——剩餘價值を分け取りする總ての人々の代表者としての資本家——および賃労働者の二つの階級からのみ成り立つと假定するのである。（『剩餘價值に關する諸學說』、第二卷、ドイツ本、第二分冊、二六三、二六四頁等、參照。）

いま吾々の問題は、以上の如き總ての社會諸形態に共通な事實が、資本家的な生産の仕方のもとでは、果して如何なる姿をもつて現はれ來たるか、といふことである。

『生産が資本家的形態をとるならば、再生産もまた資本家的形態をとる。資本家的な生産の仕方において労働過程が單に價值増殖過程のための一手段として現はれると同じやうに、再生産は出資された價值を資本として・すなはち自ら増殖する價值として・再生産するための一手段にすぎざるものとして現はれる。』例へば二千圓の剩餘價值を生んだ一萬圓の資本は、更に二千圓の剩餘價值を生むべき一萬圓の資本として、絶えず回収されて行かなければならぬ。だから再生産の過程より見たる剩餘價值は、『資本價值の週期的増加分として、または過程を通過しつゝある資本の週期的果實として、資本から發生する収入たる形態を受取る。』（カウツキー版、五〇二頁。）

【註】『讀者の注意すべきことは、収入 (Revenue) なる語が二重に、すなはち第一には、週期的に資本から出てくる果實として剩餘價值を指すために、第二には、この果實のうち資本家によつて週期的に消費され又は彼れの消費元本に編入される部分を指すために、使用されることである。かゝる二重の意義を有たせることは、イギリスおよびフランスの經濟學者の用語例と一致すると思ふから、私はこれを襲踏する。』(カウツキー版、六二六頁、註三三。)

今この収入が資本家により獲得されるにつれて消費されるならば、元本たる資本は増加しない、従つて他の諸事情に變化なきかぎり、簡單なる再生産が行はれるに止まる。そして吾々は、先づ本章において、かくの如き簡單なる再生産の過程につき觀察せんとするのである。

【註】 マルクスが後の篇において屢々注意してあるやうに、簡單なる再生産は『一つの抽象物』に過ぎない。資本家的生産は資本の増殖を目的とするものだから、生産される剰餘價值がいつも次ぎ／＼に消費され、元本たる資本が一般的に少しも増殖されないと假定することは、資本家的生産の非存在を假定するに等しい。『實際においては、ノルマルな事情のもとでは、いつでも剰餘價值の一部が収入として、〔個人的消費に充てられるものとして〕支出され、他の部分は資本化されねばならぬ。』（第二卷、エンゲルス版、五二頁。）けれども簡單なる再生産は、擴大された規模のうちの一つのエレメントとして含まれる。吾々はいま再生産の過程をば、先づその最も簡單なエレメントに分析して觀察せんとするがゆゑに、擴大せる再生産の考察はこれを次章に譲り、本章においては『一つの抽象物』としての簡單なる再生産について考察するのである。この考察の順序は、吾々が先きに相對的剰餘價值の生産を取扱つた折、その冒頭において、あらゆる資本家的な生産の仕方に共通なエレメントとして先づ簡單なる協業について説明したのと、同じことである。

同一規模の生産の單なる繰り返しから生じる變化

さて簡單なる再生産は『同一の規模における生産過程の單なる反覆』に止まるのであるが、しかし『かゝる單なる反覆または連続は、その過程の上に一定の新たな諸特徴を捺染する、あるひはむしろ、離れ々々の出來事にすぎざるが如く見ゆる過程の外見的性質を消滅せしめる。』同じ過程の反覆はその過程自體の上に或る質的變化を起すに至るといふこと、いな、連続せる運動の一關節を他の諸關節と切り離し、これを孤立的に觀察する場合には、吾々の看取することのできぬ變化でも、これをその連續において觀察する場合には、明かに看取されるやうになるといふこと、（例へば一筋の糸の色が、

赤から徐々に紫へ、紫から徐々に青へ變化してゐるといふ場合、それを寸断して隣り同志を比較したのでは、すべて同じ色に見えるけれども、これをその連續において見るときは、始めてその真相——事實上存在する色の變化——が分かる、といふの類。簡單にいへば連續による質的變化が、この場合にもまた現はれる。即ち資本家的生産は、これを再生産の過程として觀察することにより、更に幾多の祕密を曝露するのである。

可變資本は等價なしに領有された労働の生産物にすぎない

労働者に勞賃の形で絶えず戻つてくるものは彼れ自身が絶えず再生産する生産物の一部である

『吾々は先づ勞賃形態で放下される資本部分、すなはち可變資本について觀察するであらう。』（カウツキ―版、五〇三頁。）この勞賃は、一見したところ、資本家の所有する資本によつて支拂はれる。しかし吾々がこれを再生産の過程において觀察するならば、労働者の受くるところのものは、實は彼等自身の生産しつゝある生産物の一部に外ならざること、發見されるであらう。けれど『生産過程は一定の期間に互る労働力の購買によつて先導される、そして斯かる先導は、労働の販賣期間が満了し、それと共に一定の生産期間（週、月、等々）が經過するや否や、絶えず更新される。ところで労働者は、彼れの労働力が働きをなし、その労働力の價值、ならびに剩餘價值を商品で實現した後に、はじめて勞賃の支拂を受ける。だから労働者は、吾々がこゝでは暫く資本家の消費元本に止まるものと看做すところの剩餘價值を生産するばかりでなく、「簡單なる再生産の場合にあつては、剩餘價值はすべて資本家の個人的消費に充てられるのであり、従つてそれは資本家の消費元本たるに止まるのである。』また彼れ自身に對する支拂の元本たる可變資本をば、それが勞賃の形態で彼れの手許に流れ歸る以前に、生産するのであり、且つ彼れは、かゝる元本を絶えず再生産する限りにおいてのみ、雇傭されるのである。』

『労働者に勞賃の形で絶えず戻つてくるものは、彼れ自身が絶えず再生産する生産物の一部である。しかしこの貨幣は、労働生産物の一部分の・轉化せる形態に外

ならぬ。労働者が生産手段の一部分を新たな生産物に轉形してあるうちに、彼れの以前の労働の生産物は市場で流通し、そこで貨幣に復歸する。今日の・または向ふ半ヶ年分の・彼れの労働に對して支拂はれるものは、前週または前半期における彼れの労働である。』(この章句は舊版とカツツキー版とで異なる。こゝでは後者に従ふ。) もちろん個々の労働者がそれ／＼彼れ自身の労働生産物を受取るといふわけではない。例へば炭山における労働者は、彼れ自身の生産物たる石炭を勞賃として受取るのでもなく、また紡績工場における職工は、彼れ自身の生産物たる絲を勞賃として受取るのでもない。すべての生産物は商品として一旦市場に流れ出て、そこで貨幣に轉形する。この市場においては、労働者もまた貨幣所有者として現はれ、(その貨幣は彼れが資本家より勞賃として受取つたものである、)その貨幣と交換に彼れの必要とする生産物を購入する。この場合、これを個々の労働者について見れば、彼れの購入するところのものは、もちろん彼れ自身の生産したものではない。けれども吾々が個々の労働者に着目する代りに労働者階級全體に着目するならば、この階級の人人がその勞賃をもつて買ひ戻しつゝある生産物は彼等自身の生産物の一部分に外ならざることが、明瞭となるであらう。

『貨幣形態が作り出だすところのイリュージョン〔錯覺〕は、吾々が個々の資本家ならびに個々の労働者の代りに、資本家階級ならびに労働者階級について觀察するや否や、忽ちに消滅する。資本家階級は、労働者階級に向つて、後者によつて生産され而かも前者によつて領有される生産物の一部に對する手形を、絶えず貨幣形態で給與するのである。労働者はまたこの手形を絶えず資本家階級に返却し、それによつて彼れ自らの生産物のうち彼れ自身の分前に歸する部分を引き出す。生産物の商品形態と商品の貨幣形態とが〔生産物が商品の形態を有ち、またその商品のうちの或るものが貨幣の形態をもつといふことが〕かゝる取引を變裝させるのである。』(だから吾々は先づ、邪魔になる『流通の媒介的運動』を捨象し、『蓄積過程の機構の内的作用を隱蔽する總ての現象』を取り除き、これが『純粹なる分析』を試みなければならぬのである。)

『労働元本』
の特殊な歴史
的形態として
の可變資本

『要するに可變資本は、生活資料の元本フオンまたはイギリス人のいふ労働元本 (Labour fund) なるもの——勿論これは労働の貯えを指すのでなくて、労働のための貯えを指す——の特殊な歴史的現象形態にすぎない。それは、労働者が彼れ自身の維持ならびに再生産のため必要とする貯えであり、社會的生産のあらゆる體系において労働者がいつでも自ら生産し且つ再生産せねばならぬものである。』前に述べたやうに、社會的生産の形態は如何やうであらうとも、生産のためには、いつでも物的要素としての生産手段と、人的要素としての労働力とが必要であり、そして労働力の供給はすなはち労働者の生存を前提とするのであるから、労働力が必要とされるといふことは、つまり労働者用の消費資料が必要とされるといふに等しい。だから生産が繰り返し行はれるためには、すなはち再生産が差支なく進行するためには、これらの生産手段ならびに労働者用の消費資料が次の生産期のために現在の生産期において再生産されねばならぬ。そのうち今こゝで問題としてゐるのは労働者用の消費資料であるが、資本家的生産のもとでは、以上述べ来たやうに、それが可變資本として・資本家が労働力の講買のために労賃の形で放下する資本として・現はれてくるまでのことである。だからそれは、『社會的生産のあらゆる體系において労働者がいつでも自ら生産し且つ再生産せねばならぬ』生活資料の元本の『一の特別な歴史的現象形態』にすぎぬといふのである。『ブルジョア經濟學者は頭が狭くて、現象形態と斯かる現象形態をとつてゐる本體とを區別することが出来ぬので、労働元本が資本の形態で現はれてゐるのは、今日でさへ地球上においてはただ例外的にすぎないといふ事實の前に、眼を閉ぢてゐる。』(カウツキー版、五〇四頁。)

かくの如く『吾々が資本家的生産過程をその更新の常住の流れにおいて觀察するや否や、その限りにおいては、可變資本はもちろん資本家自身の元本から出資された價值だといふ意義を失ふ。が、それにしても、資本家的生産過程は、いつか、どこかで、始められたものでなければならぬ。』そして、その一番最初に資本家から支拂はれる労賃は、以上述べたが如き再生産の過程において現はれるものと、その性質を異にしてゐなければならぬ。しからば、そんな資本を有つた

最初の資本は
どこから出た
か？ これは
後の章の問題
に譲る

資本家は、最初どこからさうして生れて出るのであるか？『吾々のこれまでの見地からするならば、資本家は昔し或る時、何等かの・支拂はれざる他人の労働からは獨立な・貨幣の本源の蓄積により、例へば彼れ自身の労働の結果を節約して貯めるといふやうなことによつて、貨幣所有者となり、かくて労働力の講買者として市場に乗り込みえた、とても假定しておく外はあるまい。吾々はこの問題を本源的蓄積に關する章において委しく觀察するはずであるから、茲ではしばらく問題のかゝる解決を假定しておく。』（カウツキー版、五〇五頁。こゝは從來の版本と異なる。）すなはち本章における吾々の研究は、資本家的生産がすでにその立脚地を得てから後の問題に係はるのである。

全體の資本そのものが労働者の不拂労働の體化物である

吾々は以上をもつて『連續による質的變化』を先づ可變資本について見た。ところが『資本家的生産過程の單なる連續すなはち簡單なる再生産は、たゞに可變的な資本部分にのみでなく總資本をも把握するところの、なほ他の獨特の變化を惹き起す。』

いま假りに千ポンドの資本があり、それによつて週期的に（例へば年々）生産される剰餘價值は二百ポンドであり、且つこの剰餘價值は資本家により年々消費されてゆくものとする。さうしたならば、同一の過程を五ケ年間繰り返した後、消費された剰餘價值の總額は $5 \times 200 = 1000$ となり、それは最初に出費された資本價值の千ポンドに等しくなる。もしまた年々の剰餘價值が一部分づつ、例へばたゞ半分づつ、消費されるに止まると假定するなら、生産過程を十ケ年間繰り返した後は、 $10 \times 100 = 1000$ であるから、やはり同じ結果になる。つまり一般的にいへば、出資された資本價值をば年々消費される剰餘價值で割ると、資本が再生産される期間の年數——すなはちそれが經過すると、最初出資された資本が資本家により消費し盡され、従つてまた消滅してしまふに至る期間の年數——が出る。そして再生産がこの期間だけ繰り返されたならば、もとの資本はすつかり無くなつて、その全部が剰餘價值の——すなはち支拂はれざる他人の労働の——蓄

最初の資本は資本家の労働によつて作り出されたとしても、それはやがて資本化された剰餘價值に變化する

積に外ならざるものとなるのである。

もちろん彼れは以前と同じ大きさの資本を今もなほ手にしてをり、且つその一部分は建物や機械として、彼れが事業を開始した際に存在したまゝの形を維持してあるでもあらう。しかし吾々が茲に問題とするのは、資本の價值であつて、その物質的構成成分ではない。例へば、ある人がその全財産の價值に等しいだけの借金をして、その借金を全部蕩盡したならば、たとひ彼れの山林なり家屋敷なりは元のまゝの形で存在してゐても、それはたゞ彼れの債務の全額を表示するにすぎぬのであつて、彼れは正に無一文なのである。それと同じやうに、吾々の問題とする資本家も、彼れが最初に所有してゐた一千ポンドに相當するだけの價值を五ヶ年目にはすでに全部消費してゐるのだから、彼れは正に無一文となつてゐるはずである。しかるに、それにも拘らず、依然彼れの手に一千ポンドの資本が残つてゐるのは、年々二百ポンドづゝの剰餘價值が蓄積されたためであり、従つて五ヶ年後における彼れの資本は、完全に剰餘價值の蓄積に轉化してゐるのである。湖の水は、一方では絶えず蒸發してゐながら、同時に他方では、雨水が絶えずそれに流れ込む。従つて一定の年數を経れば、新陳代謝の結果、もとの水は一滴もなくなるのだけれども、しかし一見したところでは、そこに常住の水があり、その常住の水が不斷に水蒸氣を吐いてゐるやうに見える。それと同じやうに、剰餘價值は絶えず資本によつて生み出されるがために、それは「過程を経過しつゝある資本の週期的果實として、資本から發生する収入」たる現象形態を取るのであり、また資本家の消費するところのものは、たゞこの果實だけであつて、もとの資本はそのままに維持されてゐると見えてくるのである。

これによつて見れば、「すべての蓄積（剰餘價值の資本化による資本の増殖）」は全然問題外におくにしても、要するに生産過程の單なる連續すなはち簡單なる再生産は、長かれ短かれ或る期間の後、必然的にあらゆる資本をば、蓄積された資本または資本化された剰餘價值に轉化せしめる。たとひそれは、最初生産過程に入り込むときには、その使用者自身の

労働によつて得られた財産であつたとしても、晚かれ早かれ、それは等價物を提供することなしに領有された價值、または、貨幣形態を有すると否とを問はず、支拂はれざる他人の労働の物體化となるものである。』（カウツキー版、五〇六頁。）かくて労働者は、たゞに剩餘價值を作り出すのみでなく、資本全體を絶えず再生産し、資本關係——資本家對賃労働者の關係——それ自身を・從つて賃労働者としての彼れ自身を・絶えず再生産するのである。

資本家および労働者間の關係は、資本家的生産過程により再生産される

『吾々が吾々の研究の始めに際し、第四章（『貨幣の資本への轉形』を指す）において、明かにしたところによれば、貨幣が資本に轉形するためには、商品生産および商品流通の存在のみでは十分でない。そのためには先づ貨幣の所有者が、次の如き他人を、——すなはち自分の労働力のほか賣るべき何物をも有たぬがために、それを賣ると賣らぬとは自由でありながら、しかもこれを賣るべく餘儀なくされてゐるやうな他人を、——市場において見出さねばならなかつた。だから労働生産物と労働それ自身との間における分離、すなはち労働を實現するために無くてはならぬ一切の物を自由にしてゐる人の範疇と・彼れの全所有物が彼れ自身の労働力にのみ限られてゐる他の人々の範疇と・の間における分離は、資本家的生産過程の事實上與へられた基礎であり、その出發點であつた。』（カウツキー版、五〇六頁。こゝ舊版と少からず異なる。）

出發點であつたものが後に結果として現はれる

『ところが最初にはたゞ出發點であつたものが、後には、簡單なる再生産のおかげで、いつまでもそれ自身を繰り返し更新するところの一の結果となる。』前提は結果を生み、その結果はまた新たに同じ結果のための前提となる。『生産過程は、一方においては、引續き物質的富を資本と資本家の享樂手段とに轉形する。』すなはち生産過程における労働者の労働によつて、元本たる資本が絶えず更新されると同時に、資本家のための剩餘生産物が（單なる再生産の行はれる場合に

は、これらの餘剰生産物はすべて資本家の個人的消費の用に供されるがゆゑに、その全部が資本家のための享樂手段である。絶えず再生産される。『他方において、労働者は、彼れがこの過程にはいつたまゝの姿で、——富の人的源泉ではあるが、しかしその富を自身のために實現するには一切の手段を剝奪されてゐるものとして、——絶えず過程から出てくる。彼れ自身の労働は、彼れがこの過程にはいる前に彼れ自身から引き離され、資本家に領有されて資本に合體されてゐるのだから、それは過程の繼續中つねに他人の生産物に對象化する。その生産過程は同時に資本家による労働力の消費過程であるから、労働者の生産物は、たゞに間斷なく商品に轉形するばかりでなく、また資本に、價值を創造する力を吸ひ取る價值に、人々を購買するための生活資料と生産者を使役するための生産手段とに、轉形する。要するに労働者自身は、客體的な富を資本として、彼れを支配し搾取する他人の力として、絶えず生産し、資本家もまた、同様に絶えず労働力を主體的な、それ自身を對象化し實現化するための手段から隔離された、捨象的な、労働者の單なる現身うつつしみのうちうちに存在する。富の源泉として、簡單にいへば、労働者を賃労働者として、生産するのである。かくの如き労働者の不斷の再生産または永續化は、資本家的生産のシネ・カ・ノン、〔必須條件〕である。』（カウツキー版、五〇七頁。）（資本家的生産は、かゝる條件を具へることにより、始めてそれ自身の立脚地を得るに至るのであるが、今かゝる條件そのものの發生に至つては、本源的蓄積を取扱へる後の章において、これを明かにするはずである。）

資本の附屬物
としての労働
者階級

以上述べ來つたところによつて考ふれば、資本家的生産のもとにおける労働者は、たゞに彼等の労働時間内において資本のために労働するのみでなく、その労働時間外においても、言ひ換へれば、彼等自身の家庭で飲食し睡眠し子孫を繁殖しつゝある時間内においても、簡單にいへば、その全時間その全生活を擧げて、資本のために生活しつゝあるものと謂はなければならぬのである。

けだし『労働者の消費は二重である。』彼れが生産過程において労働に従事しつゝある間は、例へば紡績工が棉花を『消化』することによつて、これを綿絲たる生産物に轉形する如く、彼れの労働により生産手段を消費し、これをその購買のために出資された資本よりも多くの價值をもつ生産物に轉形する。これは彼れの生産的消費である。この場合、彼れは明かに彼れ自ら生産手段の消費をなすのであり、それによつて原料たる棉花は製品たる綿絲に轉形する。しかし彼れの營むところの此の如き生産的消費は、實は同時に、彼れの労働力を買取つた資本家によつて行はれるところの、彼れの労働力の消費である。かくて原料たる棉花は、労働者の労働によつて消費され、資本家のために製品たる綿絲に轉形するのである。他方において、労働者はその労働力の販賣によつて得たる貨幣をば再び支出して、彼れ自身および家族のために必要な生活資料を買ひ入れ、これを消費することによつて、彼れ自身を維持し且つ再生産する。これは彼れの個人的・人的な・消費である。(ことにいふ個人的は社會的に對する。生産物の生産のために行はれる生産手段の消費は、その生産物が商品であるかぎり、正確にいへば、それが社會的な需要を充すための社會的生産物であるかぎり、社會的消費であり、それに對して、固有の消費たる生活資料の消費は、個人的消費である。また茲にいふ人的は物的に對する。生産手段の消費は、その結果として生産物を生むといふ點において、物的消費であり、生活資料の消費は、その結果として人のいのちを生産するといふ點において、人的消費である。)そしてこの個人的消費こそは、生産過程の外において營まれるのであり、その結果は労働者自身の生活に外ならぬのであるから、一見したところ、それは前の生産的消費とは全く異なつたものとして現はれる。

労働者の個人的消費は資本の再生産の一要素である

けれども『吾々が個々の資本家および個々の労働者でなしに、資本家階級および労働者階級を觀察するに至るや否や、離れくゞの生産過程でなしに、資本家的生産をその流れにおいて且つその社會的の擴がりにおいて觀察するに至るや否や、事態は別様に見えてくる。』(量の増加は質の變化を起すといふこと、同一過程の連續的反覆はその過程自體に質的變化を

起すに至るといふことが、否むしろ、その一つ／＼を離れ／＼に観察する場合に見失はるべき事物の特徴が、これをその全體において又その連続において観察するとき、はじめて明瞭に浮び出る。』資本家が彼れの資本の一部を労働力に轉形する場合には、彼れはこれによつて彼れの總資本を増殖するのである。だがそれだけではない。彼れは一つの矢をもつて二羽の鳥を射る。彼れは、たゞに彼れが労働者から受取るもの「労働力」によつて利益するばかりでなく、また彼れが労働者に與へるもの「勞賃」からも利益する。』何故といふに、『労働力と交換して讓渡される資本「それは労働者の手に渡ると同時に資本としての性質を失ふ」は、労働者階級によつて生活資料に交換され、そしてそれらの生活資料の消費は、労働者の筋肉・神経・骨・腦髓・等々を再生産するため、および新たな労働者を生むために役立つ。だから絶對的に必要な限界内においては、労働者階級の個人的消費は、資本から労働力に對し讓渡された生活資料の・資本により改めて搾取さるべき労働力への・再轉形である。それは、資本家にとつて最も缺くべからざる「人的」生産手段の・労働者そのもの・生産および再生産である。だから労働者の個人的消費は、それが仕事場の内で行はれても外で行はれても、労働過程の内で行はれても外で行はれても、大體において資本の生産および再生産の總體にこつての一契機たるを失はないのは、恰も機械の掃除が、労働過程の間になされるにしろ、その一定の休止の間になされるにしろ、さうであるのと全然同じである。』(カツスキー版、五〇八頁。この章句も舊版とは多少づゝ相違してゐる。) もちろん労働者自身は彼れの個人的消費を資本家のために營むとは意識してゐない。彼れ自身が考へてゐるところでは、たゞ腹が減つたから食ふのであり、喉が渴くから飲むのであり、睡いから睡るのであり、資本家のために女房を貰ふのでもなく、資本家のために子供を育てるのでもない。しかし、注意すべきことは、この場合にもまた、事實は當事者の意識によつて何等の變化をも受けないといふことである。『役畜の消費は、その食ふところのものを家畜自身が享樂するからと云つても、依然として生産過程の必要な一契機である。〔それと同じやうに〕労働者階級の不斷の維持ならびに再生産は、資本の再生産のための不斷

資本の再生産の一要素たる賃労働者の再生産は労働者階級の本能に放任される

の條件である。』しかも資本家は、この條件を充すことを、安んじて労働者の自己保存の本能ならびに生殖本能に放任することができる。牛馬ならば多少の世話をしなければならぬが、労働者はたゞうちやつてさへおけば、彼等自身がその本能に従つて飲食し且つ生殖する。資本家はたゞ彼等の個人的消費を、できうる限り必要缺くべからざる程度に制限すること、注意すれば足る。(労働者がこの必要缺くべからざる程度以上の消費をなすことは、資本の立場から見ても不必要なことであり有害なことであり、従つて資本家ならびにその觀念的代表者たるブルジョア經濟學者の常に排斥するところである。その一例としての我國における勤儉力行論に注意せよ。)

『要するに社會的見地からすれば、労働者階級は、直接的な労働過程の外においても、死んだ労働用具と全く同じやうに、資本の附屬物である。彼れの個人的消費ですら、一定の限界内においては、(労働者階級の維持ならびに再生産に必要な飲くべからざる限度内においては)、資本の再生産過程の一契機たるにすぎない。なほこの過程は、労働者の生産物を絶えず労働者の極からその反對の極たる資本の方へ遠ざけることにより、この自己意識を有する生産用具(死せる生産手段に對して労働者を指す)を逃がさぬやうに用意する。』委しく言へば、労働者がその勞賃をもつて買つて來た生活資料を、引續き彼等の個人的消費の用に供するならば、一方においては、それによつて労働者階級の維持および再生産がひこりてに行はれて行くが、それと同時に、他方においては、労働者の得たる生活資料は消費によつて次ぎ／＼に消滅するのだから、彼等は再び生活資料を得るがための前提として、重ねて自己の労働力を賣るため、みづから歩を運んで、幾度でも繰返し労働市場に現はれる。かくの如くして労働者階級の個人的消費は、——資本家の側からいへば、労働者自身の自己保存の本能および生殖の本能に一任したまゝで、——一方では、資本家のために必要な賃労働者階級を絶えず維持し再生産し、他方では、この維持され再生産されてゆく賃労働者階級をいつまでも資本家階級に縛り付けておくといふ用意をなす點において、同時に二重の役目を演じるのである。かくて『ローマの奴隸は鎖によつて、賃労働者は見えざる糸によつて、その所

賃労働者は見えざる糸によつて資本家階級全體につながれてゐる

有主に繋がれてゐる』(カウツキー版、五〇九頁)といふことになる。たゞ賃労働者の場合には、『その所有主が個々の資本家でなくて、資本家階級であるといふ相違があるだけだ。』(彼れは甲または乙といふブルジョアにこそ隷屬してはゐないが、しかしブルジョア階級に隷屬してゐる。そしてそのために、誰かのところへ自分を賣るといふこと、すなはちこのブルジョア階級のうちに誰か一人の買手を見出すといふことが、彼れの仕事となる。彼れにしてその生存を見棄てざるかぎり、彼れは「その労働力の」買手の全階級すなはち資本家階級から縁を切るわけには行かぬのである。』(賃労働と資本』、河上譯、大正十四年改版本、一頁。)

資本家的生産過程は資本關係自體を再生産することによつて自立する

これを要約するに、『資本家的生産過程はそれ自身の進行によつて、労働力と労働諸條件(労働を對象化するために必要な一切の生産手段)との分離を再生産する。かくしてそれは労働者を搾取する諸條件を再生産し永續せしめる。それは、絶えず労働者が生活のためにその労働力を賣ることを餘儀なくせしめ、絶えず資本家が致富のために労働力を買ふことを可能ならしめる。資本家と労働者とを購買者および販賣者として相互に商品市場で對立せしめるところのものは、もはや偶然ではない。』(偶然でなくなるがゆゑに、それは社會の階級的編制の基礎となる。』)一方のものを絶えず彼れの労働力の販賣者として商品市場に投げ返し、しかも彼れ自身の生産物を絶えず他方のものの購買手段に轉化するところのもの、は、過程それ自身の必然である。實際のところ労働者は、彼れが自己を資本家に賣る以前から、資本に屬してゐる。彼れの經濟的隷屬は、彼れの自己販賣の週期的な更新・彼れの個人的な雇主の更替・ならびに労働の市場價格の動搖・により、且つ媒介され且つ隱蔽されてゐるのである。』(兒童等の労働の場合には、自己販賣の形式すら無くなるといふことは、前に述べた)』されば、聯絡において觀察されたる・すなはち再生産過程としての・資本家的生産過程は、ただに商品を生産するばかりでなく、剩餘價值を生産するばかりでなく、それは資本關係自體を一方の側には資本家を・他方の側には賃労働者を・生産し且つ再生産するのである。』(カウツキー版、五一三—五一四頁。)

第二十二章 剩餘價值の資本への轉形（擴大さ

れた規模における再生産）

一 規模の擴大されゆく資本家的生産過程。商品生産の所

有諸法則が資本家的領有の諸法則へ轉化する事。

吾々は前章において、簡單なる再生産につき研究した。しかし、その折すでに述べたやうに、簡單なる再生産は一つの抽象に過ぎない。ノルマルな事情のもとでは、再生産はいつも擴大された規模において行はれるのであり、簡單なる再生産は現實における再生産の一つのエレメントたるに止まる。本章においては、吾々は進んで、擴大された再生産につき觀察するであらう。

擴大された再生産は、剩餘價值の資本化に基づくところの、資本の増殖の結果である。それゆゑ本章に於ける吾々の問題は、『剩餘價值の資本家への轉形』によつて行はれるところの新たな資本の成立である。吾々はすでに前章において、簡單なる再生産が行はれるに止まる場合においても、最初の資本は結局において剩餘價值の蓄積に轉化するものなることを見た。しかしその場合には、たゞ舊資本の價值が再生産されるといふに止まり、剩餘價值の資本への轉形により新たな資本が成立するのではなかつた。しかるにこゝでは剩餘價值からの新たな資本の成立が問題である。

資本から生れた剩餘價值が更に資本に轉形して資本そのものの増大を齎らすといふことは、鳥から生れた卵子が孵化して更に鳥となるといふに等しい。そこで問題は、鳥から生れた卵子が如何にして更に鳥を生むかである。『これまで吾々の觀察したところは、如何にして剩餘價值が資本から生れるかにあつたが、今や吾々の觀察せんとするところは、如何に

資本の蓄積とは何か？

して資本が剩餘價值から生れるかにある。もし剩餘價值がその所有者により彼れの個人的必要のために消費されずに、資本として使用されるならば、一の新たな資本が形成されて舊資本に追加され、資本が蓄積される。資本としての剩餘價值の使用または剩餘價值の資本への再轉形は、資本の蓄積と名づけられる。』(カウツキー版、五一四—五一五頁。中間の一章句は從來の版本に缺く。) 吾々は先づ、前草の場合と逆に、剩餘價值はその全部が蓄積されるものと假定して論を進めるであらう。

個々の資本家の立場より見たる蓄積

『吾々は先づ個々の資本家の立場から、この過程を観察しよう。例へば一人の紡績業者が一萬ポンド・スタアリングの資本を、その五分の四は棉花、機械、等々に、その五分の一は勞賃に、出資したとする。また彼れは年々一萬二千ポンド・スタアリングの價值を有する二十四萬封度の綿絲を生産するとする。剩餘價值率が一〇〇パーセントであるならば、剩餘價值は、剩餘生産物または純生産物たる綿絲四萬封度のうちに・總生産物または全體の生産物の六分の一のうちに・含まれてゐる。この剩餘生産物は二千ポンド・スタアリングの價值を有し、それは販賣によつて實現〔貨幣に轉化〕される。もしこの二千ポンド・スタアリングが再び資本として出資されたなら、一萬ポンド・スタアリングなる元の資本は一萬二千ポンド・スタアリングに増大するのであり、資本は蓄積されたのである。』(カウツキー版、五一五頁。こゝも舊版と異同がある。)

ところでこの『二千ポンド・スタアリングの價值額は二千ポンド・スタアリングの價值額たるに止まる。これらの貨幣を嗅いでみても眺めて見ても、それが剩餘價值だといふことは分らぬ。剩餘價值としての價值の性質は、それが如何にして、その所有者にやつて來たかを示すが、しかし價值または貨幣の性質には少しも影響しない。そこで、この二千ポンド・スタアリングといふ新たに追加された金額を紡績業の資本に轉形するためには、紡績業者は、他のすべての諸事情を同じとすれば、そのうちの五分の四を棉花その他のものの購買に出資し、五分の一を新たな紡績工の〔勞働力の〕購買のため

に出資せねばならぬ、そしてこれらの紡績工は、資本家が彼等に支拂つた價値に相當するだけの生活資料を、市場において見出すであらう。この場合には、二千ポンド・スタアリングの新資本は紡績業において機能し、それはそれで四百ポンド・スタアリングの剩餘價値を齎らすことになる。』

ところで、すでにさうなつてしまへば、資本と剩餘價値との差はなくなる。（卵子から雛が生まれ、その雛がやがて卵子を生もやうになれば、そのもの自身が親鳥になり、そのものと親鳥との差別がなくなる。）委しくいへば、「資本價値は最初には貨幣形態で出資されたのに、剩餘價値はこれに反し、先づ總生産物の一部分の價値として存在する。』すなはち剩餘價値が最初に現はれるときの姿は、前の例でいへば綿糸であつて、それは資本が最初に出資されるとききの姿・貨幣としての姿・と違ふ。ところが『總生産物が賣られて貨幣に轉形すると、資本價値はその最初の形態に復歸するのであるが、剩餘價値の方は、その最初の存在の仕方を変へることになる。』そして、さうなつてしまつたなら、その瞬間以後、資本價値も剩餘價値も共に一定の貨幣額として存在するやうになり、その資本への再轉形は全く同じ様式で行はれる。『資本家は、一方のものも他方のものも同様に、これを諸商品の購買に充て、そしてそれらの諸商品は、彼れの製品の製造をば新たに、しかも今度は擴大された規模で、始めることをえせしめる。』かくて資本價値と剩餘價値との差別は消え、剩餘價値は資本となり、舊資本は増殖される。

新たな生産諸要素は如何にして増加されるか？

個々の資本家の立場から見れば、剩餘價値の資本への轉形は以上の如くにして行はれる。ところで、個々の資本家は、擴大した規模においてその生産を繰り返すためには、今度は以前よりもより多くの商品を（他のすべての諸事情を同じとすれば、より多くの勞働力とより多くの生産手段とを）市場において見出さねばならぬ。しからば、それらのより多くの商品は、如何にして市場に提供されるか？吾々が先きに單なる再生産を觀察した場合には、剩餘價値はすべて資本家によつて個人的消費の用に供せられることになつてゐたのだから、その剩餘價値は資本家用の消費資料に體現してゐた

社會總資本の
立場から見た
蓄積——擴大
された規模に
おける再生産

し、體現せねばならなかつた。しかしこゝでは、剩餘價值の全部が新たな資本に轉形するのだから、剩餘生産物はかゝる轉形に適當した形態で生産されねばならぬ。これがこゝでの新たな問題であるが、これを理解するためには、吾々は個々の資本家の立場を去つて、社會總資本の生産物について觀察せねばならぬ。何故なら、ある個別的資本家の立場からすれば、自分の需要さへ充たされたなら、他の資本家たちの需要は充されなくても問題にはならぬのだから。

一の社會において生産される年生産物は、『一年のうちに消費された資本の物的構成諸部分（具體的にいへば、その年度内に消費された生産手段および労働者用の生活資料）がそれによつて補填されるところの、對象物（使用價值）のすべてを供給せねばならぬ。（註）これを差引いた後に、剩餘價值がそのうちに含まれるところの、純生産物または剩餘生産物が残る。今この剩餘生産物は何から成り立つか？ そのなかには疑ひもなく、資本家階級の諸欲望と諸欲求とを充すべく定められた物、従つて資本家階級の消費元本フオンドにはいる物がある。けれども全部がそれであつたなら、剩餘價值は全く享樂用に蕩盡され、たゞ簡単な再生産が行はれるだけであらう。』だから、擴大された規模における再生産が行はれるためには、この剩餘生産物の或る部分は、生産規模の擴張に必要とされるやうな物理的性質を具へた生産物——追加せらるべき生産手段ならびに追加せらるべき労働者用の生活資料——でなければならぬ。ところで、ノルマルな事情のもとでは、このことは、或る程度まで自然に實現される。例へば、吾々が先きに問題とした紡績業者は、その剩餘生産物を綿糸として生産するのであるが、これは織物業者に向つて、その生産規模の擴張のために必要とされる物質的構成成分の一つを供給することになる。それと同時に、他方では棉花栽培、機械製造、石炭採掘、等々の生産諸部門においても、やはり棉花、機械、石炭、等々の形で剩餘生産物が生産されるのであり、そしてそれらのものは、紡績業者に向つて、その生産規模の擴張のため必要とされる物質的諸構成成分を供給することになるのである。なほ『これらの諸構成成分をして事實上資本として機能せしめるためには、資本家階級は労働の追加を必要とする』のであり、従つて、『これまで使用されてゐる労働者に

對する搾取が、インテンシブにもエキステンシブにも増大されないならば、「労働の強度の増進により労働者をして一定の時間内により多くの分量の労働を支出せしめるか、または労働時間の延長により労働者をして一日のうちにより多くの分量の労働を支出せしめるかでなければ」、追加すべき労働力を雇入れなければならぬ。』しかしそれに對しても、資本家的生産の機構が、ちやんご用意してゐてくれる。すでに述べたやうに、資本家階級は労働者階級に向つて勞賃をさへ支拂つておけば、労働者自身がその生殖の本能に驅られて、ひとりで追加労働者を生産してゆくからである。かやうにして資本の蓄積は次第に行はれてゆくのであるから、『これを具體的に觀察すれば、蓄積は畢竟、引續き規模の擴大されゆく資本の再生産に歸する』のであり、「簡單なる再生産の循環は擴がつて來て、シスモンデーの表現に従へば螺旋形に變じるのである。」（カウツキー版、五一七頁。）

【註】『一の社會において生産される年生産物は、一年のうちに消費された資本の物的成分がそれによつて補填される。ところの、對象物のすべてを供給せねばならぬ。』このことは、現實の事實と背反するやうに見える。例へば日本の主要産業たる紡績業は、年々棉花および機械を消費しつゝあるが、しかしこれらの棉花および機械は、日本の年生産物のうちに含まれてゐるのではない。けれども吾々が茲に研究の對象となしつゝあるものは、すべての生産物が資本家的な生産の仕方では生産されつゝあるところの、純粹な一個の資本主義社會であることを、注意しなければならぬ。それゆゑマルクスはこゝに脚註を附して、次の如く注意してゐる。『國際貿易は、外國産の商品種類によつて内國産のそれを補填するものであり、これによつて一の國民は、奢侈品をば生産手段および生活資料（奢侈品にあらざるものを意味する）に換へ、またその逆をなす得るのであるが、こゝではかゝる國際貿易を無視する。研究の對象をその純粹性において、邪魔になる附隨的諸事情から引き離して、理解するためには、『第一版の序文参照』吾々はこゝで、全貿易界を一個の國民と看做し、資本家的生産が残る限なく確立して一切の生産部門を征服してゐると前提せられ

ばならぬ。』(カウツキー版、五一六頁。第一版第二版には之を缺く。なほカウツキー版はエンゲルス版とも多少異なる。)

新たな資本の成立はすべて他人の不拂労働の蓄積による

さて以上述べたやうに、剰餘価値の資本化によつて資本が次第に蓄積されてゆくと云ふことは、新たな資本の成立はすべて他人の不拂労働の蓄積によると同義である。吾々は先きに、簡單なる再生産の行はれる場合でも、これを連續的運動の過程において觀察するならば、一定の期間を経た後、資本価値の全部は剰餘価値の——すなはち支拂はれざる他人の労働の——轉化したものに外ならざることを見た。しかし、その場合には、最初の元本は如何にして所有者の手に入つたかといふ問題が残るのであつた。これに對して、『經濟學の代言人は異口同音に、彼れ自身の労働ならびに彼れの祖先の労働によつて!』と答へるのであり、また彼等の假定は、事實上、商品生産の法則——それによれば、平均して等價物同志が交換され、且つ各人はたゞ商品をもつて商品を買ひうる(商品生産の法則を説明せるこの挿句は、カウツキー版で追加)——に合致するところの、唯一の假定であるやうに見える。』詳しく言へば、今吾々のため研究の舞臺となつてゐるものは、純粹な商品交換の世界であり、従つて商品と商品とは、——偶然性を捨象して之を平均的に觀察するかぎり、——互にその價值において交換されるのであるから、かゝる舞臺の上に資本の所有者が始めて現はれるといふことは、そのものが「昔し或る時、何等かの・支拂はれざる他人の労働からは獨立な・貨幣の本源の蓄積により、例へば彼れ自身の労働の結果を節約して貯めるといふことによつて、貨幣所有者となり、かくて労働力の購買者として市場に乗り込みえたのだ」とでも、假定しておく外はないのである。それで吾々も、前にはそのやうに假定しておいた。従つて單なる再生産の場合には、少くともその出發點たる最初の元本が、所有者自身の労働の成果たりうるのである。

けれども、それは一番最初の蓄積に關する、遠い昔の世のお伽噺に屬する。最初の資本はたとひ如何にして蓄積されたにしても、その資本は年々剰餘価値を生み、そしてその剰餘価値が次第に蓄積されて舊資本に追加されるがゆゑに、『生

産の流、れ、に、お、い、て、観、察、す、れ、ば、最、初、に、出、資、さ、れ、た、資、本、も、直、接、に、蓄、積、さ、れ、た、資、本、。す、な、は、ち、資、本、に、再、轉、形、さ、れ、た、剩、餘、價、値、
ま、た、は、剩、餘、生、産、物、に、比、べ、る、こ、と、——蓄、積、さ、れ、た、こ、れ、ら、の、資、本、が、當、人、の、手、に、お、い、て、機、能、し、て、お、い、て、
機、能、し、て、お、い、る、と、を、問、は、ず、——す、べ、て、一、般、的、に、極、微、の、大、き、さ、（數、學、で、い、ふ、*magnitudo evanescentis*）と、な、る。』（カ、ウ、ツ、キ、
版、五、二、三、頁。）そ、し、て、こ、の、『零、に、近、き、大、き、さ』の、舊、資、本、を、除、い、た、以、外、の、新、た、な、追、加、資、本、の、『成、立、過、程、は、は、つ、き、り、吾、々、に、
解、つ、て、お、い、る。そ、れ、は、資、本、化、さ、れ、た、剩、餘、價、値、で、あ、る。最、初、か、ら、そ、れ、に、は、支、拂、は、れ、ざ、る、他、人、の、勞、働、に、起、因、し、な、い、價、値、の、一、分、
子、だ、も、含、ま、れ、て、は、お、い、ない。追、加、さ、れ、た、勞、働、力、が、合、體、さ、れ、る、生、産、手、段、も、こ、の、勞、働、力、〔勞、働、者〕が、自、分、を、維、持、し、て、ゆ、く、生、活、
資、料、も、剩、餘、生、産、物、の、資、本、家、階、級、が、年、々、勞、働、者、階、級、か、ら、奪、ひ、去、る、貢、物、の、構、成、分、に、外、な、ら、ぬ。た、と、ひ、資、本、家、階、級、は、こ、の、
貢、物、の、一、部、を、も、つ、て、勞、働、者、階、級、か、ら、追、加、勞、働、力、を、ば、し、か、も、等、價、物、同、志、が、交、換、さ、れ、る、や、う、な、十、分、な、價、格、で、買、取、る、に、し、て、
も、そ、れ、は、依、然、と、し、て、か、の、征、服、者、が、彼、れ、の、奪、ひ、取、つ、た、被、征、服、者、自、身、の、貨、幣、を、も、つ、て、そ、の、被、征、服、者、か、ら、商、品、を、買、上、げ、る、
と、い、ふ、古、く、か、ら、の、遣、り、口、た、る、を、失、は、な、い。』（カ、ウ、ツ、キ、版、五、一、八、頁。）『そ、れ、は、資、本、に、よ、つ、て、資、本、を、作、り、出、す、と、稱、さ、れ、
る。』（カ、ウ、ツ、キ、版、五、一、九、頁。）（第、四、篇、に、お、い、て、約、束、さ、れ、た、言、葉、す、な、は、ち、生、産、過、程、に、お、い、て、は、『た、ゞ、に、資、本、が、如、何、に、生、
産、す、る、ば、か、り、で、な、く、如、何、に、し、て、資、本、そ、の、も、の、が、生、産、さ、れ、る、か、が、明、か、と、な、る、で、あ、ら、う』と、い、ふ、こ、と、が、茲、に、至、つ、て、果、さ、
れ、た。）一、た、び、無、代、で、取、ら、れ、た、一、羽、の、鳥、は、い、く、つ、か、の、卵、子、を、生、も、こ、と、に、よ、つ、て、數、羽、の、鳥、と、な、り、更、に、數、羽、の、鳥、が、數、十、羽、
數、百、羽、遂、に、は、數、萬、羽、數、百、萬、羽、の、鳥、と、な、り、か、く、て、資、本、家、の、掌、裡、に、存、す、る、一、切、の、富、の、大、部、分、は、結、局、何、等、の、等、價、を、も、
與、へ、ず、し、て、領、有、さ、れ、た、價、値、か、ら、成、る、も、の、と、な、る。

鐘紡の實例

【註】 鐘淵紡績會社の拂込資本は、昭和四年度期末現在高が二千八百五十九萬六千圓である。しかるにこの鐘紡が大
正三年上半期から昭和四年下半期に至る十六年間に儲けた利益金は二億四千三十七萬四千圓といふ大金で、前期拂込
金の約十倍である。そのうち株主へ配當されたものが一億四千三百三十七萬八千圓で、前記拂込資本の約五倍である。

資本によつて
資本が作り出
される

そして一握りほどの重役たちは、大株主として以上の如き配當を得てゐる上に、法外な種々の利益を得てゐる。賞與金の名のもとに彼等が公然そのポケットに入れたものだけでも、前記の十六年間に七百四十五萬圓に達してゐるが、武藤氏の如きは社長をやめた折に、退職金として更に三百萬圓を取つた。世界恐慌がやつて來てからは、齡とつた職工はしきりに解雇され始めたが、その解雇手當は十七年間も勤続したもので四百五十圓から六百五十圓までである。武藤氏の言葉によれば、鐘紡といふところは『愛の泉がコン／＼と流れてゐる』ところださうだが、さういふ結構な所でも、事態は以上の如くである。

次は自動車王フォードの資産に關する記事である。

『嘗てワシントンで課税訴訟事件が起つたときに現はれたヘンリー・フォード氏の富の數字によつて、フォード氏が世界第一の富豪であることが判つた。フォードの財産は、たゞその金額において古今の富豪を凌駕するだけではなく、また蓄積の速度においても古今の第一人者である。』

『フォード氏が數人の友人たちと彼れの自動車工場に十萬ドルを投資してから、まだ三十年にならない。ところではそれ以來たゞの一ドルも新しい投資をしないで、この十萬ドルの投資が生んだ純益だけで、十億ドルといふ目がくらむやうな巨大な富が積み上げられたのである。』

『……フォード自動車會社が一九〇四年に事業を創めてから、國税を拂つたあとにごれくらゐの純益をあげたが、といふことは、相當正確に知ることが出来る。次に掲げる表は、フォード自動車會社の黄金物語である。』

年	純 益	配 當
一九〇四	二八三、〇〇〇ドル	—
一九〇五	二八五、〇〇〇	—

一九〇六	一〇七、〇〇〇	
一九〇七	一、〇一二、〇〇〇	一〇〇、〇〇〇ドル
一九〇八	一、二五一、〇〇〇	六〇〇、〇〇〇
一九〇九	二、六八六、〇〇〇	一、八〇〇、〇〇〇
一九一〇	四、四五三、〇〇〇	二、〇〇〇、〇〇〇
一九一一	六、二二六、〇〇〇	三、〇〇五、〇〇〇
一九一二	一三、〇五六、〇〇〇	五、二〇〇、〇〇〇
一九一三	二四、七一四、〇〇〇	一一、二〇〇、〇〇〇
一九一四	二九、七六五、〇〇〇	一二、二〇〇、〇〇〇
一九一五	二四、五二〇、〇〇〇	一六、二〇〇、〇〇〇
一九一六	五九、〇一八、〇〇〇	三、二〇〇、〇〇〇
一九一七	二七、八四四、〇〇〇	九、二〇〇、〇〇〇
一九一八	五一、八三八、〇〇〇	五、二〇〇、〇〇〇
一九一九	五二、〇九四、〇〇〇	二四、一七五、〇〇〇
一九二〇	五〇、〇〇七、〇〇〇	?
一九二一	六四、八〇四、〇〇〇	?
一九二二	一一五、七九七、〇〇〇	?
一九二三	九三、〇三〇、〇〇〇	?

一九二四	八六、九七八、〇〇〇	?
一九二五	一一五、一二九、〇〇〇	一四、六七〇、〇〇〇
一九二六	一〇〇、〇〇〇、〇〇〇(見積)	?

合計 九二四、八九七、〇〇〇

『九億二千五百萬ドルを會社は二十三年間に儲けた。これはけだし世界の産業史上に未だ嘗て例のない一大成功である。』

『：：アメリカの大富豪を調査した結果として、二つの事實が明らかになつた。まづ第一は「シャツ一枚からまたシャツ一枚に」といふ説は餘り信ずるに足りない。といふのは、初代、二代、三代となるに従つて益々裕福になつてゆく例がザラにある。：：第二の事實は、一國の富の驚くべき大部分は、ごく少數の大富豪の手の裡に握られてゐる、といふ事實である。』(以上『ニューヨーク・タイムズ』の記事。フォード著『産業哲學』、松本悟郎氏譯本、附録。同書一四五頁より一六六頁に至る間のところとところ。)

フォード自動車會社の最初の資本金は十萬ドルとも云ひ、あるひは二萬八千ドルといふ説もあるが、假に十萬ドルだとしても、九億何千萬ドルといふ純益金は、最初の資本の殆んど一萬倍に相當する。僅か二十三年間に元本の一萬倍にあたる剩餘價值が搾取されたといふことは、なるほど歴史上かつて例のないことかも知れない。何にしても世界一の大富豪の財産が剩餘價值の・すなはち他人の不拂労働の・蓄積以外の何物でもないといふことは、上記の數字からして吾々の手に握みうる如く明かな事實である。

吾々は本書の劈頭以降、すべての商品を單なる商品としての・その純粹の姿において觀察することにより、商品の貨幣への轉形、貨幣の資本への轉形、資本より生ずる剩餘價值の資本への再轉形を明かにし、順次向上し來つて漸々この段階

商品生産および商品流通に立脚する所有の法則の辯證的轉化

にまで登りえたのであるが、今吾々が振り返つて最初の出發點を見るならば、『商品生産ならびに商品流通に基づく占有の法則または私有財産の法則は、それ自身の内在的な不可避的な辯證法により、その正反對のものに轉化する』ことを見出す。（カウツキー版、五一九頁。）吾々はこれまで、商品をばたゞ單なる商品として取扱ひ、従つてそれ等のものは皆な相互にその價値通りに交換されるものと假定してきた。すなはち第三章『貨幣および商品流通』において述べたる商品流通は、單なる商品の流通であり、もとより資本としての商品流通ではない。（それは第二卷において研究さるべきものである。）またその次の第四章において『貨幣の資本への轉形』を觀察せる場合にも、吾々はたゞ等價物と等價物との交換に基づく單なる商品流通を前提としてゐたのであり。この前提のもとにおいても、貨幣の資本への轉形はなほ如何にして可能であるかゞ、吾々の問題としたところである。従つて、その場合に労働者と資本家との間に行はれる労働力の賣買も、すべて商品交換の法則に従ひその價値通りに行はれるものと假定したのである。なほそれより以下本章に至るまで、吾々は常に資本の生産過程をもつてその研究の對象となし、その流通過程の方面においては、たゞ第三章において見たる單なる商品流通——等價物と等價物との交換——が暫くそのままに行はれるものと、假定し來つたのである。簡單にいへば、吾々の出發點は等價物同志の交換であつた。しかるに今やその『本來の取引として現はれた等價物同志の交換が、全く向きを變へてしまつて、交換されるこいふのはたゞ外觀だけのものとなる、こいふのは、第一に、労働力を交換される部分の資本そのものが、等價物を與へずに領有された他人の労働生産物の一部分にすぎず、第二に、この資本部分は、その生産者たる労働者によつて、たゞに補填されるのみでなく、新たな剩餘生産物を附け加へて補填されねばならぬのだから。かくて資本家と労働者との間における交換の關係は、流通過程に屬する單なる假象、——内容そのものは無縁な

・たゞ内容を神祕化する・單なる形式となる。労働力の絶えざる賣買は形式である。その内容は、資本家が、等價物を與へずして彼れ自ら絶えず領有するところの・すでに對象化された他人の労働の一部を、他人の生きた労働のより多量のも

出發點における等價物同志の交換關係は今の搾取關係に轉化する

のこ、常に繰り返し交換するといふことである。最初、所有権は所有者自身の労働に立脚してゐるやうに思はれた。少くともかゝる假定を認めざるをえなかつた、なぜいふに、平等の権利を有する商品所有者のみが對立してゐるのに、他人の労働を領有するための手段としては自分自身の商品を手渡するより外なく、しかも商品は労働によつてのみ生産されうるのだから。しかるに今や所有権は、資本家の側にあつては、他人の不拂労働またはかゝる労働の生産物を領有するための権利として現はれ、労働者の側にあつては、彼れ自身の生産物を領有するここの不可能性として現はれる。所有権と労働との分離は、兩者の同一性から出發したかの如き外觀をもつ一法則の必然的歸結となる。(以下の章句は第二版において追加。) 資本家的な致富の方法は、かくて商品生産の本來の諸法則と直接に撞着するかに見えるが、それにも拘らず、それはこれら諸法則の侵害から生じるのでなく、むしろ反對にその適用から生じる。(カウツキー版、五一九頁。)

【註】 辯證法における『反對物への轉化』については、私の著作『マルクス主義經濟學の基礎理論』の上篇、『マルクス主義の哲學的基礎』の第二章第二節その五において、やゝ委しく述べておいた。(改造社版『經濟學全集』第八卷、昭和四年刊、一四八頁以下參照。) その最も著しき經濟上の事例としては、マルクスがこゝに述べてゐるもの以外には、レーニンの指摘した自由競争の獨占への轉化を擧げることが出来る。レーニンの『帝國主義論』第七章の冒頭を見よ。

階級社會の構成

以上述べ來つたところによつて見れば、『吾々が資本家的生産をその更新の不斷の流れにおいて觀察するとき、そして個々の資本家や個々の労働者の代りに、その全體を・資本家階級およびこれに對立してゐる労働者階級を・眼中におくとき、』(カウツキー版、五二二頁) 事態が如何に全く相違してくるかが明かであらう。しかも注意せねばならぬことは、そこに單なる商品生産と資本家的な商品生産との間における本質的な差異の一つが横たはつてゐることである。『商品生産

〔資本家的ならざる・單なる商品生産〕にあつては、たゞ販賣者と購買者が、相互に獨立して、對立してゐる。彼等相互の連絡は、彼等之間に結ばれる契約の満了をもつて終りを告げる。取引が繰り返へされるにしても、それは前の契約とは没交渉な新たな契約の結果行はれるのであつて、その際同一の購買者が同一の販賣者と出逢ふのは、偶然にすぎない。』（カウツキー版、五二二頁。）

簡單なる商品流通にあつては、當事者同志の社會的關係は、互に獨立せる人々の間における關係であり、それゆゑに一時的であり、不連続的であり、販賣者または購買者といふ經濟的役割は固定しない。だから『社會諸階級の間における關聯をそこに求めんとするは、許しがたきことである。』（この點については、第三章『貨幣』の第三のbの一を参照せよ。）

けだし如何なる經濟的關係でも、固定化しない以上、それは階級を構成するに至らない。例へば資本家と労働者との間における搾取關係にしても、もしそれが固定しないものであつて、資本家と労働者との交はる／＼搾取者としての役割を演じるこいふことであつたならば、資本家が全體として搾取する階級を形成し、労働者が全體として搾取される階級を形成するこいふやうなことは、起りえない。だから階級關係の構成要素を把握しようと思へば、吾々は經濟的關係のうち固定化する本質を有するもの、それ自身の内在的性質によつて同一の關係を絶えず再生産してゆくものを、求めなければならぬ。だからまた斯かる關係はその全體の連絡から切り離して、一回限りの離れ／＼のものとして觀察するに止めてはならず、必ずこれをその連續性において觀察せねばならぬ。

階級關係の構成要素はそれ自身の内在的性質によつて同一の關係を絶えず再生産してゆくものうちに求むべきである

簡單なる商品生産に伴うて生じる單なる商品流通にあつては、購買者または販賣者といふ經濟的役割が一定の人に固定化し結晶化することがない。だから、かゝる單なる商品流通が行はれるに止まつてゐる限りにおいては、その關係から階級の區別は決して發生しえないのであり、従つてまた『商品生産またはそれに屬する一の出來事をそれ自身の經濟的諸法則に従つて判斷しようとするならば、吾々は各々の交換行爲を、それに先だつ交換行爲ならびにその後起る交換行爲と一切の連絡の外で、それ自身について觀察せねばならぬ。』（カウツキー版、五二二頁。）

それゆゑ吾々は、吾々の研究

商品生産は労働力そのものが商品となるに至つて始めて支配的な生産の仕方になる

商品法則の必然的轉化

の前提たる單なる商品交換の觀察にあつては、たゞ交換關係そのものを觀察するに止めたのであり、且つこれによつて、あらゆる商品の交換は、それが單なる商品の交換であるかぎり、またこれを平均的に觀察するかぎり、すべて等價と等價との交換に外ならぬことを明かにしたのである。しかも斯かる商品交換の法則のもとに、労働力の賣買が行はれるに至るや否や、言ひ換へれば、單なる商品生産の代りに資本家的生産が行はれるに至るや否や、個々の交換行爲はこれを別々に觀察するかぎり毫も商品交換の法則に牴觸することなく、依然として等價と等價との交換であるとしても、富の領有方法は一の總革命を経て、それは資本家の側における・等價なしに領有されるところの・他人の労働の無限の蓄積を齎らす。『かゝる結果は、労働力が労働者自身により商品として自由に販賣されるに至るや否や、避くべからざるものとなる。しかもまた、さうなつてから「労働力が商品として販賣されるやうになつてから」商品生産は始めて一般に行き渡つて典型的の生産形態となり、また各生産物は始めて最初から販賣のために生産されて、生産された總ての富が流通を通り抜けるやうになる。賃労働が商品生産の基礎となつたとき商品生産は始めて全社會に推し擴がるのであり、またさうなつたとき商品生産は始めてその一切の潜勢力を展開するのである。だから、賃労働が介在し來たることが商品生産を不純ならしめるといふこととあれば、それは取りも直さず、商品生産を不純ならしめまいとするなら、それを發展してはならぬ、といふに等しい。商品生産がそれ自身の諸法則に従つて資本家的生産に進展すればするほど、それと同じ程度に、商品生産の所有諸法則は資本家的領有の諸法則に轉化するのである。』（カウツキー版、五二二頁。）かくてこの場合にも、量的擴大は質的變化を伴ふに至るのである。

二 剩餘價値の資本および收入への分割——制慾説

『吾々は剩餘價値乃至剩餘生産物を、前章においては、たゞ資本家の個人的な消費元本としてのみ觀察し、また本章にお

本節における
問題

いては、これまでのところ、たゞこれを蓄積元本としてのみ觀察した。』言ひ換へれば、吾々は、前章においては、剩餘價値の全部が個人的消費に供せられる場合を觀察し、また本章においては、これまでのところ、剩餘價値の全部が蓄積される場合を觀察した。極端なるこれら二つの場合は、簡單なるがゆゑに、理解もまた比較的容易である。しかしそれらは何れも現實の一面を抽出したものにすぎない、實際におけるノルマルな條件のもとでは、この二つのものが同時に起る。すなはち『剩餘價値の一部は資本家により収入として消費され、〔廣義の収入は剩餘價値の全部を指す、こゝにいふ収入は狹義のそれである、〕他の一部は資本として使用される、すなはち蓄積される。』いま本節においては、前に述べた二つの場合の綜合としての、現實の蓄積過程について觀察するであらう。

剩餘價値の資本
および収入
への分割

『剩餘價値の分量が與へられてゐるなら、蓄積の大きさは明かに、蓄積元本および消費元本への・資本および収入への・剩餘價値の分割に依存する。一方の部分が大きければ大きいほゞ、他方のものは益々小さくなる。〔以下新たにカウツキー版で追加されたもの。〕だから剩餘價値または剩餘生産物の分量、従つて資本に轉形しようと思へばすることのできる一國の富は、剩餘價値のうち現に資本に轉形される部分より、いつでもより大である。資本家的生産が一國內において益々發展し、蓄積が益々急速に且つ益々大量に行はれ、その國が益々富み、従つて奢侈および浪費が益々大げさとなるにつれ、剩餘價値の總量と・そのうち資本に轉形される部分と・の差は益々大きくなる。』また以前から存在してゐる富について云へば、すでに資本家の消費元本に繰り入れられてゐるものでも、段々に消耗されてゆく性質のものの中には、そのまゝ資本として作用しうるやうな自然的形態を具へてゐるものもあり、また労働者用の生活資料であつても、資本家が不生産的に労働者を使役してゐる範圍内では、それは資本としての性質を有たないのである。何れにしても『剩餘價値が資本と収入とに分割される割合は、絶えず變動するのであり、こゝではこれより以上説明することの出來ぬ諸事情によつて支配されるものである。だから一國內において使用されてゐる資本は、決して固定的の大きさのものではなく、むしろ

剩餘價値の總
量とそのうち
資本に轉形さ
れる部分との
差は、益々大
きくなる
資本として利
用されうる一
國內の富は常
に可變的であ
る

る變動的な大きさのものであり、資本として機能しうる既存の富のうちの・いつも可變的な屈伸的な部分から成り立つのである。』このことは、後の章に述べるであらうところの、資本の突發的膨脹ならびに收縮と、密接な關係を有する。

『何れの場合においても、剩餘價值の資本と収入とへの分割を處理するものは、資本家に外ならぬ。すなはちそれは彼れの意志行爲である。』彼れは彼れの意志によつてそれを如何やうにでも分割することができる。けれども、他方において、彼れの歴史的價值ならびに歴史的生存權は、彼れがその剩餘價值の全部を消費せず、これを資本化することにより、資本家的生産の發展に・社會的生產諸力の増進に・窮極はまた、より高級なる社會形態の成立のための物質的諸條件の準備に・貢獻する點に存する。『しかる限りにおいて、彼れ自身の一時的な必然性は資本的な生産の仕方の一時的な必然性のうちに横たはつてゐるのである。』『彼れは價值増殖の熱狂者として、生産のための生産に・従つて社會的生產諸力の發展に・またそれのみが各個人の完全な且つ自由な發展をその根本原則となす一のより高級な社會形態の實在的な土臺を形成しうるところの、物質的諸條件の創造に・顧慮するところなく人類を驅り立てる。』そこに彼れの歴史的使命が存する。『資本家は資本の人格化としてのみ尊敬に値する。彼れは斯かるものとして、貨幣の蓄藏者と同じやうに絶對的な致富の衝動を有する。しかし貨幣の蓄藏者にとつて個人的な妄想として現はれるところのものは、資本家にあつては社會的機構の作用であり、彼れはかゝる社會的機構のなかの一個の推進車たるにすぎぬのである。資本家的生産の發展は、一個の産業的企業に放下されてゐる資本を絶えず増加することを必要ならしめ、競争は、資本家的生産の仕方の内在的諸法則を外部的な強制諸法則として、各々の個別的資本家に課する。これらの諸法則は、資本家が絶えずその資本を擴大してゆかなければ、これを維持してゆくことを許さないが、しかも彼れはたゞ引續き蓄積することによつてのみこれを擴大しうるのである。』(カツツキ版、五二七—五二八頁。) 資本家的な生産の仕方に内在する諸法則に基づくところの、競争

資本の有する
絶對的な致富
の衝動

競争による強制的諸法則は資本家を無限の蓄積に驅り立てる

による強制的諸法則は、資本家に向つて『聊かの休息をも恵むことなしに、絶えず「進め！進め！」と耳語する。』（『賃労働と資本』、河上譯本、昭和二年刊、七七頁。）資本主義社會にあつては、大なる資本は競争によつて小なる資本を絶えず併吞する。資本家にしてもし存続しようとするならば、彼れは絶えず自己の資本を増大してゆかねばならぬ。立ち停まつてゐるといふことは没落することを意味するので、絶えず前進する以外には自ら存続する途はない。これは個々の資本家の意志から獨立してゐるところの・そして彼れがその一構成成分となつてゐるところの・資本主義的な社會的機構の強制命令である。

資本家の消費は資本に對し彼れの借方として計算される

『かくの如く、資本家の行爲は、彼れにその意志と意識とを賦與してゐる資本の機能にすぎぬのだから、彼れ自身の私的消費は彼れの資本の蓄積に對する盗みとされる。』イタリー式の簿記で資本家の私的消費を資本に對する借方に記入するのは、資本の人格化としての資本家の精神の正直な發現である。

以上の如きが、人格化された資本としての資本家の本來の姿である。だが、『資本家的な生産の仕方の・蓄積の・富の・發展につれて、資本家は單に資本の人格化されたものだけではない。彼れの資本が増殖されるにつれて、それから生じる剩餘價値も次第に莫大なものとなり、彼れが如何にそれを奢侈的に浪費しても、相對的には剩餘價値の一小部分にすぎざるものとなり、如何なる奢侈も彼れの資本の急速なる増大を妨げえないことになる。かくて舊い型の古典的な資本家と異なるところの、近代化された資本家が生じる。

近代化せる資本家

『資本家的な生産の仕方の歴史的端初においては、——そして如何なる資本家的成上り者も個別的にはかゝる歴史的段階を通過するのであるが、——致富の衝動と貪慾とが絶對的な情慾として支配的であつた。しかるに資本家的生産の進歩は、たゞに諸々の享樂の新たな世界を作り出すばかりでない。それは投機と信用とによつて飛躍的な致富の數限りなき源泉を開く。』一定の發展段階に達すると、慣習的になつてゐる程度の浪費は、世間にその富を示して信用を得るために、

資本家の驕奢
は彼れの蓄積
を制限するこ
となくして益
々増大するこ
とになる

資本家の驕奢
に關する若干
の實例

營業上の必要とすらなつてくる。『奢侈は資本の代理者たる費用の一部となる。』かやうにして、剩餘價値の一部分を奢侈的に浪費することは資本の蓄積と兩立しうるやうになるのであり、その點において、剩餘價値の量的増加は、ある點まで進むと、一の質的變化を起すのである。恰も一定の人の所有に屬する貨幣がある分量以上に達すると、その人をして一の産業資本家たらしめることにより、手工業時代の親方と異なり、筋内労働に従事することなくして、身分相應の生活をなすをえせしめると同じやうに、一定の人の蓄積せる資本がある分量以上に達すると、その人をして近代化せる資本家たらしめることにより、個人的消費を節約することなくして、なほ益々資本を蓄積することを可能ならしめるに至るのである。『資本家の驕奢は彼れの蓄積と共に、一方が他方を制限するの必要なくして、益々増大する。』資本家的生産の蓄積の・富の・發展につれて、かやうな歴史的變化が起ると共に、今日においても各々の資本家的成上り者は個人的にかる歴史的段階を通る。それは胎兒が母の體內にあつて、生物進化の歴史的段階を繰返すと同じである。

私はかつて『社會問題研究』（大正十年八月刊、第二十四冊、通冊八一八頁以下）に、ある著述の一部を次の如く抄譯したことがある。（ステツニングの譯したミルホードの『社會主義への進軍』、一九二〇年刊。）『資本家の驕奢が彼れの蓄積の増大と共に、その一方が他方を制限するの必要なくして、』如何に益々増大しつゝあるかの實例として、これを茲に轉載しておく。

『一九一四年度における米國所得税の報告を見ると、年五千萬フラン（一フランは約三十九錢に當る）以上の所得を有つてゐるものが二十人ある、すなはち五分の利率で計算すれば、少くとも十億フラン以上の財産を有つてゐるものが二十人ほごあるわけだ。その中で、キリアム・ロックフェラの課税所得は六千五百萬フランであり、（新聞紙の報道によれば、一九二五年度におけるロックフェラの所得税額は六百二十八萬八千弗であるといふ。即ち納税額だけが日本の貨幣に直して千二百餘萬圓——一日につき約三萬圓づゝ——になるのである。大正十四年九月八日の『大

『阪毎日新聞』「カアネギーのは七千五百萬フラン、ジョン・ロックフェラー——石油王たる大ロックフェラー——のは五億フランであつた。五億フランの所得といへば、五分の利廻と見ても、大ロックフェラーの財産は少くとも百億フランに上るわけだ。……吾々の取扱ふところは何十億といふ計數だが、諸君はその十億といふ計數をはつきり觀念することが出来るか？ ……二十世紀に入つてから、時計の振子が秒を打つた數が、まだ十億に達せぬのである。それが十億に達するのは、今から更に十數年を経て一九三四年の九月十日の午前一時四十六分十秒になつた時のことである。だから一秒毎に一フランづゝ積んで行つても、三十四年あまり経てやつと十億フランに達するわけだ。ところがロックフェラーの財産は、更にその十倍の百億フランに上ぼつてゐるのである。一フランの銀貨の重さは五グラムである。だから十億フランの銀貨の重さは五百萬キロになる。一貨車の積載量一萬キロとして、それを運ぶには五百貨車を要し、列車の長さは三・五キロメートル（約三十町）に及ぶわけだ。ところがロックフェラーの全財産を銀貨に直して貨車に積むと、更にその十倍になるのである。全財産がそれだけあつて、それから年々五億フランの所得を生む。年に五億フランといへば、一日に百二十七萬フラン、一分間に九百五十一フラン、一秒間に十六フラン弱の割合である。

『かくの如き驚くべき富の集中に伴うて、他方には恐るべき富の浪費がある。一九〇八年一月二十八日のル・マタン紙の記事によれば、「昨日ヴァンダビルト嬢が結婚した。當日の花飾だけの費用が二十五萬フランであつた。」一九〇七年十二月三十日のル・ジヨルナル紙に載すところの紐育からの電報によれば、「フィラデルフィアにおける最富豪の銀行家の一人たるジェイムズ・パウルは彼れの娘の初見參のために、ニューヨーク市で素晴らしい舞踏會を催した。その費用は五十萬フラン以上で、そのうち花に費した金額が十二萬フランであつた。當夜最も來客の眼を驚かしたのは、南アメリカやインドから採集してきた極く珍らしい澤山の蝶を大廣間に放つたことである。」

資本の蓄積は
制慾に基づく
との説

コレクテュール・プール・ツィの一九一〇年度のクリスマス號を見ると、富豪の玩具のことが書き集めてある。「一九〇八年、ロスアンゼルスの大地主なるアーチバルト・シャロンの娘は、恐らく世界にまたとなからうと思はれる立派な人形を貰つた。先づ第一に、その人形の顔は、米國の有名な彫刻家ジョウ・タイスン氏が入念に持えた蠟細工である。それから人形の胸には蓄音器が隠してあつて、唇や眼を動かしながら、色々な面白い話をする仕掛になつてゐる。またその背にある鍵を廻すと、人形は一人て歩くやうになつてゐる。そればかりでない、人形にはトランクが三つ揃へてあつて……その中には有名な裁縫師の持えた立派な衣裝が十重ねと、その外、……帽子だの、靴だの、手袋だの、寶石だの、様々のものが取り揃へてある。更にまた、その人形の寢室が高價な木材で出来てゐて、それには電燈や呼鈴が附いてをり、色々な種類の家具や銀製の化粧道具などが揃へてある。この人形の費用として拂はれた金額は、八千ドル以上であつたと云ふ。……もとヴァンダビルト嬢たりしホイットネー夫人の子供は、最初のクリスマスの贈物としてガラガラを貰つたが、それは象牙の上へ金や寶石を被せたもので、その端へ小さな金の鈴がいくつか下げてあつた。……これは八百ドルかゝつたものである。この子供は、次のクリスマスの時には何を貰ふか、それはその時になつて見なければ分らぬが、まだ二度目のクリスマスをも迎へぬのに、はや大變な玩具をもつてゐる。この子供は両親につれられて昨年フランスに來たが、そのとき玩具につけた保険金額は十二萬五千フランであつた。……カアネギーが第五回のクリスマスの贈物として、彼れの小さな娘にやつたものは、どんなものであつたか、諸君は知つてゐられるか？ それは一大宮殿だ。……建築費は千二百五十萬フランで、室の數は八十ある。それには二階に互つた繪畫陳列室があり、十萬フランの價あるオルガンの備へ付けられた音樂室もある。……この小さな百萬長者の娘のために三十五人の召使が雇はれてゐる。』

正流派經濟學は、一方においては、資本家階級の蓄積の結果および原因を、他方においては、その消費の結果および

原因を、眞に偏見なく攻究した。しかるに資本家的生産の發展に伴ひ、資本家階級における驕奢は前述の如くに増大すると同時に、労働者階級はまた次第に一定の階級的自覺に到着し始める。今や經濟上の問題を科學的に研究することなく、資本を辯護することが必要となつた。經濟學のうちに倫理學が持ち込まれた。知識は従となり、感情は主となつた。

これをヨーロッパの歴史に當てはめていへば、一八三〇年の七月革命をもつてその轉換期となすことが出來よう。この革命後間もなく、『都市プロレタリアートはリオンにおいて警鐘を打ち鳴らし、農村プロレタリアートはイギリスにおいて火を放つた。海峽のこなたにおいてはオウキン主義が、海峽のこなたにおいてはサン・シモン主義ならびにフリーエ主義が蔓延した。』（カウツキー版、五三二頁。）『その時以來階級闘争は、實際的にも理論的にも、愈々益々あからさまな威嚇的な形態を取つてきた。それは科學的ブルジョア經濟學の弔鐘を鳴らした。今ではもはや、この學理が正しいか、あの學理が正しいかが問題ではなくて、それが資本のために役立つか害になるか、好都合であるか不都合であるか、警察の忌諱に觸れるかどうか、問題であつた。利害を超越したる研究の代りに御用的な泥仕合が現はれ、囚はれざる科學的觀察の代りに辯護のための疚しき心と惡しき意圖とが現はれた。』（第二版への跋文、吾々の譯本、二〇頁。）そこで『ナソー・キリアム・シーニョアは、彼れがマンチェスターにおいて、資本の利潤は支拂はれざる「最後の十二時間目の労働時間」の生産物であることを發見した丁度一年後に、今一つの發見を世に發表した。彼れは勿體ぶつて言つた、「私は生産用具として觀察された資本なる語に換へるに、制慾なる語をもつてする」と。これは實に俗流經濟學の「發見」の無比の見本である。』すなはちシーニョアに従へば、かのロックフェアラが、一日に百二十七萬フラン、一分間に九百五十一フランづゝの割合で流れ込んでくる剩餘價値の全部を消費しないのは、彼れの『制慾』にもこづくのであり、その制慾の美德に對する報酬として、年々歳々、彼れは益々多くの剩餘價値を獲得するのである。なんと善い制慾ではないか？もしロックフェアラにして、一日に百二十七萬フラン、一分間に九百五十一フランの所得をば、絶え間なく個人的消費のた

シーニョアの
制慾説

經濟學へ道德
論が持ち込ま
れる

日本における
實例

めに費してゆかなければならぬ義務を負はされたならば、如何にその義務を果すべきかにつき、彼れは狂氣するであらう。『あらゆる人間の行爲はその反對のものについて「制慾」と見られうるといふ簡単な反省をば、俗流經濟學者は一度たりともしたことがない。飲食は斷食の制慾であり、歩くことは立つてゐることの制慾であり、労働は怠惰の制慾であり、怠惰は労働の制慾である、等々。これらの諸君は、スピノーザの *Determinatio est negatio* 「斷定は否定において成り立つ」について、一度考へて見たら可からう。』（第二版への補註、カウツキー版、五三二頁。）

シーニョア流の考へ方に従へば、人間のすることは何でも彼れでもみな何等かの制慾になり、誰でも彼れでもみな何等かの制慾をしてゐることになる。資本家的生産が發展するにつれて、經濟學の研究材料は始めて十二分に展開されるが、しかしそれと同時に、經濟學はまた科學的に研究されえなくなる。かつてドイツにおけると同じやうに、我が日本に於ても、經濟學は全く外來科學であつた。經濟學の教師たちは、自己に縁遠い問題について、外國の學說を請け賣りすることを餘儀なくされた。しかし世界大戰を一期として、日本の資本家的生産が跳躍的な發展を遂げるや否や、すなはち充分に成長したる資本家的社會が眼前に展開されるや否や、労働者階級は一定の階級的自覺に喚びさまされた。『危険』思想が起り、プロレタリアートの黨が擡頭しはじめた。かくて手近かに材料が出来ると同時に、經濟學の教師どもは、この危険思想と相撲をとるべく、*bezahlte Klopffechtere*（御用的泥仕合）の舞臺に驅り立てられた。日本において、經濟學に道德がはいり込んで來たのは、この時からである。『勞賃の經濟的および道德的性質』が説かれ、『利潤の經濟的、および道德的性質』が説かれるに至つた。（例へば學士院會員、田島錦治氏の著作『勞賃と利潤』および『經濟と道德』を見よ。）しかしロックフェアラが一日に百三十七萬フランの所得を得つゝある今日においては、——資本の蓄積の増大に伴ふ剩餘價値の法外なる増大が何人の眼にも明かとなりつゝある今日においては、——これらの所得を資本家の制慾によつて説明することは、何としても滑稽になつてきた。そこで俗流經濟學者は、資本家の得つゝある法外な剩餘價値の辯護を、その稀有の能力に見出すに至つた。

官許經濟學の
吊鐘が鳴りひ
びく

「これもまた俗流經濟學の發見の無比なる標本の一つである。」彼等は資本家の獲得しつゝある巨大なる利潤を説明して、これら資本家の能力に對する報酬だといふのである。しかしロックフェリアが死んでも、かゝる稀有の能力所有者が死んでも、その財産は彼れの子に移る。そして彼れは、彼れの父よりも猶ほより多くの所得をもつことになる。そして一切の仕事は『支配人』等々の手に一任される。しかし彼れの『企業能力は、これらの支配人の適不適を鑑別し、及び彼等をして彼れを信頼し彼れのために盡力せしむる勢力を含むものなり』とは、經濟學者の説明である。資本家的生産が發展したおかげで、大正十一年頃になると、かやうな『經濟學的眞理』を含める著書が、日本語においてさへ公刊されることになつて來たのである。何れの國においても、階級闘争の激化と共に、ブルジョア經濟學の吊鐘が鳴る。かくて、それ以來のブルジョア經濟學史は、たゞそれが益々ポンチ繪化する過程の歴史に外ならざるものとなつた。

【註】 『純利潤とは：：企業者の優秀なる企業能力による報酬にして：：謂はゆる企業能力とは：：取締の任務に超越せる能力なり。取締の任務は企業者自身にこれを爲さざる場合には、有給支配人に委任するを得べし。而して企業能力はこれらの支配人の適不適を鑑別し、および彼等をして彼れを信頼し彼れのために盡力せしむる勢力を含むものなり。』田島錦治氏著『賃労働と利潤』、大正十一年刊、一二二頁。）

剩餘價値その
ものの大きさ
の變動

本章を終るに臨み、最後に一言すべきことは、蓄積の大きさを決定する諸事情のうちには、以上述べたものの外、剩餘價値の生産に關する諸事情が含まれるといふことである。けだし『吾々はこれまで、剩餘價値の大きさを與へられた大きさのものとして觀察した。かゝる場合には、蓄積の範圍を決定するものは、剩餘價値の收入と追加資本への分割である。ところが追加資本は、かゝる分割の割合には變動なくとも、剩餘價値そのものの大きさの變動につれて變動する。八〇パーセントが資本化され、二〇パーセントが消費されると假定するならば、剩餘價値の總量が三千ポンドであるか千五百ポンドであるかに従つて、蓄積される資本は二千四百ポンドか千二百ポンドかになるであらう。それゆゑ蓄積の大きさ

の決定については、剩餘價値の分量を決定する總ての事情が一緒に働く。』だから蓄積の大きさを決定する事情のうちには、前に述べた剩餘價値の收入と資本とへの分割とは無關係な、諸々の事情が含まれてゐるわけである。第二十二章の第四節はすなはちこれらの諸事情を観察せるものであるが、こゝにはしばらく之を省略しておく。

第二十三章 資本家的蓄積の一般的法則

一 資本の構成に變化なき場合に、蓄積に伴うて

生じる労働力に對する需要の増大

本章での問題

『本章において吾々の取扱はんとするところは、資本の増殖が労働者階級の運命に及ぼす影響である。この研究にとつての最も重要な要素は、資本の構成・ならびにそれが蓄積過程の進行中に受けるところの變化である。』マルクス自身が斯様に本章での問題を規定してゐる。吾々はすでに以前の章において、『再生産の過程としての資本家的生産過程は、たゞに商品を生産するばかりでなく、剰餘價值を生産するばかりでなく、それは資本關係自體を、一方の側には資本家を、他方の側には賃労働者を、生産し且つ再生産する』ことを見た。またかゝる再生産が擴大される規模において行はれるにつれ、剰餘價值の量的増加は、資本家の驕奢をして彼れの蓄積を制限することなしに益々増大せしめる事をも見た。今こゝでは、これらの過程がプロレタリアートの量的増大を伴ふと共に如何にその質的變化を起すかを研究される。そのために、資本の増大もまた單にその量的方面からでなく、質的方面から觀察され、蓄積過程に伴ふ資本の有機的構成の變化が明かにされる。不變資本および可變資本なる獨特の範疇に基礎づけられたこの資本の有機的構成なる範疇は、資本家的生産のもとにおける生産諸力と生産諸關係との間における矛盾撞着を反映するものであり、先きに吾々が第一章に見たる商品生産に含まれる矛盾は、こゝで最も尖鋭化した展開を見る。かくて労働者階級の生活は耐ふべからざるものとなり、資本家的秩序の弔鐘が鳴りひびくことになる。かくの如きが本章での問題である。

資本構成の意義

資本の價值構成と技術的構成

資本の有機的構成の變化

吾々は先づ資本の構成について一應の説明をなさねばならぬ。資本の構成には二重の意味がある。その一は、價值の側から見た資本の構成であつて、それは總體の資本が不變資本（または生産手段の價值）と・可變資本（または労働力の代價として支拂はれる價值すなはち勞賃の合計額）と・に分割される比によつて定まる。マルクスはこれを名づけて、資本の價值構成と云つてゐる。ところで資本が生産過程において實際の働きをなす場合の實材の方面から見ると、すべての資本は生産手段と生ける労働力とに分たれる。この實材の側から見たものが、第二の意味の資本の構成であつて、それは、一方においては利用される生産手段の分量と・他方においては斯かる生産手段の利用に要する労働の分量と・の間の比によつて定まる。マルクスはこれを第一のものと區別するために、資本の技術的構成と名づけた。これら二様の意味における資本構成の間には、もとより密接な關係があるけれども、しかし二つのものが何時でも同じやうに變化するとは限らない。例へば紡績業に使用される資本の價值構成は、十八世紀の初めには、不變資本 1/2、可變資本 1/2 の割合であつたものが、今日では不變資本 7/8、可變資本 1/8 の割合に變つてきてゐるとしても、他方、一定分量の紡績労働が生産的に消化しうる原料の分量は、今日では十八世紀の初めに比べて優に數百倍に増加してゐるだらう。すなはち資本の技術的構成の變化速度に比べて、價值構成の變化速度は遙に後れてゐるのである。これは後に詳しく述べるやうに、労働の生産力が増加したために一方においては、一定量の労働によつて消化されうる生産手段の分量が著しく増加したけれども、他方においては、それらの生産手段の生産のためにより僅かな労働しか費されなないことになり、従つて著しくその價值を減少するに至つたからである。かやうにして、資本の價值構成と技術的構成とは別々のものであるけれども、しかし互に密接な關係を有つてゐる。そこでマルクスはその關係を現すために、有機的構成なる概念を設けた。即ち『資本の價值構成がその技術的構成によつて決定され、これが變動を反映するかぎり、』その價值構成を資本の有機的構成と名づけた。マルクスが單に資本構成の變化と言つてゐるのは、特別に斷つてない以上、いつでもこの有機的構成の變化を指すのであつて、そ

これは技術的構成の變化を反映してゐる價值構成の變化のことである。

『一定の生産部門（例へば紡績業）に放下されて・互に獨立してゐる多數の資本家の手で機能しつゝあるところの・多數の個別資本は、（例へば同じ紡績業を營むものでも、互に獨立してゐるところの各會社の資本は、）多少ともその構成を異にしてゐる。これら個々の構成の平均は、その生産部門における全資本の構成を現はす。最後に、あらゆる生産部門の平均構成の總平均は、一國の社會資本の構成を現はす。そして以下問題とするところは、結局において、かゝる社會資本の構成である。』（カウツキー版、五四九頁。）

『平均の社會資本より、より多くの割合の不變資本と、より少き割合の可變資本とを含む資本を名づけて、より高級な構成の資本といひ、これに反し、平均の社會資本より、比較的多くの餘地を可變資本に與へ、比較的少なき餘地を不變資本に與へつゝある資本は、これを名づけて、より低級な構成の資本といふ。最後に平均の社會資本と同様の構成を有する資本を、平均構成の資本と名づける。』（第三卷、第一分冊、エンゲルス版、一四二頁。）

【註】同一の技術的構成を有する資本も、異つた價值構成を有しうる。また同じ割合の價值構成を有する資本も、技術的構成の點では異なつた水準に位し、従つて労働の社會的生産力の發展における異なれる階段を表はしうる。『例へば、一方の資本は、生ける労働に比べてより多くの機械と原料とを使用するがために、 $60c+40v$ （不變資本六十と可變資本四十）から成立つてゐるのに、他方の資本は、多くの生ける労働（六十％）と、僅かな機械（例へば十％）と、労働力に比して僅かな且つ廉價な原料（例へば三十％）とを使用してゐるがために、 $40c+60v$ （不變資本四十と可變資本六十）から成り立つてゐるとする。』さうすると、これら二つの資本は、その技術的構成を異にすると同時に、その價值構成をも異にしてゐるのであるが、『この場合に、第二の資本の使用する原料および助成材料の價值が三十から八十に騰貴したとすると、たゞそれだけで價值構成における差異はなくなつてしまふ。何故といふに、

平均的構成お
よびより高級
な・またはよ
り低級な・構
成

さうなると、第二の資本の技術的構成には何等の變化が起らないにも拘らず、その價值は一十の機械、八十の原料、六十の勞働力から、すなはち $90c + 60v$ 「不變資本九十と可變資本六十」から成り立つことになり、従つて百分比からいふと、 $60c \times 40v$ 「不變資本六十と可變資本四十」に等しくなるからである。」（第三卷、第二分冊、エンゲルス版、二九九頁。）

さて、これだけの前置をしておいて、これから再び資本の蓄積に眼を向けよう。この場合にも、吾々は先づ最も簡単な場合を觀察せねばならぬ。だから最初の問題は、蓄積の進行のために資本の構成が變化せざる場合のことである。かかる簡単な場合を觀察した後に、資本構成の變化が導き入れられる。

「資本の増殖は、その可變的部分すなはち勞働力と置換へられる部分の増殖を含む。追加資本に轉形される剩餘價值の一部は、いつでも可變資本に、すなはち追加される勞働元本に、再轉形されねばならぬ。」しかし追加資本の如何なる割合が可變資本となるかは、資本の増殖に伴ふ勞働に對する需要増加の率に・従つて勞働者階級の運命にとつて・密接な關係を有する問題である。吾々は先づ最も簡単な場合から觀察するであらう。すなはちたゞ資本の増殖が行はれるのみで、他の事情には何等の變化なく、従つて資本の構成も（その價值構成も技術構成も）不變であり、一定分量の生産手段すなはち不變資本は、これを運用するために、いつでも同じ分量の勞働を必要とすと假定するであらう。

實際においては、多くの場合に、資本の量的増大はその質的變化——その構成の高級化——を伴ふ。けれども、吾々はいま研究の順序として、資本の量的増大に伴ふその質的變化を捨象し、資本は同じ構成を維持しつゝ、只だその分量のみを増加するものと假定する。かかる假定のもとにおける資本の蓄積は、蓄積過程における「特別の一段階」たると同時に、またその一エレメントである。如何なる生産部門においても、資本の蓄積は最初先づこの單なる量的増加として行はれるが、たとひそれが資本構成の變化を伴ふことになつてからでも、量的増加は依然その一つのエレメントとして含まれる。

だから茲に吾々の先づ研究せんとする單なる蓄積は、事實上また理論上、資本蓄積の端初の形態である。

労働の需要は
増加し労働は
騰貴する

さて以上の假定のもとにおいては、言ふまでもなく、『資本が増加するにつれて、また資本が急激に増加すればするほどより急激に、労働に對する需要および労働者の生活資料の元本が明かに増加する。』だから、もし資本の増殖が急激に行はれ、その結果、労働に對する需要の増加が供給の増加よりもより急激に行はれるやうなことがあつたならば、労働賃は次第に騰貴することにもなるであらう。このことは、上記の假定が不變に繼續されるならば、早かれ晩かれ、結局は事實となつて現はれることである。けだし『資本は年々剩餘價值を生産して、その一部を年々元の資本に加へてゆくのであるから、〔資本家的生産が行はれる限り、かゝる蓄積は年々に行はれる、〕 またこの追加資本そのものは、すでに機能を發揮しつつある資本の規模が擴大されるにつれて年々増大してゆくのであるから、最後にはまた、例へば、新たに起つた社會的欲望などの結果としての・新市場や資本放下の新方面やの開発といふが如き、致富衝動の特別な刺戟が起ると、資本と収入とへの・剩餘價值または剩餘生産物の分配の割合を變へただけで、蓄積の規模は急に擴張されうるのであるから、』結局において資本増殖の速度は、労働者數の増加よりもより急激に行はれるのであり、労働者に對する需要は、その供給に超過するに至りうるのである。

かゝる有利な
場合において
も、資本家的
生産の根本性
は動かない

現にイギリスにおいては、十五世紀の全體および十八世紀の前半において、かやうな事態が起つた。また世界大戰の際における日本の事態も、略ぼそれに同じきものがあつた。しかし『賃労働者が自らを維持し且つ増殖するための諸事情が多少とも有利になつたとて、それは少しも資本家的生産の根本的性質を動かすものではない。單なる再生産が絶えず資本關係そのものを・すなはち一方の側には資本家を・他方の側には賃労働者を・再生産すると同じやうに、擴大された規模における再生産すなはち蓄積もまた、擴大された規模の資本關係を・すなはち一方の極にはより多くの資本家またはより大なる資本家を・他方の極にはより多くの賃労働者を・再生産する。労働力は價值増殖の手段として絶えず資本に合體さ

資本の蓄積は同時にプロレタリアートの増加である

れなければならぬものであり、資本から解放されえないものであり、その資本に對する隷屬は、これを賣り付ける相手となる個々の資本家が代はるといふことによつて、たゞ隱蔽されるに過ぎぬのであるから、この労働力の再生産は、事實において、資本そのものの再生産の一要素を形成する。だから資本の蓄積はプロレタリアートの増加である。』資本の蓄積に伴うてプロレタリアの生活状態が多少とも有利になる場合があるとしても、プロレタリアはいつまで経つてもプロレタリアであるから、資本が増殖され、その労働に對する需要が増加するといふことは、畢竟、資本に隷屬するプロレタリアが増加するといふことに外ならぬ。その意味において、資本の増殖はすなはちプロレタリアートの増殖である。

【註一】 このところの脚註で、マルクスはその初期の作物『賃労働と資本』に参照を求めてゐる。私は、カツキキがその補註で指定してゐるよりもつと前の頁から、こゝに關係あるかぎりの文句を引用しておかうと思ふ。——『労働（力）はいつでも商品であつたわけではない。労働はいつでも賃労働すなはち自由労働であつたわけではない。奴隷は彼れの労働（力）を奴隷主に賣つたのではない。……奴隷は彼れの労働力と一緒に、一纏めにして、彼の所有者に賣られる。……農奴はたゞ彼れの労働（力）の一部分のみを賣る。彼れは土地の所有者から勞賃を受け取るのではない、却て土地の所有者が彼れから一定の貢を徵收するのだ。農奴は土地に隷屬し、彼れは土地の領主に向つてその收穫を納める。これに反し、自由労働者は自分で自分を賣る、しかも實に切賣りするのだ。彼れは八時間、十時間、十二時間、十五時間づゝの彼の生命をば、けふもあすも、それを最も高く買ふ人に、——原料、労働用具、および生活資料の所有者に、——すなはち資本家に賣り渡す。労働者自身はいつれの所有者にも屬せず、また土地にも隷屬してゐないが、しかし彼れの日々の生命の八時間分、十時間分、十二時間分、十五時間分づゝが、これを買つた人に屬するのである。労働者は、いやと思へば何遍でも、自分の雇はれてゐる資本家のところを去る。そして資本家もまた、自分に都合が好いと思へば何遍でも、——もはや労働者から何等の利益も引き出しえないか、または豫期の利益

を引き出しえなくなれば、いつでもすぐには、彼れを解雇する。けれども労働者の所得の唯一の源は、労働〔力〕の賣却にあるから、彼れにしてその生存を見棄てざるかぎり、彼れは買手の全階級すなはち資本家階級から縁を切るわけにゆかぬ。彼れは甲または乙といふブルジョアにこそ隷屬してゐないが、しかしブルジョア階級に隷屬してゐる、そしてそのために、誰かのところへ自分を賣るといふこと、すなはちこのブルジョア階級のうちに誰か一人の買手を見出すといふことが、彼れの仕事となる。』

以上の一文は、さきに引用した資本論のうちの一句『労働力は價值増殖の手段として絶えず資本に合體されなければならぬものであり、……その資本に對する隷屬は、これを賣り付ける相手となる個々の資本家が代はるこいふことによつて、たゞ隱蔽されてゐるにすぎぬのである』云々の註釋にあたる。なほ次の一節は、『資本の蓄積はプロレタリアートの増加である』といふ一句の註釋となるものである。

『資本と賃労働との間における交換には、如何なることが起るのか？ 労働者は彼れの労働〔力〕と交換して生活資料を手に入れる。しかるに資本家は彼れの生活資料と交換して、労働を・労働者の生産的活動を・創造的の力を・——それによつて労働者は、たゞに彼れが消費したところのものを回収するのみでなく、蓄積された労働〔即ち資本〕に對し、以前そのものが有つてゐたよりも、より大きな價值を與へるところの力を——手に入れる。かくて労働者は資本家から現存してゐる生活資料の一部分を獲得するのだが、その生活資料は彼れにとつてどんな役に立つのか？ それは直接の消費にだ。しかるに、もし私が生活資料を消費したならば、……それは消費されると同時に、私から失はれてしまつて、恢復することはできなくなる。けれどもかの大切な再生産的の力は、労働者の獲得する生活資料との交換により、正に労働者から去つて資本の手に移る。かくて労働者はそれをば彼れ自身のために失うてしまふのである。』……かやうなわけで、資本は賃労働を前提とし、賃労働は資本を前提とする。兩者は相互に條件づける、兩者は

相俟つて發生する。

『ある棉花工場における一労働者、彼れはたゞ綿製品を生産するだけであるか？ いな、彼れは資本を生産する。彼れは、新たな價值を作り出すため彼れの労働を支配することに重れて役立つところの、價值を生産する。』

『資本は、それが労働〔力〕と交換せられ、賃労働者を活動せしめることにおいてのみ、その増殖を遂げうる。賃労働者の労働力が資本と交換されたならば、それは必ず資本を増殖し、労働者を奴隷となしつゝ、ある其の力を強めることになる。だから資本の増加は、プロレタリアートすなはち労働者階級の増加である。』

【註二】 マルクスは、更にこのところで、プロレタリアにつき、次の如き脚註を加へてゐる。『經濟上プロレタリア、さいふのは、「資本」を生産し且つ増殖し。しかも Monsieur Capital〔資本氏〕——これは嘗てペクルールがこの人に命名したものの——の價值増殖慾に對して過剰となるや否や直ちに街頭に投げ出されるところの。かの賃労働者を意味するに外ならぬ。』（カウツキー版、五五〇頁。）

以上假定したやうな労働者階級にとつて最も有利な条件のもとで資本の蓄積が行はれる場合には、労働者の資本に對する隷屬は我慢のできる形態をとる。その隷屬は、インテンシヴに深くなるのではなく、エキステンシヴに擴がるのである。個々の労働者に對する資本の搾取がひどくなるのではなく、資本により搾取される労働者の頭数が殖えるのである。労働者の造り出す剰餘生産物の總量は益々増加し、追加資本に轉形する剰餘生産物の總量もまた益々増加するけれども、それと同時に、労働者の造り出す生産物より大なる部分が、勞賃の形で労働者の手許に復歸してくるので、労働者はその享樂の範圍を擴張することができ、そこで好景氣の際には、上等のタバコをのむこともでき、細君に帶を買つてやることもでき、あるひは金時計に金鎖をぶらさげたり、あるひは多少の貯金をさへすることもできる。『しかし、より善き着物と食物と待遇と、ならびにより多くのペクリウムとは、（ペクリウムとは、獨立の人格を具へてゐない者が、家